第8節　まとめにかえて　－今後の課題と展望－

さて、今まで永きにわたって「千提寺・下音羽の吉利支丹遺物」について論じてきた。まずは大正八年(1919)における千提寺の「上野マリヤ」墓碑を嚆矢とする一連の吉利支丹遺物の「発見の経緯」について述べ、そののち、遺物発見以来の約八十年間にわたる各方面からの「研究史」を整理して、現在における到達点というものを確認した。そしてその「研究史」を踏まえた上で、先学の研究に導かれながら、もう一度、「発見遺物の各論」をおこない、しかもそれを資料の「分野別概説」としてではなく、「発見されたおりの原初の一括関係を重視する」という観点から「地区別」・「戸別」の概説を試み、できるだけ従来扱われなかった、あるいは披瀝されなかった「新知見」を紹介できるように意識した。換言すれば「吉利支丹遺物各論」では、「各家」所蔵の遺物解説をひととおり試み、そのおりには有形の「画像」や「彫刻」だけではなく、無形の「口頭伝承」すなわち「宗教儀礼」や「祈禱文」をも視界にとりいれることにした。前者の有形部分については、作品を単に「形象的に」あるいは「図像的に」読み取るということで満足しないで、制作者の意図のきわめてはっきり読み取れる文字情報、わけても「ラテン語」の情報に挑戦してみた。結果として、たとえば東家と大神家に分有されている六枚の「銅版画天使讃仰図」に登載されている『聖書』の出典を明らかにしえただけではなく、「天使像」頭上の「円弧」の上に綴られたラテン文字を解読することによって、その六枚の「銅版画の配列順序」を決定しえたことなどは欣快なことがらのひとつであった。また後者の無形の「口頭伝承」についても、これを書き留めつつ注意を払っておいたことが、「浦上吉利支丹」の口碑伝承とも関連して、後程の「吉利支丹組織論」の考察に一条の光を投げかけるようになろうとは、その時には予想すらしなかった。

さて「発見遺物各論」のあとは、それら「遺物の年代特定」と「史的状況」を確認した上で、それらの「遺物」の中に、彼ら「ローマ・カトリック教会」の傘下にあった「イエズス会」の人々の「崇拝の形式」が、いったいどのように表れていたかを追いかけてみた。その結果、紙本著色「マリア十五玄義図」や銅板油彩「キリスト像」、「厨子入象牙彫キリスト磔刑像」や「木造キリスト磔刑像」、「真鍮製十字架キリスト磔刑像」や「アグヌス・デイの布袋」、「象牙彫マリア像」や亜鉛板打出油彩「ロレータ聖母子像」や銅板油彩「聖母子像」などが示しているように、彼らの「崇拝の対象」は、「三位一体」の「玄義」を中心にすえたところの、それを前提にした上での、御子である「キリスト」や、その母である「マリア」もしくは「聖母子」に注意をむけた作品が圧倒的に多いことが明らかとなった。「天上の父なる神」が描かれているのは、「マリア十五玄義図」(東家・原田家本)の「聖母受冠」の場面と「銅版画天使讃仰図」の「主禱」の場面の僅かに二種三例しか知られておらず、「第一原因」であり、「萬物の創造主」である神のその扱いは不当に、あるいは公正を欠くほどに、矮小化されてしまっている。

また彼らの「崇拝の方式」を支えた最大の根拠は「イエス・キリストの権能の後継者は使徒ペテロであり、その使徒ペテロの権能はローマ教皇に継承されている」との「伝統的図式」と1546年の「トリエント公会議」で公認された「『ラテン語ウルガタ訳聖書』の採用と〔外典〕の導入」にあったと考えてよいけれども、発見された「銅版画天使讃仰図」の中には「マタイ」・「マルコ」・「ルカ」・「ヨハネ」による「福音書」や「ガラテア」・「エフェソス」人への手紙などからのラテン語聖句の引用があり、その内容はまさに『ラテン語ウルガタ訳聖書』からの引用であることが判明した。また中谷家で発見された『どちりいなきりしたん』の中にも、「マタイ」六章や「出エジプト記」二十章からの「和訳」を

認めることができるが、ただし「第七　でうすの御おきての十のまんだめんとの事」（十戒）の中において、第二戒の「汝自己のために何の偶像をも彫むべからず又は上は天においてある者下は地にある者ならびに地の下の水の中にある者の何の形状をも作るべからず之を拝むべからずこれに事ふべからず」を削除し、代わりに第十戒を二つに分けて数合わせをしている事実も明らかとなった。『ラテン語ウルガタ訳聖書』自体はこの第二戒を削除してはいないが、であるとすれば『どちりいなきりしたん』がこれを削除しているのはいったい何故なのであろうか。厳格な信仰者の立場からすれば、「神の御ことば」の削除など、決してあってはならない、許されざる、神の前に不遜な行為の一として映じるかもしれない（〔ヨハネ黙示録」〔22：18,19〕）が、果たして押し迫る迫害を予期しての「日本イエズス会」の組織としての自己防衛策であったのか、それとも「宗門改め」や「寺請制度」など、次第に周辺から打ち寄せて来る波状的な「禁令政策」に対するぎりぎりの良心的抵抗のひとつのかたちであったのか、そのあたりは十分に検討されてよい「現代史的課題」でもある。

そのほか『ラテン語ウルガタ訳聖書』が、その翻訳にあたって『七十人訳聖書』の後代の写本傾向に倣ったために、「神」の固有の御名「IEHOVAH」が正しく保存されず、「神」（デウス）や「主」（ドミヌス）といった他の神々との区別のない一般的称号が用いられてきたことは先にのべたとおりである。江戸幕府による「鎖国政策」と「切支丹禁制」により、この神の固有の御名「エホバ」が我が国に伝えられるまでにはさらに260年近くを要し、明治６年(1873)における「キリスト教禁制の高札の撤廃」のあと、明治10年(1877)における『新約聖書馬可傳』の発行（写真41）、明治13年(1880)における『新約全書』の公刊などを経て、「エホバ」なる至高者の聖名が『ヘブライ語聖書』の「マソラ本文」から正しく興されて、日本語の『舊約全書』に初めて登載されたのは、実に明治21年(1888)のことであった（写真42）。「デウス」なる「人格神」を我が国に伝えたのは、ザビエルやヴァリニャーノらの優れたカトリックの人々による功績であり、またその『聖書』全体（「旧約聖書」は39冊、「新約聖書」は27冊の、合計66冊から成る）を「和訳」し、またその中に登場する創造者なる「デウス」が「エホバ」なる固有の御名をもたれる神であることを、我が国において初めて伝えはじめたのは、ヘボン、フルベッキ、ファイソンといった敬虔なプロテスタントの人々による功績であったと言明して差し支えないであろう。

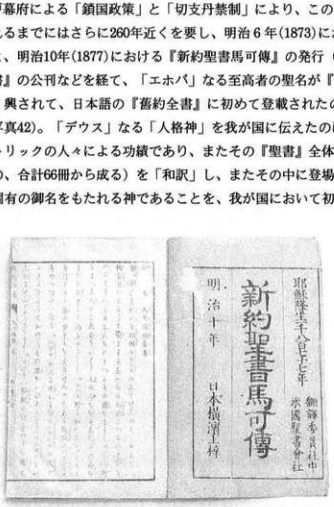


写真41　「新約聖書馬可傳」（明治10年　米國聖書會社　日本横濱上梓）〔白丁文庫所蔵〕

論の最後として、これら「吉利支丹遺物」の原初の分有形態と「口書」に残る「帳方」・「水方」・「聞役」のそれぞれの役割と所持品とを比較考量することによって、「千提寺・下音羽における吉利支丹組織」というものについて考えてみた。あれほどの永く厳しく苛酷な試練と迫害の中を、おおよそ260年の永きにわたって彼らが忠節を保ちえたのはいったいなぜであったろうか。その秘密は彼ら「信仰者自身の霊的資質」と、

それを強め、励まし、慰めた、機能する「地下組織」にあったと考えられるが、結論的にはその「信仰組織」について、「千提寺」に関しては中谷仙之助家を「帳方」に、東藤次郎家を「水方」に、また中谷源之助家を「聞役」に比定し、「下音羽」に関しては大神家を「帳方」に、原田家を「水方」に、井上家もしくは高雲寺を「聞役」に想定するという仮説を提示しておいた。今後、新資料が新たに発見される可能性もあり、また制度的な固定性が実証されているわけでもないので、確定的な結論とは言い難いけれども、将来の研究への道筋を示すひとつの参考的な考え方として披瀝しておいたのである。これが始まりであることは言うまでもない。

写真42　『舊新約全書』（明治16・21年版）〔白丁文庫所蔵〕

今回の研究は、あくまでも「千提寺・下音羽の吉利支丹遺物」に照準を合わせた地域限定的なものであったので、今後はこれらの成果を「京畿」すなわち「都教区」の中で、あるいは他の「下」・「豊後」など二つの教区をも含めた「日本イエズス会」組織全体の中で、連携的に位置付けていくとどうなるかという作業が求められることになるであろう。また慶長期における「吉利支丹墓碑」ひとつをとってみても、その墓碑に冠せられた「地名」は「佐保」・「銭原」など比較的近くのものほかに「上野」・「小泉」など少し離れた地域のものも含んでおり、これらが千提寺・下音羽の地域に集中して見いだされることの意味やその幾つかが曹洞宗の「高雲寺」で見いだされることの意味、また「聖フランシスコ・ザビエル像」や「マリア十五玄義図」あるいは「厨子入象牙彫キリスト磔刑像」や「ほろひんしあ」断簡など、「吉利支丹遺物」のうちの「優品」中の「優品」がこの地域で見いだされたことの意味なども、「吉利支丹大名」や「豪商」クラスの人物との関連の中で（彼ら自身の山間部への潜伏の問題をも含めて）追究してみることも、当時の人々の「信仰の本質」を問う上で重要な課題かと思われる。また今回の調査研究では「フランシスコ会」・「ドミニコ会」・「アグスチノ会」といった他の会派の活動の掘り下げが殆どできなかったけれども、一般に「南蛮屏風」と呼ばれている「南蛮人渡来図」や「南蛮人交易図」を子細に観察すると、この中に、時折、これらの会派の人々が描かれていることがあるので、今後これらの要素の析出についても、会派間の微妙な相異やその特色に着目しながら、注意が払われてよいのではないかと考えている。そのほか遺された数多くの「吉利支丹文学」から我が国における「聖書翻訳史」を辿ってみたり、またポルトガル生まれのイエズス会士ジョアン・ロドリゲス（1561−1634）が大著『日本大文典』（1608年）の中で試みた「日本の帝王と年数」、「世界の創造からわが主キリストまでの年数」などといった「年代学」に関する研究や「漢字の有する三種の『こゑ』に就いて」など「言語学」に関する研究にも深い関心があるけれども、時は限られており、今後の課題とするしか致し

方ない。

さて平成10年(1998)の2月には冒頭で述べたように吉利支丹墓碑の発見地「クルス山」に登った。4月には茨木市教育委員会の尽力により「上野マリヤ」墓碑等「吉利支丹墓碑」六基が市の有形文化財に指定された。5月には吹田市立博物館において「高山右近とその時代－北摂のキリシタン文化－」展が開催され、「聖フランシスコ・ザビエル像」を始めとする「千提寺・下音羽」発見の吉利支丹遺物十六点をはじめ、上智大学キリシタン文庫所蔵の『サカラメント提要』、松浦史料博物館所蔵の「豊臣秀吉伴天連追放令」、本山寺所蔵の「高山右近書状」などが多数展示されて、大きな益をもたらした。実に充実した企画展示であったと思う。7月にはおおよそ400年ぶりにポルトガルのリスボン国立古文書館から修復事業のために日本へ里帰りしていた「エヴォラ屏風文書」に偶々京都国立博物館内文化財保存修理所にて遭遇し、実見する機会に恵まれた。そのおり豊臣秀吉の佑筆であった茨木の安威志門（シモン）了佐のことやおそらくは日本最古の「福音書和訳」の手習い（ヨハネ8：12）にちがいない古文書（1580－1587年頃）に思いを馳せて楽しいひとときを過ごした。8月には高槻市立理蔵文化財調査センターにより「高槻城三の丸跡下層のキリシタン墓地の調査」結果が報道され、これにより、元和年間の修築時における大規模な盛土層の下から、天正15年(1587)の「秀吉による禁教令」以前の、蓋に「二支十字」の墨書を伴う「11号木棺墓」が発見されて、大きな興奮と反響を呼んだ。加えて同じ八月には平成十年度の大阪府文化財保護審議会が開催され、ここにおいて、審議委員の先生方との事前の調査成果を踏まえた上で、南蛮文化館所蔵の「イエズス会蒔絵螺鈿聖餅箱」一合およびH.トルセリーニの「フランシスコ・ザビエル伝」(初版：1594年；第2版：1596年）二冊を「大阪府指定有形文化財」に諮問し、さいわい11月に答申を得ることができた。またこの間の十月には、遠く長崎は南有馬の地において「島原の乱三百六十年記念事業」として、「シンポジウム『原城発掘』－西海の王土から殉教の舞台へ－」が開催され、「内乱」の考古学的および歴史学的分析に貴重な一石が投じられた。加えて11月には京都国立博物館で開催された「国宝修理装潢師連盟定期研修会」に出席し、そこにおいて「保存修理の現状調査と修理記録－マリア十五玄義図をめぐって－」なるスライド講演に耳を傾け、「今後の文化財の保存修理の在り方」を考えていく上での貴重な示唆を与えていただいたことも、ほんとうに有意義であり、幸いなことであった。

このようにこの一年をふりかえってみても、実に多くのことがらを諸先生方から学ばせていただき、また貴重な「書物」や「物品」との出会いもあり、それに伴い研究の進捗もあり、幸福に感じている。

まだ学生だった30年ほど前に、わたくしはある書物を読んでいて、次のような幾つかの言葉に行き当たった。「太陽、惑星、彗星から成るこの最も壮麗な体系は、理知ある偉大な存在者の目的と主権からのみ生じ得たものである」(アイザック・ニュートン)、「天を見あげるとき、全天に見える星が秩序正しく運行していることに驚嘆せざるを得ない。宇宙の天体は、来る夜も来る夜も、季節ごとに年ごとに、そして幾世紀を経ても、独自の軌道に従って天空をめぐり続けている。あまりにも正確に軌道を運行しているゆえに、天体の食は幾世紀も前に予告できるほどである…もし天体が何ら法則に従っていないとするならば、七つの大海を航行し、あるいは何の標識もない空を飛行する際の道しるべとはされなかったであろう」(セシル・ボイス・ハマン)、「合理的かつ科学的思考の多くの分野で、証拠としてしばしば受け入れられている事柄と同じほどに強力な、神の存在の証拠を見いだすことができる。最初の証拠は宇宙論の中にある。それは、自然の力で正確に支配されている秩序正しい宇宙の存在である。その秩序は配列者あるいは組織者の存在を示している。…人間の普通の経験からすれば、このような秩序は秩

序ある思考の産物である。企画力あるいは統制力が働かない場合、生ずるものは秩序ではなく、混乱である」(マーリン・ブックス・クレイダー)と。また「人間は一本の葦にすぎない、自然の中でもいちばん弱いものだ。だがそれは考える葦である。これを押しつぶすには、全宇宙はなにも武装する必要はない。…だから、わたしたちの尊厳のすべては、考えることのうちにある。…だから、正しく考えるようにつとめようではないか。ここに、道徳の原理がある。…道にはずれた連中は、きちんと道を守っている人たちにむかって、あなたがたの方が、自然から離れているのだと言う。そして、自分たちは自然に従っていると信じている。ちょうど、船に乗っている人が、岸にいる人の方こそ遠ざかっていくと信じるようなものである。どっちの方も、言うことは同じである。それを判定するには、ある固定した一点に立たなければならない」(パスカル)と。

そしてこれらの先人の言葉をよく黙想し、種々の検討をおこなった結果、そのとおりだと確信し、以来『聖書』に親しむようになった。

『聖書』の「イザヤ書」四十章には「草はかれ、花はしぼむ。エホバの息その上に吹ければなり。實に民はくさなり。草はかれ花はしぼむ。然どわれらの神のことばは永遠にたたん」(七・八節)とあり、神の永遠性に比して、われわれ人間が「少しのあいだ現われては消えてゆく霧のようなもの」(ヤコブ書4:14)であることを指摘している。これは今ある現実である。ただし「主は牧者のごとくその群れをやしなひその臂にて小羊をいだき之をその懐中にいれてたづさへ乳をふくまする者をやはらかに導きたまはん」(十一節)とも述べ、「自分の霊的必要を自覚している人たちは幸いです」(マタイ5:3)とも言われている。「エホバは地球のはるか上にすわり地にすむ者を蝗のごとく視たまふ」(22節)とあり、「エホバの目はあらゆる場所にあって、悪い者と善い者とを見張っている」(箴言15:3)とも宣言している。また「汝しらざるか聞かざるか、エホバはとこしへの神、地のはての創造者にして倦たまふことなく、また疲れたまふことなく、その聰明こと測りがたし。疲れたるものには力をあたへ、勢力なきものには強きを増し加へたまふ。年少きものもつかれてうみ壮んなるものも衰へおとろふ。然はあれどエホバを俟望むものは新なる力をえん。また鷲のごとく翼をはりてのぼらん。走れどもつかれず歩めども倦ざるべし」(28〜30節)とも述べて(写真43)、「義に飢え渇いているたち」(マタイ5:6)に対して、この「対処しにくい危機の時代」を生き抜いていくための「上からの実際的な知識と理解と知恵」と「力強い励まし」とを与えてくださっているのである。ぜひとも『聖書』

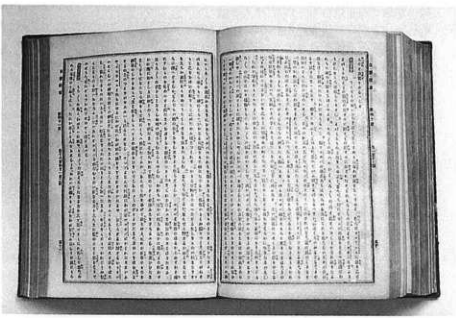


写真43　『舊約全書』「イザヤ書」40章より(「エホバを俟望むものは新なる力をえん」)

にひきつづき親しまれるよう、お薦めいたしたい。

「もろもろの天は神のえいくわうをあらはし、穹蒼はその手のわざをしめす。この日ことばをかの日につたへ、このよ知識をかの夜におくる。語らずいはずその聲きこえざるに、そのひびきは全地にあまねく、そのことばは地のはてにまでおよぶ……」（「詩篇」19篇１－４節より）。

本稿を成すにあたり、千提寺の東藤嗣・中谷茂・中谷孝・中谷栄の各氏、下音羽の大神敏治氏、免山篤氏、大阪府文化財保護審議委員の水田紀久・中村弘子先生、南蛮文化館の北村芳郎先生、そして久米真紀子、井藤暁子、望月直子、滝沢幸恵の諸氏、加えて東京大学総合図書館・京都大学文学部・吹田市立博物館・茨木市教育委員会・高槻市教育委員会等の諸機関からもご協力をいただきました。記して深く感謝申し上げます。（990118稿了）

参考文献

橋川正「北摂より発見したる切支丹遺物」『史林』第六巻第一号 1921 史学研究会
新村出・濱田耕作・梅原末治『京都帝国大学文学部考古学研究報告』1923 京都帝国大学
新村出『南蛮更紗』1924 改造社
新村出『南蛮廣記』1925 岩波書店
東藤次郎氏蔵本「吉利支丹抄物」（『珍書大観吉利支丹叢書』）1928 大阪毎日新聞社
中谷仙之助氏蔵本「ぎやどべかとる」（『珍書大観吉利支丹叢書』）1928 大阪毎日新聞社
中谷仙之助氏蔵本「どちりな・きりしたん」（『珍書大観吉利支丹叢書』）1929 大阪毎日新聞社
姉崎正治『切支丹伝道の興廃』1930 同文館
大阪府学務部「吉利支丹遺物」1931（『大阪府史蹟名勝天然記念物』第二冊）清文堂
濱田青陵『天正遣歐使節記』1931 岩波書店
新村出『南蛮文学』1931 岩波書店（岩波講座日本文学）
村岡典嗣・幸田成友『天正使節渡歐三百五十年記念珍籍展覧会』1932 丸善株式會社
奥野慶治『綜合清渓村史』清渓尋常高等小学校 1935（復刻版 1988）
奥野慶治「切支丹と三島郡」（『上方』第118号）1940
新村出『日本吉利支丹文化史』1941 地人書館
岡田章雄『南蛮宗俗考』1942 地人書館
新村出『吉利支丹研究餘録』1948 国立書院
比屋根安定『日本基督教史 全』1949 教文館
藤波大超『千提寺・下音羽の吉利支丹遺跡』1952
松田毅一「南近畿の切支丹」（樋口彰一編『切支丹風土記－近畿・中国篇－』所収）1960 宝文館
茨木市史編纂委員会「キリスト教文化」（『茨木市史』所収）1969
Hubert Cieslik「高山右近領の山間部におけるキリシタン」1976（『キリシタン研究』第十六輯）吉川弘文館
中谷茂『潜伏キリシタンの遺宝』1988
新村出・柊源一校注『吉利支丹文学集１』1993 平凡社
新村出・柊源一校注『吉利支丹文学集２』1993 平凡社
ルイス・フロイス著 柳谷武夫訳『日本史１－キリシタン伝来のころ－』1963 平凡社
村上直次郎訳 柳谷武夫編輯『イエズス会士日本通信下』1969 雄松堂書店
松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史３』1978 中央公論社
西村貞『日本初期洋画の研究』1945 全国書房
岡本良知『吉利支丹洋風画序説』1953 昭森社
西村貞『南蛮美術』1961 講談社
坂本満『初期洋風画』1973 至文堂
坂本満・吉村元雄『南蛮美術』1973 小学館
江口正一『踏絵とロザリオ』1974 至文堂
菅瀬正・北村芳郎『天正ローマ使節派遣四百年南蛮美術展図録』1982

坂本満ほか「南蛮美術総目録〔洋風画篇〕」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第75集)1997
神庭信幸「京都大学所蔵『マリア十五玄義図』の調査」(同上 第76集) 1998
望月直子『高山右近とその時代－北摂のキリシタン文化－』1998 吹田市立博物館
神庭信幸「保存修理の現状調査と修理記録－マリア十五玄義図をめぐって－」1998 国宝修理装潢師連盟
『THE CONCISE OXFORD DICTIONARY』1964 Oxford Dictionary Press
田中秀央・落合太郎編著『ギリシア・ラテン引用語辞典』〔新増補版〕1963 岩波書店
田中秀央『羅和辞典』〔増訂新版〕1966 研究社
田中利光『ラテン語初歩』1990 岩波書店
土井忠生『吉利支丹語学の研究』1942 靖文社
ロドリゲス著・土井忠生訳『日本大文典』1955 三省堂
コリャード著・大塚高信訳『日本文典』1957 風間書房
島正三『吉利支丹版羅葡日対訳辞書備考』1962 文化書房
森田武『天草版平家物語難語句解の研究』1976 清文堂
土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』1980 岩波書店
大塚光信『エヴォラ本日葡辞書』〔解説〕1998 清文堂
池上岑夫・金七紀男・高橋都彦・富野幹雄『現代ポルトガル語辞典』1996 白水社
ヨハネス・ラウレス『吉利支丹文庫』 1940 上智大学
幸田成友『聖フランシスコ・ザビエー小傳』1941 創元社
ヨハネス・ラウレス『聖フランシスコ・サヴィエルの生涯』1948 エンデルレ書店
海老沢有道『スピリツアル修行』1994 教文館
郡司之教『皇朝印史』1934 三圭社
吉木文平『印章綜説』1971 技報堂
皆川完一編集「印章総覧」(『書の日本史』第九巻) 1976 平凡社
長谷川延年著『平安・鎌倉・室町・江戸 秘奥印譜』1992 国書刊行会
呂大臨撰『考古図』1991 上海古籍出版社
梁詩正/蔣溥等撰『西清古鑑』1991 上海古籍出版社
『舊新約全書』1971 聖經公會在香港印發
『聖經』1995 WATCHTOWER BIBLE AND TRACT SOCIETY OF NEW YORK
『聖書新世界訳－参照資料付き－』1982, 1985 WATCH TOWER BIBLE AND TRACT SOCIETY OF PENNSYLVANIA
ドナルド・アットウォーター/キャサリン・レイチェル・ジョン著 山岡健訳『聖人事典』1998 三交社
『舊新約聖書 引照附』1970 日本聖書協会
松田毅一『日本関係イエズス会原文書』1987 同朋社出版
小島幸枝・亀井孝『どちりいなきりしたん』1979 勉誠社文庫
亀井孝・チースリク・小島幸枝著『日本イエズス会版キリシタン要理』1983 岩波書店
ライデン大学図書館蔵・鈴木博編『キリシタン版ヒイデスの導師』1985 清文堂
R.キッテル『ビブリア ヘブライカ』1937,1971 WURTTEMBERGISCHE BIBELANSTALT STUTTGART
シストV世・クレメンスVIII世『ラテン語ウルガタ訳聖書』1970 BAGSTER
水嶋良雄『グレゴリオ聖歌』1966 音楽之友社
オ・エングルベール著・平井篤子訳『アシジの聖フランシスコ』1969 創文社
池田敏雄『キリシタンの精鋭－津和野乙女峠の受難者たち－』1962 中央出版社
『重要美術品等認定物件目録』1943 文部省教化局総務課
高谷道雄『ヘボン書簡集』1959 岩波書店
歴史学研究会編『日本史年表』1966 岩波書店
歴史教育研究所編『日本史事典』1988 旺文社
南秀雄ほか『天満本願寺跡発掘調査報告Ⅰ』1995 大阪市文化財協会
拙稿「大坂城跡出土の円形印章について－或る吉利支丹大名の遺産－」1997 立命館大学
岩下壮一『カトリックの信仰』1994 講談社
C.S.クリフトン著/田中雅志訳『異端事典』1998 三交社
ヘンリー・ベッテンソン編『キリスト教文書資料集』1962 聖書図書刊行会
F.ケニヨン『聖書の生いたち』1972 山本書店
『聖書から論じる』1985 WATCH TOWER BIBLE AND TRACT SOCIETY OF PENNSYLVANIA

歴史教育研究所編『世界史事典』1988 旺文社
姉崎正治『切支丹宗教文学』1976 国書刊行会
『聖書に対する洞察』1994 WATCTH TOWER BIBLE AND TRACT SOCIETY OF PENNSYLVANIA
『聖書全体は神の霊感を受けたもので有益です』1983,1990 WATCH TOWER BIBLE AND TRACT SOCIETY OF PENNSYLVANIA
片岡千鶴子「教会の再興」(野下千年編『長崎の教会』1989 カトリック長崎大司教区司牧企画室 所収)
ヴァリニャーノ著　松田毅一・佐久間正編訳『日本巡察記』1965 桃源社
姉崎正治『切支丹宗門の迫害と潜伏』1925 同文館
比屋根安定『原城紀事』上篇・下篇 1927, 1928 警醒社書店
和辻哲郎『鎖国－日本の悲劇－』1954 角川書店
海老沢有道・チースリク・土井忠生・大塚光信校注『キリシタン書 排耶書』1970 岩波書店
丁韙良著・中村正直訓點『天道溯原』 1857 蔵板人 山田俊蔵
『新約聖書馬可傳』1877 米国聖書會社 日本横浜上梓
『舊約全書』1888 米国聖書會社 日本横浜印行
『引照新約全書』1883 米国聖書會社 日本横浜印行
『聖書辞典』 1892 基督教書類會社
『聖書歴史問答』1893 南美以教會出版 神戸金子活版部印行
『イスラエル発達小史』1900 日本聖公會出版社
『日本と聖書－日本聖書五十年－』1938 日本聖書協会
小澤三郎「聖書和譯史上に於ける『バブテゾー』和譯の問題」1944 亜細亜書房
高谷道雄『ドクトル・ヘポン』1979 牧野書店
海老沢有道・松田毅一『エヴォラ屏風文書の研究』1963 ナツメ社
松本慎二他『原城跡』1996 長崎県南有馬町教育委員会
『シンポジウム『原城発掘』－西海の王土から殉教の舞台へ－』1998 南有馬町・南有馬町教育委員会

Ⅳ．地学環境調査

国際文化公園都市構想に関わる地学環境調査

井 本 伸 廣

は じ め に

地学環境調査においては、下記の項目について調査・検討を行なった。

1．旧鉱山に関する調査：銅鉱・銀鉱などを対象としたと思われる数ヶ所の旧坑について現地調査を行い、鉱山としての価値を評価した。また、開発時期について、坑道の状況などをもとに推定を試みた。

2．石造物（墓石・石仏・石槽等）の岩質をあきらかにし、本地域に於ける石材利用の特徴を検討した。

第１章　旧鉱山に関する調査

国際文化公園都市予定地域の西方の兵庫県猪名川町・川西市・能勢町などには銀・銅・鉛・亜鉛を含む熱水鉱脈が分布する。なかでも多田鉱山の歴史は古く、天平時代に奈良東大寺の大仏鋳造にあたって銅を献上したと伝えられている。さらに天正６(1578)年、豊臣秀吉が直轄経営に着手、徳川時代には天領として銀・銅を多量に産出した。明治以降は三菱鉱業、日本鉱業などによって開発・採掘が続けられ、昭和40年代の最盛時には銅精鉱月産1,000トンを産した。しかしその後は鉱況ふるわず、昭和48年に閉山している。

第１節　旧坑道の調査及び鉱山に関する記録

１．旧坑道調査

本地域は、歴史的に重要な鉱産地に隣接する地域だけに、予定地内に坑道跡が見いだされたとの情報が伝えられたことから、近世以前に遡る鉱山跡の可能性が期待され、調査に着手した。

茨木市粟生岩阪地内の調査対象地番号Ｓ108、Ｓ109において旧坑道４ヶ所を調査した。いずれも、東西方向に延び、北に傾斜する砂岩・頁岩互層を原岩とするホルンフェルス中に開鑿されたもので、銅鉱の採掘を試みたものと思われるが、出鉱した形跡は認められなかった。

坑道の状況は以下の通りである。

Ｓ108（巻頭写真９－１，２）

坑道幅1.5m、高さ1.5m、長さ10m。砂質ホルンフェルス中のＮ10°Ｗに延びる断層破砕帯に沿う幅10～数cm鉱染状石英脈。少量の孔雀石・黄鉄鉱が認められたに過ぎず、細脈を追って掘進しているものの、黄銅鉱・斑銅鉱などの銅鉱石は全く認められず、ズリも確認できなかった。

S109－1

坑道幅1.0m、高さ1.8m、長さ5m。砂質ホルンフェルス中にN10°W方向に開鑿。2～10cmの石英脈を対象としたものらしいが、僅かに黄鉄鉱の鉱染が認められるのみであった。

S109－1東（巻頭写真9－3）

N10°W、奥行き1.5m程度の坑道。鉱脈は不明。

S109－2（巻頭写真9－4）

N6°W、奥行き2m。極めて少量の孔雀石の鉱染が認められたが、採掘された形跡は全く認められなかった。

これらの坑道の掘進年代は不明であるが、坑道の残存状況から判断して、近世以前に遡る可能性はないものと思われる。いかに鉱山経営や探鉱技術に関する知識や経験に乏しくとも、鉱脈の状況をみれば、掘削の対象とはなりえないことは明かである。それにもかかわらず、S108では手掘法によって10mもの掘進がなされており、その目的・意図については、はかりかねるといわざるをえない。

2．マンガン鉱山

免山　篤氏によれば、粟生岩阪南方で戦後マンガンの採掘がおこなわれていたとのことであるが、現地を視察した限りでは、マンガン鉱床の母岩となる層状チャートは、砕屑岩中のきわめて小規模なブロックにすぎず、少量の二酸化マンガン鉱を出鉱したものではないかと判断した。

3．その他鉱山に関する記録

池上家文書には享和4（1804）年、岩坂村政五郎より摂州能勢銅山役に宛て、大重字横弦銅山の採掘権の譲渡を願い出た記録が残されている。また、文化4（1807）年には、泉原村（現・茨木市泉原）久保某より岩坂村池上政五郎宛に大重銅山壱ヶ所を銀三百目で譲り受けたことの証書を求める文書があり、江戸末期に本地域においても銅鉱山が稼働していたことは確かである。

奥野慶治『綜合清溪村史』には、旧清溪村地内に2鉱山が存在したことが記されている。西山鉱山は泉原西山に在り、1877（明治10）年に暴雨風による出水によって河岸が崩壊したおりに、鉱脈が露出したものを、1882年頃、試掘されたが、資金不足により中断。1885年頃、大阪の大蔵義信氏が採掘を再開、1891年には銅鉱約50トンを採掘したが、鉱量不足のため閉山した。

城山鉱山は、大字高山（現・大阪府豊能郡豊能町）字城山に位置し、1891（明治24）年頃、銀・銅を少量産出したが、鉱量乏しく廃坑となった。

白神（1978）によれば、箕面市勝尾寺川沿いに多くの鉱脈が見いだされたとある。昭和20年代に地獄谷付近の数地点で試掘が行われ、銅鉱や鉛鉱が得られたが、いずれも鉱量乏しく短期間の操業に終わった。

第2章　石造物の岩質と石材利用

本地域には多様な石造物が分布している。これらの形状・材質・分布・製作年代・歴史的評価等につ

いては藤澤典彦氏により詳細な検討がなされている（Ⅶ．石造物調査参照）。ここでは石材利用の観点から検討した結果を報告する。検討対象は、墓石（茨木市泉原ゴトク墓地・大岩国見墓地）、中世石仏（茨木市佐保クルス山墓地・佐保馬場共同墓地）、その他、石槽・五輪塔・常夜燈等の石造物である。

第１節　茨木複合花崗岩体

国際文化公園都市予定地には、茨木複合花崗岩体が広く分布している。この岩体は丹波帯中・古生界中にN70°W方向に約15km、最大幅６kmの規模で貫入しており、周囲の堆積岩類に接触変成をあたえている。南北２岩体に区分され、南側の岩体は能勢岩体、北側の岩体は妙見岩体と呼ばれている（図１）。

能勢岩体は、石英閃緑岩・花こう閃緑岩・斑状花崗岩等からなり、岩体内部で外側から内側へ、この順で同心円状に分布し、累帯深成岩体を形成している。

これらのうち主体をなす花崗閃緑岩は、肉眼的に粗粒を呈するものと、斑状を呈するものの二つの岩相に区分できる。本報告では、前者を粗粒花崗閃緑岩（略称CGD）、後者を斑状花崗閃緑岩（略称PGD）と呼ぶ。

妙見岩体は、桃色のカリ長石を含む細粒花崗岩及び細粒斑状花崗岩からなり、斑状花崗岩は中・古生界との接触部に分布する。

周辺の丹波帯中・古生層は、輝石ホルンフェルス相に達する接触変成作用を受けている。石造物の多くが能勢岩体に由来するとみなし得るところから、ここでは能勢岩体について概要を記述する。

１．能勢岩体の岩相

能勢岩体は、次の四つの異なる岩相が累帯構造を示す複合岩体で、それらは（１）から（４）の順に貫入している。

（１）粗粒石英閃緑岩－（２）の中粒石英閃緑岩中に岩株状の捕獲岩として分布。

（２）中粒石英閃緑岩－能勢岩体の最外側に分布。

（３）花崗閃緑岩－能勢岩体の主部を占める。

（４）細粒斑状花崗岩－能勢岩体の中核部に分布。

これらのうち（１）と（２）については、分布や岩相の特徴が漸移するところから（松浦ほか；1995）、石英閃緑岩として一括している。

石英閃緑岩は、豊能町川尻から余野を経て大円まで連続して分布し、中・古生界を挟んで亀岡市東別院町湯屋まではぼ東西に分布する。また、茨木市生保から桑原にかけても分布する。岩相は粗粒から中粒にわたり、斜長石、石英、黒雲母、角閃石、単斜輝石からなり、一部に斜方輝石またはカリ長石を伴う。

花崗閃緑岩は、豊能町川尻の余野川に沿う地域から茨木市大岩－佐保にかけて分布する。岩相には、斜長石やカリ長石、角閃石斑晶が細粒石基に典型的な斑状組織をなすもの（PGD　巻頭写真９－５，６）、肉眼的には等粒状組織を示すもの（CGD　巻頭写真10－１，２）に区別される。後者には、鏡下において斜長石・石英・カリ長石・角閃石などの鉱物の粒径が連続的に変化するシリイット組織をもつものが含まれる。鉱物の体積比は不均一であるが、石英閃緑岩とはカリ長石が多いことと輝石を含まないことで区別できる。

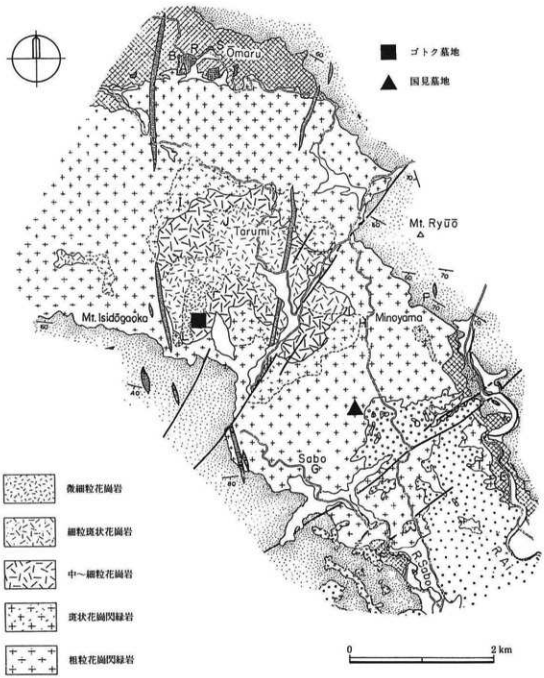


図1　茨木複合花崗岩体地質図　田結庄良昭（1971）を一部改変

細粒斑状花崗岩は、茨木市上音羽付近に直径2～2.5kmの円形の分布を示し複合岩体の中核をなす場合と、豊能町高山北方に見られるように、累帯構造を乱すように分布する場合がある。斑晶としては、斜長石・カリ長石・石英や角閃石が斑晶をなし、石基中には角閃石は含まれず黒雲母が認められる。

2．能勢岩体の産状

能勢岩体と中・古生界の接触面は、岩体北側では70°～90°N、南側で40°～60°Sを示す。ホルンフェルス帯の幅は、北側で約500m、南側で約2,500mに達する。また、周縁相をなすとみなし得る石英閃緑岩が、北側で広く分布することなどから、能勢岩体は南側に傾斜した杯状の岩体の上半部が削剝されて

露出しているものと推定されている（田結庄；1971）。

3．能勢岩体の放射年代

黒雲母のK－Ar年代は、73.8±3.0 Ma、75.6±3.0 Ma（柴田；1971）、Rb－Sr年代は全岩－鉱物アイソクロン年代で96±2 Ma（Ishizaka；1971）を示す。

第2節　石造物の岩質

1．茨木市泉原ゴトク墓地・茨木市大岩国見墓地の墓石

歴史環境調査（II）班により泉原ゴトク墓地の墓石群について、分布・建立年代・形状・墓碑銘等について悉皆調査がなされた。これらの資料に基づいて岩質の調査を行い、平成7年度に実施した大岩国見墓地の墓石群との比較検討を試みた。両墓地の建立年・岩質等について表1、表2に示す。

2．石仏

本地域には多数の石仏が分布しており、藤澤典彦氏によって詳細な調査がなされている。ここでは、佐保クルス山墓地に点在する石仏及び同墓地から移転されたとする佐保馬場共同墓地や泉原日余、泉原の西山平山新開下の石仏、さらに野仏として点在する多くの石仏については、ほとんど全て広義の花崗閃緑岩が用いられている。

ここでは、藤澤氏の調査結果に粗粒花崗閃緑岩（CGD　巻頭写真10－4）と斑状花崗閃緑岩（PGD巻頭写真10－5）に区分した結果を補記する（表3）。番号は、藤沢氏の調書番号に対応する。

なお、泉原日余石仏では半花崗岩製の1体を除き、粗粒花崗閃緑岩・斑状花崗閃緑岩製が32体中31体を占め、その割合は96.9%、西山平山新開下石仏では15体中14体で93.3%に達する。また、佐保クルス山墓地の発掘調査によって出土した石仏の場合も概査の限りにおいては、すべて地元産の花崗閃緑岩を用いている。

3．その他の石造物

本地域には、石仏や墓石のほかに石槽2件をはじめ多様な石造物が分布している。観察した限りにおいて、下記のような石材が用いられていた。

佐保広田	石槽		粗粒花崗閃緑岩	
佐保馬場	石槽		粗粒花崗閃緑岩	
大岩国見	八幡宮五輪塔	1446(文安3)年？	粗粒花崗閃緑岩	
大岩国見	常夜燈	1863(文久3)年	粗粒花崗閃緑岩	
大岩国見	八大竜王山道標	1916(大正5)年	粗粒花崗閃緑岩	
車作経塚	不動明王・八大龍王像	1931(昭和6)年	和泉砂岩	(巻頭写真10－6)
車作経塚	宝篋印塔		閃緑岩	(巻頭写真10－7)
車作経塚	蛇体？		火山角礫岩	
車作法林寺	宝篋印塔	1420(応永27)年	閃緑岩	

表1　茨木市泉原ゴトク墓地墓石石材一覧表

No.	建立年	柱石材	備　考		
1	1749 (寛延2)	斑状花崗閃緑岩	自然石		13
2	1790 (寛政2)	斑状花崗閃緑岩	自然石		1
3	1820 (文政3)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨		1
4	1823 (文政6)	斑状花崗閃緑岩	自然石		11
5	1825 (文政8)	斑状花崗閃緑岩	自然石	巻頭写真10－3	8
6	1850 (嘉永3)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨		3
7	1851 (嘉永4)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨		23
8	1855 (安政2)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨		29
9	1855 (安政2)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨		33
10	1857 (安政4)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨		18
11	1861 (文久元)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨		32
12	1874 (明治7)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨		29
13	1889 (明治22)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨		18
14	1890 (明治23)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨		12
15	1896 (明治29)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨		23'
16	1897 (明治30)	斑状花崗閃緑岩	自然石		8
17	1897 (明治30)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨		30
18	1898 (明治31)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨		2
19	1900 (明治33)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨		1
20	1904 (明治37)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨		33
21	1905 (明治38)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨		24
22	1905 (明治38)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨		33
23	1907 (明治40)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨		23
24	1908 (明治41)	粗粒花崗閃緑岩	自然石		17
25	1908 (明治41)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨	台座は斑状花崗閃緑岩	25'
26	1910 (明治43)	粗粒花崗閃緑岩	自然石		15
27	1923 (大正12)	粗粒花崗閃緑岩	自然石		10
28	1923 (大正12)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨		14
29	1924 (大正13)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨		24'
30	1927 (昭和2)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨		4
31	1927 (昭和2)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨		25
32	1931 (昭和6)	和泉砂岩	非鏡面研磨	台座は粗粒花崗閃緑岩	22
33	1931 (昭和6)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨		25
34	1934 (昭和9)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨		20
35	1936 (昭和11)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨		28
36	1938 (昭和13)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨		26
37	1939 (昭和14)	粗粒花崗閃緑岩	自然石		20
38	1940 (昭和15)	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨	台座は粗粒黒雲母花崗岩	19
39	1942 (昭和17)	粗粒黒雲母花崗岩	戦没者碑	台座は粗粒花崗閃緑岩	27
40	1942 (昭和17)	粗粒黒雲母花崗岩		台座は粗粒花崗閃緑岩	33
41	1945 (昭和20)	粗粒黒雲母花崗岩	戦没者碑	地域外	
42	1957 (昭和32)	粗粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	地域外	11'
43	1958 (昭和33)	和泉砂岩		台座は粗粒花崗閃緑岩	24'
44	1967 (昭和42)	中粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	地域外	2
45	1970 (昭和45)	斑状黒雲母花崗岩	鏡面研磨	地域外	17
46	1973 (昭和48)	閃緑岩	鏡面研磨	地域外	25'
47	1974 (昭和49)	中粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	地域外	13
48	1975 (昭和50)	斑状黒雲母花崗岩	鏡面研磨	地域外	7
49	1975 (昭和50)	粗粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	地域外	15
50	1975 (昭和50)	細粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	地域外	21
51	1980 (昭和55)	中粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	地域外	1
52	1984 (昭和59)	粗粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	地域外	31
53	1987 (昭和62)	中粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	地域外	12
54	1987 (昭和62)	中粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	地域外	18
55	1989 (平成元)	中粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	地域外	6
56	1990 (平成2)	中粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	地域外	32
57	1994 (平成6)	中粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	地域外	8
58	1995 (平成7)	中粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	地域外	14
59	1997 (平成9)	中粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	地域外	15

※　歴史環境調査(Ⅱ)班の調査結果に加筆。備考欄の番号は同調査の整理番号（Ⅱ-第1章参照）

表２　茨木市大岩国見墓地墓石石材一覧表

No.	建立年	柱石材	備　　考	
1	1861（文久元）	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨	
2	1861（文久元）	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨	
3	1861（文久元）	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨	
4	1861（文久元）	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨	
5	1861（文久元）	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨	
6	1861（文久元）	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨	
7	1861（文久元）	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨	
8	1866（慶応2）	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨	
9	1866（慶応2）	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨	
10	1868（明治元）	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨	
11	1890（明治23）	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨	
12	1895（明治28）	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨	
13	1895（明治28）	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨	
14	1895（明治28）	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨	
15	1895（明治28）	細粒花崗岩質岩石	非鏡面研磨	台座は粗粒花崗閃緑岩
16	1895（明治28）	細粒花崗岩質岩石	非鏡面研磨	台座は粗粒花崗閃緑岩
17	1895（明治28）	細粒花崗岩質岩石	非鏡面研磨	台座は粗粒花崗閃緑岩
18	1899（明治32）	細粒花崗岩質岩石	非鏡面研磨	台座は粗粒花崗閃緑岩
19	1912（明治45）	細粒花崗岩質岩石	非鏡面研磨	台座は粗粒花崗閃緑岩
20	1915（大正4）	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨	
21	1917（大正6）	粗粒黒雲母花崗岩	非鏡面研磨	地域外，台座は粗粒花崗閃緑岩
22	1918（大正7）	細粒花崗岩質岩石	非鏡面研磨	台座は粗粒花崗閃緑岩　非研磨
23	1924（大正13）	粗粒花崗閃緑岩	非鏡面研磨	
24	1924（大正13）	粗粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	地域外，台座は粗粒花崗閃緑岩
25	1928（昭和3）	粗粒花崗閃緑岩	鏡面研磨？	
26	1929（昭和4）	粗粒花崗閃緑岩	自然石	
27	1931（昭和6）	粗粒花崗閃緑岩	鏡面研磨	
28	1932（昭和7）	粗粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	
29	1933（昭和8）	粗粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	
30	1934（昭和9）	粗粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	
31	1941（昭和16）	粗粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	
32	1954（昭和29）	粗粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	戦没者碑
33	1954（昭和29）	粗粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	戦没者碑
34	1954（昭和29）	粗粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	戦没者碑
35	1954（昭和29）	粗粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	戦没者碑
36	1954（昭和29）	粗粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	戦没者碑
37	1954（昭和29）	粗粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	戦没者碑
38	1955（昭和30）	粗粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	
39	1956（昭和31）	粗粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	
40	1970（昭和45）	粗粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	
41	1974（昭和49）	細粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	
42	1974（昭和49）	細粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	
43	1976（昭和51）	中粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	
44	1979（昭和54）	中粒花崗閃緑岩	鏡面研磨	
45	1980（昭和55）	粗粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	
46	1982（昭和57）	中粒黒雲母花崗岩	鏡面研磨	

上音羽共同墓地　宝篋印塔　閃緑岩

上音羽共同墓地　地蔵像　1396（応永３）年　閃緑岩

これらの内、不動明王・八大龍王像、蛇体？の石材は、地域外から搬入されたことが明かである。また、石槽などの粗粒花崗閃緑岩や宝篋印塔の閃緑岩などは能勢岩体の構成岩を用いたものと推測される。

表３　茨木市佐保地区石仏石材一覧表

番号	岩質	番号	岩質	番号	岩質	番号	岩質	番号	岩質
佐保馬場クルス山墓地									
24	PGD	25	CGD	26	PGD	27	PGD	28	PGD
29	PGD	30	CGD	31	PGD	32	PGD	33	PGD
34	CGD	35	PGD	36	CGD	37	未調査	38	未調査
39	CGD								
斑状花崗閃緑岩（PGD）の割合：9体／14体，64．3% 粗粒花崗閃緑岩（CGD）の割合：5体／14体，35．7%									
佐保馬場共同墓地									
41	CGD	地蔵菩薩像		42	PGD	43	PGD	44	CGD
45	CGD	46	CGD	47	CGD	48	CGD	49	CGD
50	PGD	51	CGD	52	PGD	53	PGD	54	CGD
55	PGD	56	PGD	57	PGD	58	PGD	59	PGD
60	PGD	61	PGD	62	CGD	63	CGD	64	PGD
65	PGD	66	PGD	67	CGD	68	PGD	69	PGD
70	PGD	71	PGD	72	PGD	73	PGD	74	PGD
75	CGD	76	PGD	77	PGD	78	PGD	79	PGD
80	PGD	81	PGD	82	PGD	83	PGD	84	PGD
85	CGD	86	PGD	87	PGD	88	PGD	89	PGD
90	PGD	91	CGD	92	PGD	93	CGD	94	PGD
95	CGD	96	CGD	97	CGD	98	CGD		
斑状花崗閃緑岩（PGD）の割合：38体／58体，65．5% 粗粒花崗閃緑岩（CGD）の割合：20体／58体，34．5%									

４．石材利用の特徴

A．墓石

ゴトク墓地においては建立年代の明かな59基の墓石のうち、1940(昭和15)年以前の38基は、和泉砂岩製１基を除いて、全て田結庄（1971）による粗粒花崗閃緑岩（32基）と斑状花崗閃緑岩（５基）が用いられており、地元産の石材の占める割合は97.4%にのぼる。1942年以降の墓石21基は、すべて地域外から搬入されたもので、和泉砂岩製のもの２基、閃緑岩製１基のほか19基は黒雲母花崗岩製であり、その割合は90.5%に達している。また、加工技術の面では、表面の鏡面研磨は1957(昭和６)年頃から導入されている。形状については、自然石に墓碑銘を刻印したものが８基認められ、いずれも地元産の石材が利用されていた。なお、墓標は地衣類によって被われており判別不能の場合のほかは、すべて地元産の自然石が用いられていた。

大岩国見墓地では、建立年代の明かな46基のうち、1931年以前の27基のうち25基が地元産の石材からなり、地元産の占める割合は92.6%に達する。内訳は、粗粒花崗閃緑岩19基、細粒花崗岩６基であるが、ゴトク墓地で認められた斑状花崗閃緑岩は存在しなかった。地域外の石材は1910年代から出現するが、1932年以降はすべて地域外の石材が用いられていた。鏡面研磨は1931年頃から導入されており、ゴトク墓地にくらべて25年以上も早い。なお、自然石に刻印したものとしては、１基が認められた。

両墓地の石材利用の特徴を比較すると、ゴトク墓地では、和泉砂岩１基（1931年）が認めれるものの地元石材の利用が1940年まで続くのにたいして、国見墓地では1931年でとどまっている。このことは、

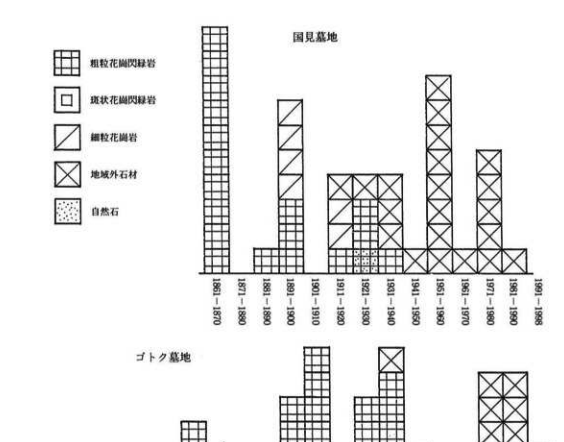


図2　茨木市泉原ゴトク墓地・大岩国見墓地　墓石の石材

ゴトク墓地の近傍には平石丁場など比較的大規模な丁場が開かれており、石材調達が容易であったと考えられるのにたいし、国見墓地近傍には小規模な丁場が点在しているにすぎないこと、ゴトク墓地は国見墓地に比較して、車両通行可能な道路から隔たっており、墓石運搬のための条件の差異などを反映している可能性がある。また、ゴトク墓地には、斑状花崗閃緑岩製の墓石が5基認められるのにたいし、国見墓地では1例も無い。前者は、斑状花崗閃緑岩の分布域近くに立地しており、いっぽう国見墓地は粗粒花崗閃緑岩地帯に位置するといった、両墓地の地質条件の違いに由来することかもしれない。ゴトク墓地で鏡面研磨された墓石の導入が遅れていることも、墓石の加工が、動力源の得にくい丁場またはその近くの加工場で行われていたことを示唆する。このことは後述するように、平石丁場での採石・加工が、基本的には手作業でおこなわれていたことからも伺われる。

B．石仏

石仏に利用された石材は、若干の例外を除いて、粗粒花崗閃緑岩と斑状花崗閃緑岩に限られている。またそれらの総高は、30～50㎝程度で、背面は湾曲しているものが多いことから、佐保川などの河床の転石を素材として利用した可能性が高い。この場合に1石を半截し、2体を製作したことも考えられる。

また、粗粒花崗閃緑岩に較べて肌理の細かい斑状花崗閃緑岩製の石仏が65%程度を占めることは、工人が細部彫刻の可能な斑状花崗閃緑岩を選択利用したことがあったかもしれない。

C．その他の石造物

宝篋印塔や不動明王・八大龍王像のように細密仕上げを必要とする場合には閃緑岩・和泉砂岩など比較的軟質で細粒の石材を用いる等、素材の選択がなされている。

5．石造物原石の採取と加工

石造物原石は、次のような状況で採取され、加工された。

A．平石丁場に代表されるような比較的大規模な丁場

平石丁場について茨木市泉原在住の木口文男氏（大正６年生、広島県出身）から、往時の様子について伺うことができた。

同氏は、昭和５年、12歳のころから、広島県倉橋島において石工の手伝いを始める。その後、瀬戸内海島嶼の花崗岩丁場において採石に従事。昭和30(1955)年頃に来阪し、茨木市泉原の石堂ケ岡に所在する平石丁場（西林石材）での採石に従事した。丁場は大正年間に開かれ、来阪当時は3ヶ所で採石されていた。それらは西から小西氏所有小出組請負の丁場、西林石材から昭和50年頃に大川石材に移行した丁場、昭和50年頃に閉山した西林石材所有の丁場の３ヶ所が稼働していた。同僚の石工には、香川・小豆島・坂出・広島など瀬戸内海周辺地域の出身者が多かった。盛時には３丁場あわせて30～40人が採石に従事しており、丁場近くの飯場に居住して作業に従事していた。石材の搬出には朝鮮人労働者が主に従事、搬送には主にトラックが用いられたが、積み込み場までの運搬には、一部に木馬（キンマ）が利用されていた。

主に間知石を採石し高槻・茨木に出荷していたが、昭和42年頃までは京都市電の軌道敷石も採石していた。間知石などは丁場で製品に仕上げていたが、軌道敷石は“中蹬”（中間加工所）で再加工していた。原材料は、深層風化物（真砂〔マサ〕・弱結〔ジャケツ〕）中の残留岩塊（巻頭写真11－１，２）や谷底に堆積した岩塊を採掘していた。

加工は、石頭(セットウ)、鏨(タガネ)、玄能(ゲンノウ)（巻頭写真11－３）をもちいる手作業が中心であったが大割のときには張り付け発破を用いたこともある。塵肺症（３級）に罹患。

B．小規模な丁場

一般に花崗岩質の岩石には方状節理が発達する。木曽川の名勝「寝覚ノ床」は方状節理の作る代表的な景観である。節理面に沿って浸透する地下水の働きによって、長石や雲母は粘土鉱物に変化し、また、鉱物の溶解が進むにつれて、節理面で囲まれた直方体は、その隅や稜、面の部分から真砂化が進み、中央部に球状の新鮮な岩塊が残されることになる（巻頭写真11－４，５）。

本地域にも、こうした経過によって形成された岩塊が点在しており、岩塊が比較的密集している場所では間知石や墓石の素材として利用されたらしい。国見墓地に近接した旧石切り場２ヶ所を現地調査したが、いずれも強風化した花崗閃緑岩中に残存している径数m規模の未風化の岩芯を採掘の対象としている（巻頭写真11－６）。したがって、長尺の石材を、多量にかつ計画的に採掘することは困難であったものと推定される。

岩質は、斜長石を多く含み、カリ長石は灰色を呈し、全体として淡灰色を示す。２～３㎜x10㎜程度の大きさの、自形～半自形角閃石を含むことが特徴的である。

旧石切り場周辺には、少数ながら整形済みの墓石（巻頭写真11－７）や、ノミ痕のある石材（巻頭写真11－８）が放置されており、修羅道跡とみられる窪地も認められた。

C．谷底や河床の岩塊

４．Ｂで触れたように、石仏の場合には、素材を佐保川などの谷底や河床の転石に求めた可能性が高い。花崗岩質岩石の風化によって得られる未風化の岩芯は、前述のように、もともと球状の岩塊をなすことが多く、洪水時の転動運搬による円磨作用を必ずしも必要としない。適当な大きさと材質の岩塊を選択し、加工したことが考えられる。

ま と め

１．４ヶ所の旧坑道調査を行ったところ、２坑道において少量の孔雀石が認められたことから、銅鉱の探査を目的に掘進したものと判断した。しかし、いずれの場合も採掘までには至らなかったようである。掘進の年代についても明らかにはならなかった。

２．墓石・石仏・石槽等の石造物の岩質と石材利用の特徴について検討した。墓石は、昭和初期以前には地元から産する茨木複合花崗岩体の能勢岩体を構成する花崗閃緑岩を用いている。石仏については全て能勢岩体の粗粒花崗閃緑岩・斑状花崗閃緑岩を利用している。

３．石材の採取にあたっては、丁場での採石、河床岩塊の採取などが行われた。特に石仏の場合、河床の球状岩塊を選択利用した可能性が高い。

参考文献

Ishizaka, K. (1971) A Rb−Sr isotopic study of the Ibaragi granitic complex, Osaka, Japan. Jour. Geol. Soc. Japan, 77, p.731−740

松浦浩久・栗本史雄・楽川　旭・豊　遙秋 (1995) 広根地域の地質. 地域地質研究報告（５万分の１地質図幅), 地質調査所, p.110

奥野慶治 (1935) 綜合清溪村史

柴田　賢 (1971) 茨木複合花崗岩体のＫ−Ar年代. 地球科学, 25, p.268−269

田結庄良昭 (1971) 大阪府北部, 茨木複合花崗岩体の岩石学的研究. 地質雑, 77, p.57−70

巻 頭 写 真

巻頭写真 9

1．S108地点の坑道

2．S108地点の坑道坑口の上部にみられる鉱脈。断層に沿って孔雀石の鉱染が認められた。

3．S109東地点の坑道

4．S109－2地点の坑道

5．斑状花崗閃緑岩の顕微鏡写真　平行ニコル，スケールは0.5㎜

Ho：普通角閃石　Bi：黒雲母　Pl：斜長石　Kf：カリ長石　Q：石英

6．斑状花崗閃緑岩の顕微鏡写真　クロスニコル

巻頭写真10

1．粗粒花崗閃緑岩の顕微鏡写真　平行ニコル，スケールは0．5㎜

Ho：普通角閃石　Bi：黒雲母　Pl：斜長石　Kf：カリ長石　Q：石英

基質中の黒雲母は、緑泥石化している。

2．粗粒花崗閃緑岩の顕微鏡写真。クロスニコル。カリ長石には，ペルト長石構造が認められる。

3．斑状花崗閃緑岩の自然石を用いた墓石　［茨木市泉原：ゴトク墓地］

4．粗粒花崗閃緑岩製の石仏。顔面は不明瞭。黒色鉱物は角閃石。　［茨木市佐保：馬場共同墓地］

5．斑状花崗閃緑岩製の石仏。顔面の黒い斑点は、角閃石斑晶。　［茨木市佐保：馬場共同墓地］

6．和泉砂岩製の不動明王・八大龍王像　［茨木市車作：経塚］

7．閃緑岩製の宝篋印塔残欠　［茨木市車作：経塚］

巻頭写真11

1．花崗閃緑岩の風化残留岩塊　［茨木市：多留見峠付近］

2．真砂（弱結〔ジャケツ〕）中の新鮮な花崗閃緑岩の岩塊　［茨木市佐保］

3．採石用具　上列：鑿（タガネ）　中・下列の左側２本：石頭（セットウ）

下列の３本：玄能（ゲンノウ）　右端：道具箱

4．花崗閃緑岩の風化。方状節理と球状の岩芯が認められる。

5．球状の風化残留岩塊　［茨木市泉原：ゴトク墓地付近］

6．小規模な花崗閃緑岩丁場跡　［茨木市千提寺西方］

7．整形後放置された墓石　［茨木市千提寺西方］

8．放置された間知石。ノミ跡が残る。　［茨木市千提寺西方］

Ⅴ．地理環境調査

国際文化公園都市周辺の地理環境調査

高橋　学

視　点

自然と人間生活とのかかわりについて検討することは地理学にとって最も重要な課題である。また、地域を見るスケールを変えることによって、対象となる地域がどのように異なって見えるか、検討することは地理学にとって最もオーソドックスな手法である。

今回の報告では、以上のような地理学的視点に立って、大阪北部に位置する国際文化公園都市に周辺の地理的環境について検討を加えてみた。その際、特に気候、地質、植生をはじめとする自然環境と土地利用との関係について注目した。研究手法としては、衛星データや空中写真データに基づくリモートセンシングを中心とし、それに現地におけるグランドトルースを付加した。

第１章　近畿地方スケールでみた国際文化公園都市

宇宙から地球を撮影した衛星画像を見ると、地球上にはさまざまな傷痕や規則的に配列する地質構造が認められる。降水量が多く、植生が豊かなわが国においても、このことは例外ではない。地上に立っていたのでは判らない事象が、宇宙から判ることも少なくない。さて、巻頭写真12－１に示したのは、NASAが打ち上げた人工衛星LANDSAT４号のTM（シェマティックマッパー）の画像である。TMはランドサットに搭載された電磁波センサーであり、太陽の影響を受けて地球から発せられる電磁波のうち可視域から赤外域までのものを７つのバンドに分けて観測している。この図は、青色の電磁波の観測データに青色を、緑色の電磁波の観測データに緑色の、そして赤色の電磁波の観測データに赤色を割り振って作成した合成画像である。したがって、この合成画像は、人間の目に観ることのできる画像のようにみえる。

巻頭写真12－１を観ると、地形配列には一定の規則があることがわかる。また、地形の配列と密接にかかわって、リニアメントと呼ばれる直線状の傷跡を観ることができる。これらの中で最も目につくものは、紀伊半島を東から西へ横断してのびる直線状の谷である。伊勢湾に注ぐ宮川、和歌山から紀伊水道へ注ぐ紀ノ川、淡路島の諭鶴羽山地と沼島の間の海峡、そして徳島の吉野川は、大局的に観るならば、一連のリニアメントをなしている。このリニアメントは中央構造線と呼ばれるわが国最大の断層である。中央構造線の南側は、西南日本外帯と呼ばれ、北側は西南日本内帯と呼ばれている。その南と北では全く地質構造が異なっており地形も違っている。南側では、東西方向のリニアメントや地質構造が卓越している。北側については後に詳述する。なお、中央構造線は現在も盛んに活動を続けており、その周辺では１月の間に数回の有感地震と数百回を超える無感地震が観測されている。

中央構造線北側では、近畿三角帯（トライアングル）と呼ばれる地質構造が特徴的である。すなわち、中央構造線を底辺とし、敦賀を頂点とした三角形のエリアに共通した地質的、地形的特徴が見出されるのである。東側の斜辺は敦賀から養老山地を経て知多半島へと続く。これに対し、西側の斜辺は淡路島の津名山地から六甲山地を経て敦賀へと至る。そして、両斜辺の間には南北方向の山地や盆地が連なる。生駒山地・金剛山地、葛城山地、鈴鹿山地、そして河内平野、京都盆地・奈良盆地、琵琶湖・伊賀盆地、伊勢平野である。これらの山地や盆地は、いずれも規模や形態が非常に良く似ている。たとえば山地に注目すると、その高さは1000m前後であり、平坦な山頂と急峻な山腹からできている（巻頭写真12－2参照）。そして、山頂には遊園地や宿泊施設などが建設されており、山腹にはロープウエイやケーブルカーなどの設備が設けられているのである。

盆地や平野は皿を重ねたような地質構造がみられ、中央部に新しい堆積物が厚く堆積し、周辺へ向かうほど古い地層が露出する。山地と盆地との境目には活断層が存在し、年平均1㎜程度の速度で地殻が変異していることが知られている。近畿三角帯において、山地と盆地が交互に繰り返すような地形が認められるのは、この地域に東西方向から圧縮されるような力が加わっていることによる。また、断層は基本的に逆断層であり、北東－南西に延びる活断層は右横ずれの成分に富んでいる。これに対し、北西－南東方向に延びる活断層は左横ずれの成分が卓越している。このような地殻変動は過去のものではなく、現在でも東西方向からの圧力は加わり続けており、山地や盆地の形成が進行している。1995年1月17日に発生した兵庫県南部地震は、その一端を示すものである。近畿トライアングルの特徴を作り出した地殻変動は、藤田和夫によって六甲変動と名づけられている。

さて、この地域の気候は、瀬戸内区に属し、降水量は年間1100㎜、温かさの指数は120℃である。植生は本来、カシ、シイ、クスなどの常緑広葉樹が卓越する地域である。ところが、実際には、ここにはかなりの比率でアカマツが繁茂している。これには、人間の活動が大きく関与していることが知られている。花粉分析などを用いた植生復原の成果によると、近畿地方の山や丘陵にアカマツがめだちはじめるのは、それほど古いことではない。弥生時代、古墳時代、古代には、限定された場所でアカマツ林が出現した。たとえば、我が国最大の須恵器の生産地であった大阪南部の泉北丘陵において、燃料として利用されていた炭の原料が、6世紀後半まではカシなどの常緑広葉樹であったが、7世紀中期以降アカマツへ変化したという（大阪府教育委員会；1980）。須恵器を生産するためには、大量の燃料と粘土が必要であり、それが原因となり森林が人為的に破壊されたのである。こうして出現した裸地にアカマツ林が二次林として成立したのである。他方、安威川の東、芥川流域の新池遺跡や緑ヶ丘の花粉分析（松江実千代；1993）によれば4世紀にはアカガシなど照葉樹林が繁茂していたが、埴輪が生産された6世紀頃にはコナラの二次林へと変化したという。さらに、7－8世紀になるとより人為の加わったアカマツやコナラの二次林が成立したらしい。また、三島郡島本町広瀬付近の8世紀半ばの様子を描いた「天平勝宝八歳摂津国水成瀬絵図」（写）の山地にはまだ広葉樹が記されている。古代の荘園絵図の山地に描かれている植生の多くは、広葉樹でありアカマツはあまりめだたないのである。この地域にアカマツが増えはじめるのは古代になってからのことであり、中世末から近世にかけて、山地や丘陵、特に集落に近いところではアカマツが景観の主構成要素となったのである。こうして、アカマツは人々の日々の生活をささえる薪として重宝がられてきた。しかし、1960年代末頃から始まった燃料革命によって、薪は無用の長物化した。そして、現在は、二次林から常緑広葉樹林の森へと回帰しつつある。

参考文献
藤田和夫；1968「六甲変動、その発生前後－西南日本の交差構造と第四紀地殻変動－」『第四紀研究』 7－4
大阪府教育委員会編；1980『陶邑Ⅴ』
松江実千代；1993「新池遺跡周辺における古植生とその変遷」高槻市教育委員会編『新池』所収

第2章　北摂山地スケールでみた国際文化公園都市

国際文化公園都市は、北摂スケールでみると近畿三角帯の西辺に位置することになる。ちょうど淡路島の津名山地から六甲山地を経て敦賀へ至る大きな地質構造の境界にあたるため、この地域には、地質図に活断層と記されたもの以外にも、たくさんの活断層やリニアメント（線状構造）が存在している（巻頭写真12－3参照）。山地や丘陵を刻む河谷はもちろん、平野を流れる河川の流路もリニアメントを反映していることが多いのである。たとえば、国際文化公園都市周辺では、東谷－泉原－南条の各集落を貫く茨木川支流の佐保川は、北東－南西方向のリニアメントを構成する。また、粟生岩阪－神合－馬場－生保の集落をつらねるように延びる谷も、同様な性格を有している（巻頭写真12－4、巻頭写真13－5参照）。

他方、近畿三角帯の西側では箕山盆地に代表されるような東西方向のリニアメントが卓越する。また、六甲山地の北側から、国際文化公園都市の南側を経て高槻へと至る有馬－高槻構造線は、近畿三角帯の中に位置する顕著な東西性の活断層である。勝尾寺川の下流域は、この東西性の活断層を反映している。

北摂山地の大部分は、丹波層と呼ばれる古生代末から中生代前半に堆積した泥岩・砂岩などから構成される部分と中生代白亜紀頃の花崗岩類のところとから構成されている。花崗岩類は、一般に深層風化が著しく進んでおり、侵食が著しい。これに対し、花崗岩類と丹波層の接触部は接触熱変成しており、ホルンフェルスと化している。ホルンフェルスとなっているところは侵食に対して抵抗力が強く、花崗岩類のところでは差別侵食が生じており、ホルンフェルス部分が突出した地形を構成している（巻頭写真13－6、13－7参照）。

これまで北摂山地の森林は、天然林が65パーセントを占め、近畿地方の山地としては人工林の割合が低いといわれてきた。確かにこの地域では、スギ、ヒノキの植林された比率は多くない。しかしながら、林業統計の天然林の中には、人間の働きかけがなければ生長し難いアカマツやクヌギ、コナラなどの二次林が含められており、人間と環境との関わりを考える上には問題がある。歴史的に形成されてきた景観や、自然と人間との関係がこの中では見落とされているといえよう。

第3章　河川流域スケールでみた国際文化公園都市

国際文化公園都市域は、安威川とその支流の茨木川、さらにその支流の佐保川、勝尾寺川の流域に属している（巻頭写真13－8参照）。北摂レベルのスケールでみると、この地域の河川はリニアメントの

影響を強く受けて直線的な谷を形成している。

流域レベルでみると、山地は3つに大別することができる。

ひとつは、起伏が比較的大きく、深く直線的な谷が刻まれた最も上流域に位置する山地である。中－古生代の泥岩などの堆積岩の地域に対応し、小さな谷によって刻まれることがなく、標高400m程度の穏やかな山地となっている。この地域では、集落は幅の狭い開析谷に沿って延びる道路に面した路村のようにみえることもある。しかし、全体としては集村をつくることなく開析谷中に散在する。この地域は、安威川流域でありながら、行政区としては、京都府亀岡市に属するところが大半を占める。

もうひとつは、起伏が大きく深く鋭い欠床谷が刻まれた山地である。鴻応山から清阪峠まで、北西－南東方向に主軸が延びている。山頂の高度は、鴻応山が標高678.9m、湯谷ケ岳が標高622.4m、竜王山が標高510.0mを測り、上流域の山頂高度より100－200m高い。この地域が、変成作用によって侵食に強いホルンフェルスとなっていることによる（巻頭写真14－9参照）。このため、京都府と大阪府の行政区界は、ここに位置している。安威川の分水界ではないが、この付近に住む人たちにとっては、精神的な境界を形成しているものと考えられる。この山地の南東端に位置する竜王山は、下流域からみると、非常にめだつ山容をなしており信仰の対象となってきた。雨乞いに霊験があるといわれている。

現在、これらの地域は、二次林のヤブムラサキ－コナラ群集が卓越する地域となっている。砕石採取が大規模に実施された場所を除き、近年、森林伐採や植林などの人為を受けた形跡があまりみとめられない。この地域では、山頂には集落はないが、山地の北東側に栢原川の支流が深く入り込んでおり、その谷にはいくつかの集落が立地する。

竜王山の南側では山地は、標高200－250mへと急激に高度を低下させ、尾根と谷は複雑に入り乱れている。この地域より上流側が、リニアメントの明瞭な、シンプルな地形や土地利用であったのと大きく異なる。もちろん、この地域にも近畿トライアングルに特徴的なリニアメントはみとめられるものの、上流側ほど単純ではない。車作から大岩付近までは北西－南東および北東－南西のリニアメントが卓越する。安威川本流は、清阪から生保まで直線的な流路をとっているのも、リニアメントである。また、忍頂寺から泉原へ延びる主要地方道豊中亀岡線は、安威川に平行するリニアメントである。この地域は相対的に起伏が小さく、浅くて複雑な形状をした山地を形成している。集落立地などの土地利用が複雑な様相を示すのは、この地域が中生代白亜紀の花崗岩類から構成されているためと考えられる。近畿三角帯の花崗岩類から構成される山地は、花崗岩が深層風化して、マサとなっているために侵食に弱く低平化しやすい特徴を持つ。マサ化した花崗岩類の地域では、容易に岩盤を掘削することができるため、水田化が可能である。花崗岩類の地域には複雑な小谷が刻まれており、ここには水田が拓かれている（巻頭写真14－10参照）。

植生は、近年、シイなどの常緑広葉樹も増えつつあるが、燃料革命以前の影響はまだ残存しており、モチツツジ－アカマツ群集とヤブツバキ－コナラ群集が混在する二次林となっている。また、カキ、ナシ、クリの栽培も盛んである。

集落は、土石流扇状地帯のほかに山腹緩斜面、さらには尾根上にも立地している。また、ひとつの集落がひとつの村を構成しているのではなく、いくつかの集落がひとつの村を構成する一村多集落型となっている。

山地の南側には、半固結の堆積岩から形成された丘陵が隣接し、さらにその南側には平野が広がっている。丘陵は、第三紀鮮新世末から第四紀更新世前期（約300万年前－約数十万年前）にかけて堆積し

た大阪層群と呼ばれる半固結状の地層から構成されている。大阪層群最下部は湖に堆積した地層、そして下部から上部にかけては湖と海に堆積した地層から構成されている。その中にふくまれる化石の研究から、最下部を除き湖成層は気候の寒冷な時期に、海成層は気候の温暖な時期に堆積したことが判明している。大阪層群には、Ma0からMa11までの12枚の海成層が存在することが明らかにされている。また、多数の火山灰が検出されており、地層の厳密な対比が行われている（M.Itihara,et al 1975)。前述した六甲変動が本格化したのは新しく、大阪層群が堆積しつつある途上であったことが知られている。すなわち、堆積が始まった頃には、山地は現在のように突出していなかった。このため、現在は和泉山地で隔てられている西南日本外帯に分布する結晶片岩や緑泥片岩起源の砂礫が、大阪層群の堆積物中に存在する。また、香川県五色台のサヌカイトも大阪層群中から検出することができる。

さて、国際文化公園都市が開発されつつある場所は、以上のうち主として花崗岩の地域と前述した大阪層群から構成された丘陵の一部である。花崗岩地域と丘陵の一部とが開発対象地となったのには理由がある。すでに平野は、人々の生活の場となっており大規模な住宅開発ができるような状況ではない。また、丘陵は1970年頃からニュータウンに代表される大規模住宅地やゴルフ場として開発が進んできており、開発しやすく生活に便利なところから開発が進行していた。たとえば、このような開発例として、茨木サニータウンや粟生間谷地区の住宅、あるいは茨木国際ゴルフ場、あいがわゴルフ場などがあげられる。

1960年代の半ばに始まる経済の高度成長期以前においては、集落に近い丘陵や低山地は里山として、日々の生活に必要な薪炭や水田や畠の肥料を供給し続けた。ところが、経済の高度成長期に生じた燃料革命によって、それまで薪炭に頼っていた状態から石油、ガスといった化石燃料に依存する生活へと急速に変化したのである。その結果、里山として欠くべからざるものであった低山地や丘陵は、経済の高度成長期の初期に、無用の土地として二束三文の価値しか持たなくなってしまった。他方、この頃から、人口は都市に集中しはじめ、多量の住宅が必要となった。そこで、このような人々の住宅需要を満たすために、住宅開発された場所は、かつて里山であった山地や丘陵であった。ここではニュータウンと呼ばれるような、大規模な住宅地開発がおこなわれた。里山は村落共同体の共有林であることが多く、広い面積にまたがっていた。このため、大規模住宅地開発のためには好都合な条件を備えていた。さらに、丘陵は半固結の堆積物から構成されていたため、ダイナマイトを使用することなく、パワーショベルやブルドーザなどの大型土木機械で容易に宅地造成ができるという利点があった。深層風化した花崗岩で構成される低山地は、丘陵ではないものの、丘陵に準ずるような地形的特徴を持っているのである。安価でしかも開発が比較的容易な場所なのである。

花崗岩類で形成された土地や大阪層群の地域を造成した場合、いくつかの問題があることもしばしば指摘をされている。たとえば、尾根部分を切土した場所と谷部分を盛土した部分では、地震や崖崩れの危険性が大きく異なる。また、巨大な建築物の場合、切土部分と盛土部分にまたがるような部分で災害が発生しやすいことはよく知られている。さらに、大阪層群分布域では海成粘土部分で地すべりや崖崩れが多発したり、地層中のイオウが雨に含まれる二酸化炭素と結合し硫酸となって流出することが知られている。しかしながら、ひとたび造成されてしまえば、どこの部分が切土であるか、どこの部分が盛土であるかとか大阪層群の海成粘土層分布などの見極めはかなり難しいものになる。土地造成時やそれ以前の情報が災害の少ない街づくりのためには必要であると考えられる。

参考文献

M. Itihara et al. 1975 Stratigrapy of the Plio-Pleistocene Osaka Group in Sennan-Senpoku area, South of Osaka, Japan. Jour. Geos. Osaka. C. U. 19－1

第4章　集落間スケールでみた国際文化公園都市周辺

国際文化公園都市開発予定地は、東部、中部、西部の3地区から構成されているが、いずれも既存の集落を避けて区域が設定されている。しかし、これらの地域に隣接していくつかのの集落が存在する。以下に近代以前に成立していたところを中心に集落の立地について検討を加えたい。

この地域には、天保郷帳に名前が記されているムラとして千提寺、泉原、佐保庄ノ本、佐保神合がある。これらの場所は、明治22年に合併し清渓村の一部となり、さらには昭和30年に茨木市に編入された。また、天保郷帳に粟生として記されている一部に粟生岩阪がある。粟生岩阪は明治22年以来豊川村の大字であったが、昭和31年12月1日に箕面市に編入され、同年12月25日には茨木市に属するようになった。

千提寺は、近世の村高が242石で安定しており、人口は166人（明治9年）、187人（明治22年）、153人（昭和58年）と推移している。集落は花崗岩の山地の南東側斜面に散在しており、集中を欠いている。村高を明治9年の人口で割ると1.46という数値が得られる。隠れキリシタンの里ではあるが、天満宮が存在する。

泉原は山間部としては656人と人口が多く、2つの隣接した大きな集落から形成されている。集落は丹波層群から構成される山地の南東に位置した土石流扇状地帯に立地している。旧清渓村の中心としての機能を有しており、郵便局や小学校、中学校、高等学校の分校や市役所の出張所などが存在する。近世の村高は646石、明治9年の人口は592人であった。村高を人口で割ると1.09という数値が得られる。西側の集落には素盞嗚尊神社、浄土真宗大谷派長徳寺、東側の集落には諏訪神社、浄土真宗大谷派長福寺がある。

花崗岩類の山地の谷に分布する佐保は、丹波山地に典型的な一村多集落型のムラであり、免山、庄本、梅原、馬場、神合などから構成される。近世の村高770石余（庄ノ本664石、神合106石余）、明治9年の人口494人であり、平均すれば一人あたり1.56石の値が得られる。このムラには、高座神社、言代神社、浄土真宗大谷派救恩寺、教願寺、教円寺がある。

この地域や周辺で一人あたりの石高を求めてみると、人口が集中し中心的な機能を持つ集落では1.0－1.2程度、そしてそうでない集落では1.5－1.6程度の値が得られた。この地域では、近世、近代を通して人口や村高の変化が小さく安定していた。食料生産と人口との間に生態学的均衡が保たれていた可能性が高いのである。かつて日本人の成人男子は一年間に一石の米を消費するといわれていた。この点から考えても、上記の数値は的外れなものではないとみなしてよかろう。花崗岩類の地域において集落と集落との距離がおよそ800m存在するのは、人口と食料生産との間の微妙なバランスを意味していると考えられる。

第５章　集落スケールでみた国際文化公園都市周辺

佐保ムラの一集落である免山を例として集落立地を検討してみたい。免山集落は、北西側に季節風をさえぎるための裏山が存在する南向き斜面に立地している（巻頭写真14－11参照）。この斜面は土石流扇状地帯からできている。22戸からなる集落はひとつの谷をほぼ満たしており、これ以上に拡大することは不可能である。耕地は別の谷に存在するが、潅漑用の溜池をほとんど持っていない。また、この地域が深層風化の著しい花崗岩地域であり、山が浅く小谷しか発達しないことや、耕地が谷頭付近まで拓かれているために集水域が狭く潅漑用水の確保が難しい。土地の傾斜が急なこともいっそう潅漑条件を悪くしている。

宅地や耕地になっていない土地の多くは、森林となっているが、それは人間が植生におよぼしたインパクトの違いから、自然林、植林、二次林、最近耕地から二次林が復活しはじめた林の４種類に分けることができる。この中で特に注目されるのは、かつて水田や畠として利用されていたものの、現在は耕されることがなくなり二次林が成立しかけているところと、過度な人間のインパクトによって二次林とはいえ、貧弱な林相を示す場所がめだつことである。

さて、第二次世界大戦敗戦直後の1946年に撮影された４万分１モノクロ空中写真（巻頭写真14－12参照）、高度経済成長期直後の1973年に撮影された２万分１モノクロ空中写真（巻頭写真14－13参照）、バブル経済絶頂期の1991年に撮影された８千分１カラー空中写真（巻頭写真14－14参照）のそれぞれを画像処理し、免山集落周辺の森林を比較してみた。そうすると、1946年段階が最も森林面積が少なく、しかも断片的で複雑な分布をしていたことが判明した（巻頭写真15－15参照）。これに対し、1973年になると森林面積は増加し、その分布は集中するようになった（巻頭写真15－16参照）。その一方で、山手台にみられるような大規模な住宅開発が実施されまったく森林が失われる場所も生じてきたのである。そして、1991年段階になると、森林面積はさらに増加した。かつて一度は耕地として開発された場所でありながら、再び森林に戻った場所がめだつようになったのである（巻頭写真15－17参照）。

一般に、第二次世界大戦後の日本では土地開発が進行し、森林が伐採され住宅地化すると考えられてきた。たしかに、そのような開発が進行したのは事実である。しかしながら、その一方で、一度は耕地化していた場所が減反政策や労働力不足などの影響を受けて、再び森林へと戻ったり、里山として利用され二次林であったところが燃料革命の影響で自然植生に戻るというような状況も生じている（巻頭写真15－18参照）。実際には、アカマツが減少し、それに代わってシイが増加しつつある。こういった状況を、里山が荒れたと考えるか、自然が回復しつつあるとみなすかは、立場によって意見が大きく異なるところである。

さて、圃場整備も国際文化公園都市周辺の景観を大きく変えつつある。これまで狭小でさらには急傾斜などの理由によって潅漑が難しかった棚田が、圃場整備されつつある。従来のままの棚田であれば、労働力の必要な割に生産性があがらず、農業従事者の高齢化とともに耕地として放棄され、森林へと帰っていくことになるに違いない。こうした場所に圃場整備が施され水田が維持されることは現時点では、大いなる無駄のようにみえる。しかしながら、圃場整備が、2020年から2030年頃に予測されている地球

規模の食料不足を視野に入れた耕地の維持を目的としているならば、重要な意味をもつものと考えられる。

ま と め

京阪神大都市圏に隣接しながら、山間に位置するため当地域は，近世あるいはそれ以前の景観が維持されてきた。しかしながら、国際文化公園都市の開発は、この地域を京阪神大都市圏の一部としてしまうことを意味している。これまで長期間にわたり成立し、維持されてきた景観が、大きく一変することになる。また、景観以上にそれを維持してきた社会や社会組織は変わらざるをえなくなる。これらは、ある意味において環境にうまく適応した結果であったといえよう。国際文化公園都市の開発によって生み出される新たな環境は、そこに住む人たちにとって、はたしてどのようなものになるのだろうか。今後もその推移をみつめていきたい。

Ⅵ. 建造物調査

茨木市北部における集落構成と伝統民家

大場　修

第1章　調査経緯及び調査方法

本稿は、茨木市北部地域における伝統的な農村集落の集落構成と伝統民家の建築形式に関する、建築史的調査研究である。すなわち、同地域に点在する農村集落の中でも、特に伝統的集落景観を良く留める免山・泉原・馬場の各地区（図1）を中心に、建築調査及び集落調査を行った。

具体的には、まず免山・泉原・馬場の各地区において集落景観の現況についてその特色を把握するために、集落を構成する主要家屋の屋根伏図を作成した上で、主屋の伝統的な建築形式の類型を求め、その立地状況を把握し、あわせて土蔵や長屋門など付属屋の分布状況を検討し、さらには免山集落を取り上げて、ここでは集落景観の構成要素として石垣の存在に注目しその集落景観上の評価を試みた（第2章）。

次に、単体として重要な伝統的民家の代表例として免山集落の4棟をはじめ、泉原・馬場・庄ノ本の各集落でそれぞれ1棟を選び、これらの実測復原調査を行い、近世中期から大正期にかけての伝統民家の建築構成と年代的な特徴などについて検討を行った（第3章）。

さらに、旧清溪村8村についての『家屋調査原図』（昭和2年、免山　篤家所蔵）と地籍図（昭和4年、免山　篤家所蔵）を基礎史料として、昭和初期における免山・泉原・馬場の各集落の集落構成を明らかにし、あわせて現状と比較しつつ、この間の集落構成の変化を考察した（第4章）。

なお、調査は平成7～9年の3カ年にわたり、京都府立大学住居学科大場研究室に所属する大学院学生ならびに専攻学生らとともに実施した。なかでも、『家屋調査原図』の検討は多くの作業量を伴ったが、これについては主として専攻学生の山本絵美が担当し、大場が統括した。

第2章　集落景観及び集落構成の現況と特色

第1節　免山集落（図2～5、写真1～6）

茨木川上流佐保川流域にあり、南斜面に沿って紡錘形のまとまった塊村を構成する。集落の南端は、茨木川と府道（府道余野茨木線）とによって区切られ、府道から集落へは、佐保川に架かる免山橋を渡って入ることになる。

1．集落景観の構成

集落内には主として、東西方向の細街路が地形に沿って湾曲しつつ走り、街路の両側の屋敷にはかなりの敷地の高低差があるために、通りの左右は石垣によって土留めがされる。免山橋から北にのびる集

図１　集落配置図

落への導入路の左右にも、雛壇状に造成された宅地を型どる石垣が築かれている。これらの石垣は、自然石を巧みに組み上げた野面積と切石積のものに大別できるが、ともに集落景観を特徴づける重要な要素となっている。しかも、東西に延びる街路の左右の敷地の高低差は、主屋１階の階高分やあるいはそれ以上に及ぶ箇所もあることから、通常の平地集落には見られないユニークな集落景観を形づくっている。

２．伝統的家屋の構成

宅地割りの形態は、特に規則性もなく乱雑なものが多い。また敷地の境界線は板塀で囲っている部分もあるが、集落全体を見るとはっきりしていず曖昧である。各屋敷は主屋を中心に離れ座敷や土蔵、その他の付属屋から構成される。図２からは、これらの各家屋が長辺を東西方向に向けて、すなわち多くが南面し、しかも東西の等高線に沿って層状に建ち並び整然とした家屋配置を取っていることが知れる。

主屋の入口は殆どが南入りの平入りである。主屋の前面が道と接している場合は、道からまっすぐ主屋の入口へアプローチすることとなるが、集落の中央部で見られるように、屋敷の入口が北側にあると裏手から廻ってくる形となる。主屋が南入りでかつ山地に立地する集落でしか見られない特異性といえよう。

主屋の形式については、茅葺き家屋は教願寺を含めて７棟、ツシ２階建ての民家が３棟でこれらが伝統的な集落景観の要素となっている。それに加えて戦後の新築民家でもそれ以外の伝統的な民家の形式を受け継いだ外観を構成する家屋（伝統的新築と呼ぶ）が当集落では多い。

次に付属屋として代表される土蔵であるが、22軒中13軒が所有している。普通は家相の習いに従って、北西（乾蔵）や南東（巽蔵）の方角に位置することが多い。しかし当集落では、屋敷に対する土蔵の方角は様々である。おそらく屋敷に余裕のあるものだけが主屋の裏手に土蔵（乾蔵）を持ち、東西に長い屋敷においては前面に農作業用スペースや庭を設けるために北側いっぱいに主屋が配置され、その結果土蔵は主屋の脇などに建てられたと考えられる。

また、集落景観を構成するその他の要素として、植栽された樹木による緑の自然景観をあげることができる。免山集落は大小の樹木によって緑にあふれた自然景観がよく維持され、石垣や伝統的な家屋とあいまって良好な農村集落を構成している。

以上、免山集落には、斜面を切り開いて造成された集落ゆえの独自の集落構成が見出され、敷地の高低差と多彩な石垣に、豊富な植栽があいまって集落景観を特色あるものにしている。しかも、新旧の民家が共に良く伝統形式を維持し、あわせて蔵などの付属屋の存在に農村集落の伝統が良く継承されているといえる。

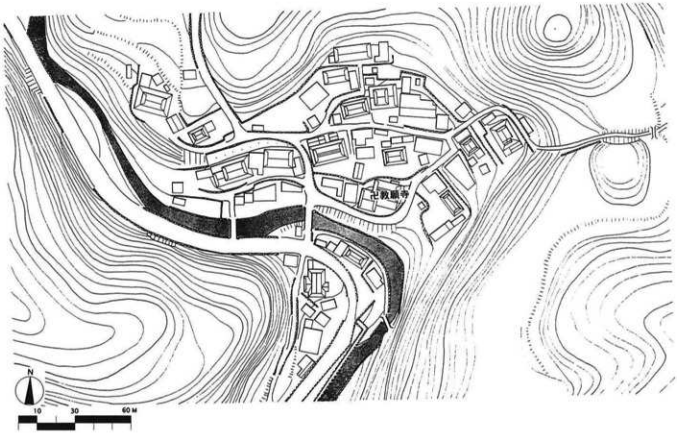


図2　現状・屋根伏図（免山集落）

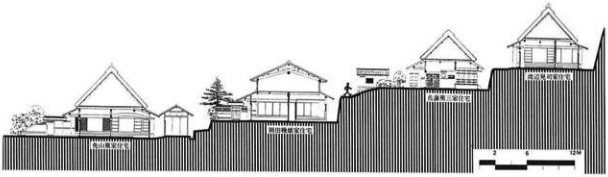


図3　集落断面図（免山集落）

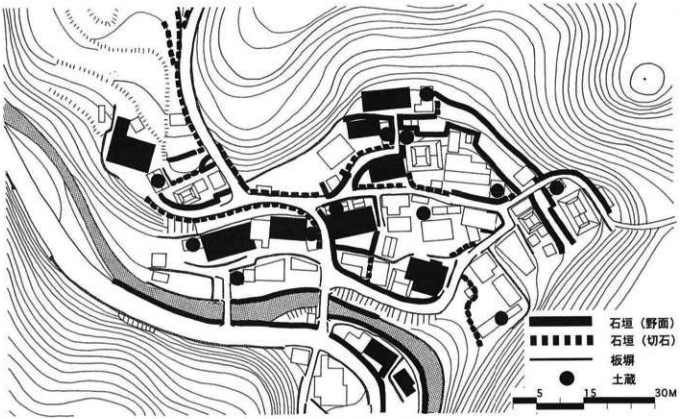


図4　擁壁分類図（免山集落）

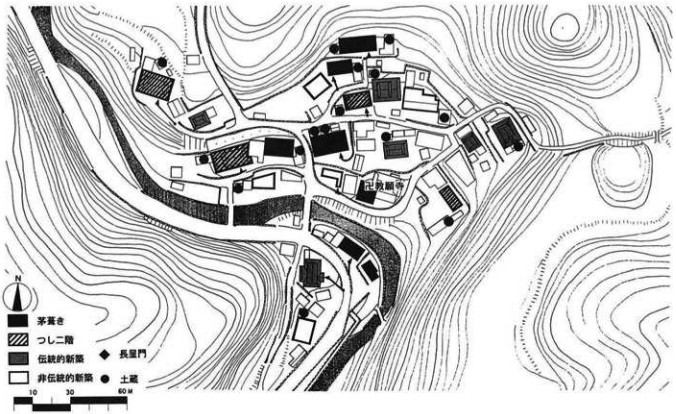


図5　現状・主屋の形式（免山集落）

第2節　泉原集落（図6・7、写真7～12）

佐保村の北、佐保川上流部にある山間の村。泉原集落はこのあたりの集落の中で最も規模の大きい集落でおよそ150軒程からなる。清渓小学校・幼稚園を中心とし、そこから東西・南北と広範囲に広がっている。大きく東西に2分される（地元では西谷・東谷と呼び分けている）が集落内でも神社・寺があり集落の中心部が含まれる西谷側の集落調査を行うことにした。

1．集落景観の構成

集落内は主要な道が南北にのびていて、それに対し東西に層状に石垣が築かれている。この集落の宅地割りは、南北の道路に接し石垣によって型取られた東西に長い矩形をしているものが多い。免山集落と同様に、主屋は南面し層状に建ち並んでいるが、免山集落に比べて緩やかな形状をとり何層にも連なっているため、その集落景観はおだやかで、かつ、ゆとりが感じられる。

主屋の入口は、多少東入りがあるものの、殆どの主屋が南入りの平入りである。

南北方向の通りから各主屋への経路だが、長屋門などを南北方向の通りに面するように、つまり主屋とL字型で配置し南北の通りより直接屋敷にはいる形式と、南北方向の通りより左右へ私道が延びそこから屋敷へはいる形式の2通りが見られる。この左右に延びる経路は当集落の配置と景観を特徴づけている。

2．伝統的家屋の構成

主屋の形式については茅葺き家屋が27棟、ツシ二階建ての民家が10棟残っている。これら以外の戦後の新築民家についても入母屋屋根の伝統的民家が多く建てられ（19棟）、伝統的な集落景観を構成する要素として評価できる。

他に集落景観を構成する要素として土蔵・長屋門があげられる。先に述べたように、長屋門は主屋と平行に配置するもの、L字型に配置するものに配置形式が大別される。また図より土蔵を所有する家は、家相の習いに従って北西の方角（乾蔵）に建てているものが多いことがわかる。土蔵の所有率は免山集落に比べ少ないものの、西浦家のように現在もなお3棟もの土蔵を残すのは当集落では恐らく唯一で貴重である。

第3節　馬場集落（図8・9、写真13～18）

馬場集落は、茨木川上流域にあり免山集落より少し南に位置する。大正4年の大火事をはじめ、昭和になってからも2度の火事に遭っているために、集落景観は他の集落とは多少異なる。

1．集落景観の構成

馬場集落は山と茨木川によって囲まれ、南斜面に沿ってひょうたん型の塊村を構成している。北より南に行くに従って勾配がきつくなり、家屋も密集している。宅地割りは不規則でかつ不整形である。隣家との境界線も板塀など設けてはいるものの、景観的には不明瞭な印象を受ける。先に述べた免山集落・

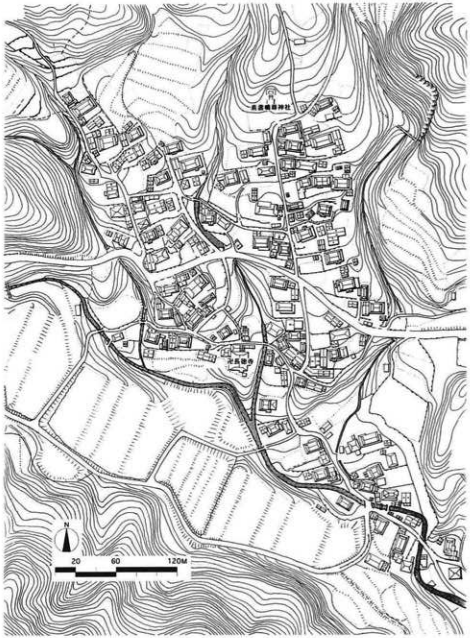


図6　現状・屋根伏図（泉原集落）

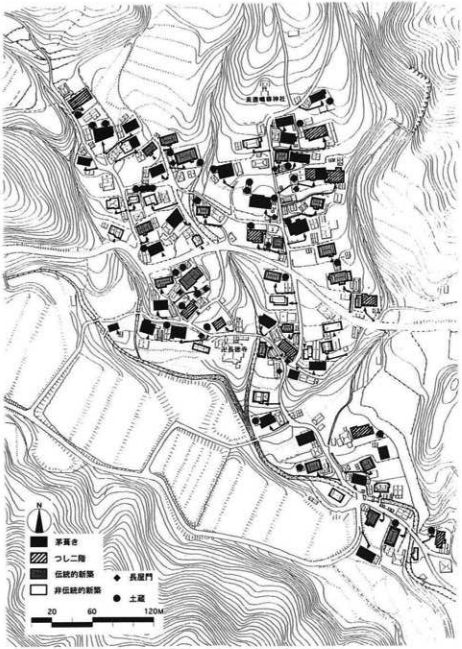


図7　現状・主屋の形式（泉原集落）

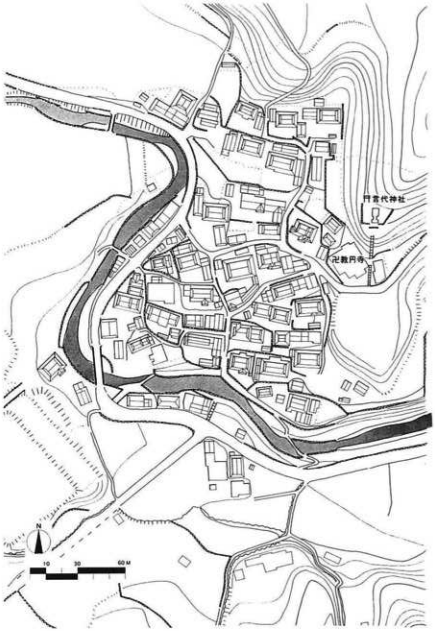


図8　現状・屋根伏図（馬場集落）

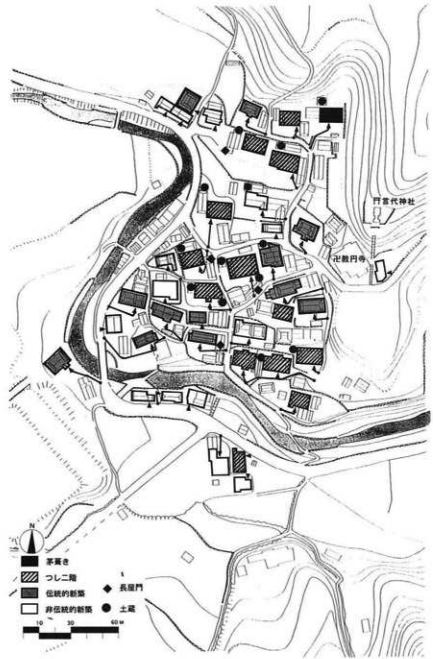


図9　現状・主屋の形式（馬場集落）

泉原集落が主に東西方向に石垣を築いていたのに対して、当集落は一様ではない。しかし、主屋の配置は南面して建ち層的な分布を示している。集落内は曲がりくねった迷路的な道路形態にもかかわらず、この層的配置は集落にまとまりを与えている。

各主屋の入口への経路は、基本的には敷地が道路と接している部分より屋敷へ入っていく。しかし、馬場集落は複雑な宅地割りをしていることから、便宜上隣家の敷地を経路とするものもある。このことが結果的に境界線を曖昧にしていると思われる。

2．伝統的家屋の構成

主屋形式は、ツシ2階建ての家屋が13棟（31.7%）と大きく占めているのに対し、茅葺きの家屋が集落の北隅にわずか1棟しか残っていない。過去の3度に渡る火事が原因である。また、戦後の新築に関しても、以前茅葺きやツシ2階建てが建てられていた家屋は伝統的新築である場合が多いが、畑や空き地であったところに建てられた新築は非伝統的家屋が多い。

長屋門は主屋に対して大抵L字型に位置している。また土蔵については、泉原集落と同様に家相に従って、1棟所有する家屋は全て北西の方角に乾蔵を持ち、2棟所有する家屋は乾蔵に加えて南東の方角に建て巽蔵とする。ツシ2階建ての家屋や、茅葺きの家屋などの伝統的な集落景観を保っている家屋が、あわせて土蔵や長屋門を所有している傾向がはっきりと見て取れる。

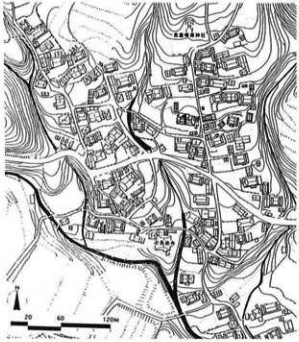
第3章　代表的な伝統的民家

調査を行った各民家は、内部の改造状況が各家でかなり異なるものの、これらはみな主屋の外観を始め屋敷構えなどが良く維持されており、いずれも各集落を代表する家屋である。特に後述する西浦章雄家住宅（泉原）は18世紀前期に遡り、その家柄と併せて文化財的価値の高い民家遺構であることが明らかとなった点は大きな成果であった。

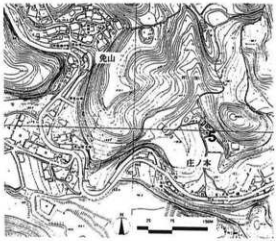
以下、調査家屋7軒について一覧表（表1）にまとめ、調査家屋の位置を分布図（図10）に示した上で、各家の概要を述べる。

表1　調査家屋一覧表

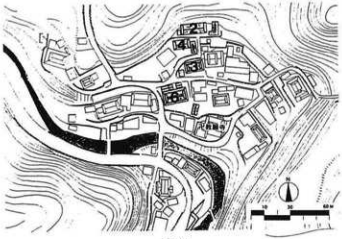
No	名称		住所	建築年代	屋根	主屋の向き	付属屋の構成		平面形式	当初の主屋規模	縁間（間）	柱間装置		
							長屋門	土蔵		桁行×梁行：間		ﾀﾃｲﾄ・ﾖｺｲﾄ 壁	ﾀﾃｲﾄ・ﾖｺｲﾄ 建具	ﾀﾃｲﾄ・ﾖｺｲﾄ 3建
1	西浦章雄	家住宅	泉原	18世紀前期	茅葺	南向	○	3棟	2列4間取型	8間×4間強	4間	差鴨居2本溝	差鴨居4本溝	差鴨居4本溝
2	渡辺晃司	家住宅	佐保1166	明治初期	茅葺	南向		2棟	2列4間取型	7間×5間半	3間	差鴨居2本溝	差鴨居2本溝	差鴨居3本溝
3	岡田種雄	家住宅	佐保1113-1	明治中期に盗大国柱より上手を改造	瓦葺	南向		1棟	2列5間取型	7間半×4間半	4間	差鴨居2本溝	差鴨居2本溝	差鴨居3本溝
4	佐藤馬三	家住宅	佐保 265	明治末期に大改造	茅葺	南向		1棟	2列4間取型	7間半×3間半	3間	差鴨居2本溝	差鴨居3本溝	差鴨居3本溝
5	荒田興造	家住宅	佐保 265	明治42年移築・当初18世紀末	茅葺	南向		1棟	2列4間取型	8間半×4間半	3間半	差鴨居4本溝	差鴨居4本溝	差鴨居4本溝
6	兔山　篤	家住宅	佐保1161	大正元年竣工	茅葺	南向		2棟	3列6間取型	9間強×4間半	3間半	差鴨居2本溝	釣鴨居2本溝	差鴨居2本溝
7	北浦照之	家住宅	佐保	大正4年起工	瓦葺	南向	○	2棟	3列7間取型	11間×5間半	5間半	差鴨居2本溝	差鴨居2本溝	差鴨居2本溝



泉原



庄ノ本



免山

馬場

図10　調査家屋の集落と位置

第１節　西浦章雄家住宅（泉原）（図11、写真19～24）

当家は屋敷南東に長屋門と板塀を石垣の上に築き、他を圧する豪壮な屋敷構えを持ち、その家柄の高さが窺える。実は、江戸後期の京都の見聞記である「帝都帰遺」の著者西浦白源は、天明６(1786)年に西浦家の三男として生まれたという。すなわち、西浦家は身分的には百姓に属するとはいえ、村方において一定の格式をもつ家の１つであったと考えられている（松尾　寿「近世後期民衆の京見物」『島根大学文理学部紀要』第９号　1975)。

文政２(1819)年に白源が著した「法誹薄」では百年前に当家の前宅が焼失したとされ、これを信ずるならば当家はその後の再建ということになる。さて、主屋は下手及び裏手が大きく改造されてはいるが、主屋の表側を始め主要部分は復原することができた。それによると、当初はザシキとナンドの境に床の間と仏壇を挟むこと、ザシキ廻りには１間ずつ柱が建つこと、クチノマの表開口を始め、ダイドコとの境、あるいはダイドコと土間境には４本溝の差鴨居を用いる、などの諸点に他の民家には見られない古い形式が認められた。

また大黒柱と庭大黒柱が１間もずれ、カマヤを広くとる構成も古式である。裏手は改造により不明が多いが、このように各所に古形式が復され、18世紀前半に建て替えられたことを建築的にも裏付けられる。

当家は、その家格の高さと西浦白源ゆかりの家であるとともに、18世紀前期まで遡る古民家である点で、その歴史的意義はすこぶる高い。

第２節　渡辺晃司家住宅（免山）（図12、写真25～30）

当家は、免山集落の北側の山手に位置し、集落内で最も高い屋敷地に構えている。当家の屋敷は、南側の佐藤家の前面道路より３ｍ程の高低差があり、急勾配の坂道を登り主屋に至る。

当家の屋敷は南北の奥行きが狭く、よって主屋を中心にして蔵や納屋等を左右に配置する。

茅葺き入母屋の主屋は屋敷の北側に接するように寄せて建てる。現状では桁行き9.5間と長いが、これは居室上手に座敷などが増築された結果であり、当初は桁行７間で右カッテの整形四間取り民家である。当初の居室廻りは表側２室が共に６畳、裏手の２室を４畳半に構成する。先に述べたように、後に８畳の座敷とその背後の６畳がさらに上手に増設されて、座敷廻りの拡充が図られた。

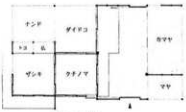
さらに、当初のザシキの表側には、式台を設けて座敷へと導く玄関に改造された。この様に当家からは、座敷廻りを書院座敷として整える増改築の経緯が読みとれ、座敷を重視する志向の一端が窺えて興味深い。

第３節　岡田種雄家住宅（免山）（図13、写真31～42）

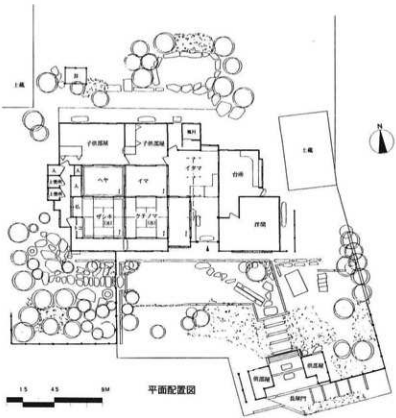
免山集落のほぼ中央、免山　篤家の北に位置し、西側に土蔵を寄せ、主屋は桟瓦葺きのツシ２階建ての家屋である。左手の土蔵と板塀に囲まれた前庭には、南側に位置する免山　篤家にまで届く程の大きな松の木が植えられ、屋敷の伝統的な景観を引き立たせている。

断面図

長屋門立面図



復原平面図



平面配置図

図11　西浦武司家住宅

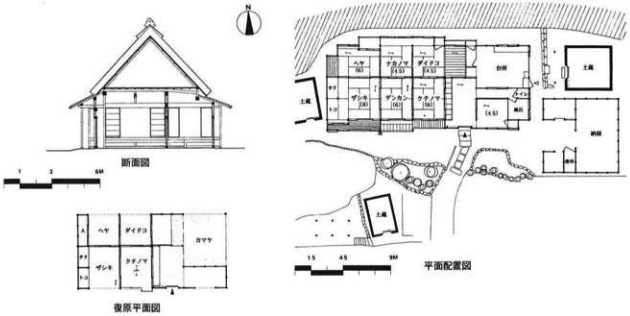


図12　渡辺晃司家住宅

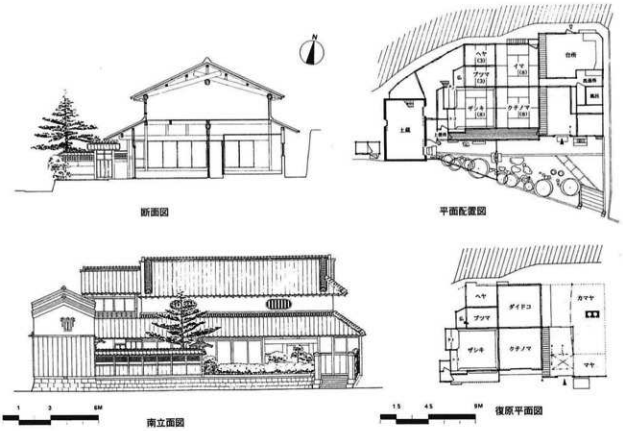


図13　岡田種雄家住宅

主屋は南に庭を確保するために、裏手の石垣に接するように建てられている。平面形式は右カッテの二列五間取り型で、表列に８畳のクチノマとザシキを配している。裏手のダイドコも８畳であり、従ってザシキの裏手は本来なら８畳の間となるはずであるが、不整形な敷地のためやむなく６畳分しかとれず、しかも当初から３畳２室に分割されて、表側をブツマとしている。

実は、当家の主屋は明治中期に庭大黒柱列より上手が大改造されている。そのため主屋の大半部分は当時の改造後の状況しか把握できない。但し、当初のマヤ及びカマヤの構造には当初材が残されている。

第４節　佐藤篤三家住宅（免山）（図14、写真43～48）

当家の主屋も、梁組などの主要な骨組みを残し、造作の大半は90年前の大改造（骨抜きと呼ばれている）されている。従って、調査は大改造時の構成を復原的に求めるに留まっている。

他の家と同様に、当家も主屋を敷地の北側の石垣の際に寄せて建てることで手前の南庭を広く確保する。屋敷への石段の左手には雪隠を設け、居室上手に接して蔵を配している。また離れ屋が屋敷の南東に設置され左手の雪隠とあわせて独自の屋敷景観を形づくる。

主屋は茅葺き入母屋で、桁行7.5間の左手3.5間分を土間、残る右手を整形四間取りに間仕切る。ザシキのみを８畳と最も広く取り、ザシキを重視する傾向が当家にも窺える。

第５節　庄田興造家住宅（庄ノ本）（図15、写真49～54）

庄ノ本の山道を登っていくと、城山と呼ばれる山の裾に当家がある。現在は別棟を建てて居住され、当家の主屋は納屋代わりに使用されているが、ご当主の愛着から大切に保存されている（『わがまち茨木－民家・民具編－』茨木市教育委員会　1986　P.20）。当家主屋は明治42年に現在地に移築されたものである。主要な部材の多くはこの時に補充されていて、当初材も一部に残されているのみである。この当初材から、移築前は18世紀に遡る古民家であることが窺えるが、現状では詳細を不明とせざるを得ない。

さて、主屋は茅葺入母屋で桁行8.5間・梁行4.5間あり、この付近の一般農家としては大きい。平面は左勝手の二列四間取りで、ザシキ・デノクチ及びダイドコを８畳とし、ナンドのみ押入をとるため６畳間となっている。一方、土間側のマヤ・カマヤには建築当初の姿を残している。特に表のマヤが改造されることなく残されている点は貴重である。またマヤとカマヤとの境壁を大黒柱列より表側にずらしてカマヤを広くとっているのは、先の西浦家の当初形式と共通し当家主屋の古さを示している。

第６節　免山　篤家住宅（免山）（図16、写真55～69）

免山　篤家住宅は、免山集落を代表する民家である。集落のほぼ中央に位置し、板塀と蔵で屋敷は取り囲まれている。とりわけ、屋敷西面は、板塀の下部に高く石垣が積み上げられ、集落導入部分の景観を特色づけている（写真２参照）。また、屋敷の北西の隅（乾の方角）には通りに沿って２棟の蔵（乾蔵）を建て、集落中央部のランドマークとなっている。

さて、当家には普請関係の史料がほぼ完存し、これらから当家住宅の建設の経緯が詳細にわかる。こ

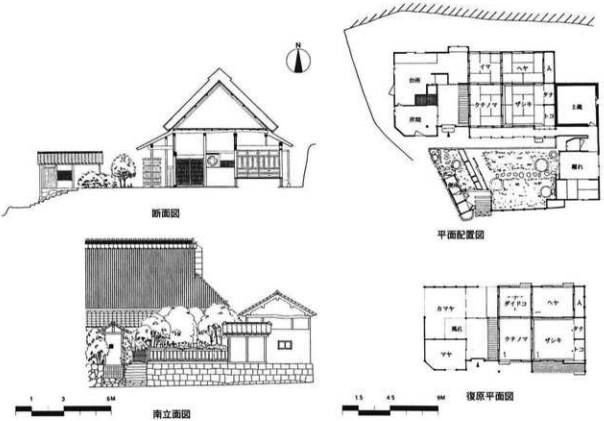


図14　佐藤篤三家住宅

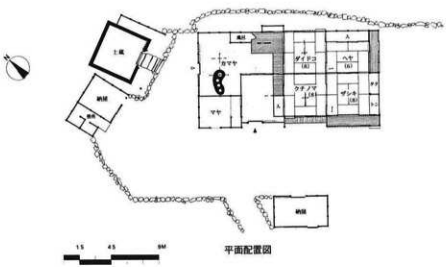


図15　庄田興造家住宅

れによると、当家の住宅は明治末より起工し、大正元年に竣工したことが知れる。建築時の間取り図も残されている。この図と現状の主屋とを比較すると、驚くべきことに、当家の現状はほとんど建築当時から変わっていないことが判明する。

すなわち、主屋には改造がなく当初形式がほぼ完存しているわけで、しかも屋敷構えも当初の構成が良く維持されている。このような例は稀有であり、当家の建築史的価値、文化財としての価値の高さは論を俟たない。特に、台所に相当する土間の裏手部分の勝手廻り（水廻り）は、普通ならばどうしても大小の改造を受けるのだが、当家では竈を中心として伝統的な土間空間が良く保存されていて、生活史的な価値も高い。

居室廻りに目を転ずると、土間から順にクチノマ・玄関・座敷と３室が続き間を構成し、同様に居室の裏列も大きく３分割されている。特に、目を引くのが座敷廻りの構成である。床・棚に加えて付書院・欄間・長押など座敷飾りが完備され、その造作は手が込んで実に繊細である。座敷に面した前栽も良く手入れがなされていて、庭空間と一体となった座敷廻りの室内意匠は瀟洒で、明治末期から大正期にかけての大工技術の質の高さが窺える。

このように、免山　篤家住宅は屋敷構えから主屋内部の室内造作に至るまで、伝統形式が比類を見ないほど良く維持されていて貴重である。近年伝統建築に対する文化財指定は徐々に年代を下げ、大正期の建築についても積極的に評価し指定されている状況に鑑みるならば、当家も文化財指定の候補としての要件を十分に備えている。

第７節　北浦照之家住宅（馬場）（図17、写真70～78）

当家は、大正３年の馬場集落の大火で土蔵を残して全焼した。翌４年から再建に取り掛かったが、その間、土蔵での仮住まいで過ごしたという。「大正四年四月　北浦本宅材木明細簿」など、再建に関する普請史料も残されていて貴重である。屋敷は、主屋を中心に南東の角に長屋門を配し、長屋門に隣接して辰巳蔵、さらに主屋の北西位置に乾蔵を据えている。この２棟の蔵は先述のように大火以前の建築であるが、辰巳蔵が最も古いという。

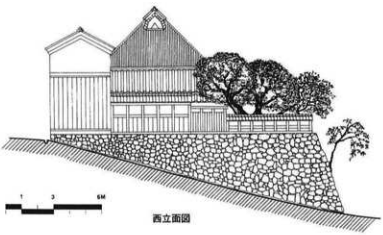
さて、再建された主屋は、桟瓦葺きのツシ２階建てで、桁行９間、梁行５間半の本体の上手に落ち棟の座敷棟（桁行２間）を張り出させて大型である。外観の２階は、当初は外壁や軒裏ともに塗籠とし虫籠窓であった。しかし、昭和49年に垂木を取り替え、付け柱を添え、さらに虫籠窓をガラス窓に改装したために、当初の外観とは趣を異にしている。

間取りは、下手の間口（桁行）５間分を当初は広い土間とし、上手に角屋座敷を含め３列に７室を整形に配している。居室中列の表は玄関の間で、表には式台を構えて格式的な構成を取っている。玄関の間を中心として、その上手には座敷飾りが揃う整った座敷を設け、玄関の裏手には仏間を配し、さらに玄関の間の下手には土間境にクチノマが取られている。クチノマの表側には出格子を設けるなどの構成は先の免山　篤家住宅と同様であり、大正期の民家の意匠傾向として注目される。

一方、土間廻りは、元郵便局の事務室として使用されていたこともあり、さらに平成５年度に現状に至る改装を受けているので、当初の状況は判然としない。

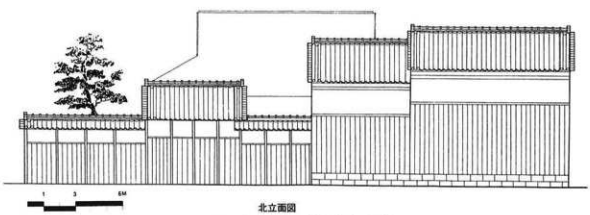
当家の主屋で注目されるのは、構造形式である。すなわち、北浦家住宅を除けば、上記した各民家は、茅葺きであれ瓦葺きのツシ２階建てであれ、いずれも１階の天井部に大梁（上屋梁）を架け渡し、天井

断面図



西立面図

南立面図



北立面図

図16－1　免山　篤家住宅（1）

図16－2　免山　篤家住宅（2）

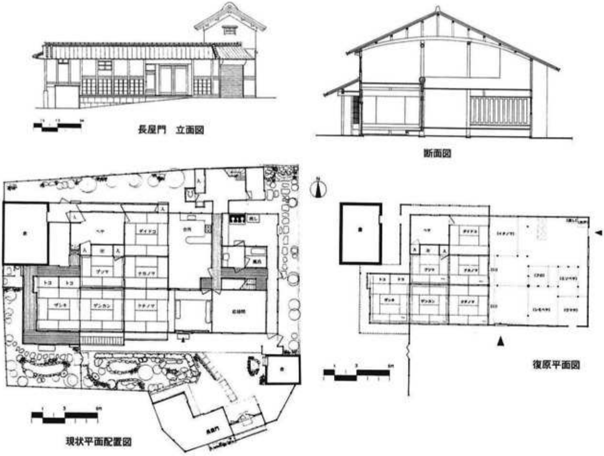


図17　北浦照之家住宅

は大和天井を構成する形式で共通する。換言すれば、瓦葺きのツシ2階建て民家であっても、茅葺き民家の伝統的な構造形式が踏襲されていることになる。しかしながら、北浦家住宅では、柱を長く建ち昇らせ、大梁に相当する梁はその上端の高い位置で組まれている。そのために、1階上部の天井には、大引きが半間おきに渡され、2階の床を構成するという、町家建築に多く多用される軸組形式を取っている点が注目される。しかも、1階の庇下では成の高い腕木が張り出して深い軒の出を支持している。特に表土間廻りの軸組の構成は、この地域の伝統的な民家の木組みとは異なる構造手法であり、大火を契機とした伝統民家の新傾向として注目される。

このように当家は、馬場集落の大火後の再建民家の典型例として貴重であり、しかも、長屋門や土蔵などの屋敷構えもよく保存されていて、馬場集落における伝統的な集落景観の拠点としても重要な存在である。

第4章　昭和初期の集落構成

第1節　はじめに

農家住宅を対象とする建築史（民家史）研究では、遺構の残り具合に規定されて、どうしても上層の農家を調査対象とすることになる。また、集落の空間構成の復原についても史料的制約が多く、全体像を把握することは容易ではない。このことから、集落の空間構成や集落内の景観特性など集落全体を捉えた成果はごく少数に留まっている（草野和夫『東北民家史研究』中央公論美術出版　1991、津田良樹『街道の民家史』芙蓉書房　1995、他）。

前章までは、単体としての民家形式と現状の集落構成の把握に努めた。本章では、前章までの成果をふまえて、出来る限り遡及的に集落構成の復原を行い、現状と比較しつつ集落構成の原型を求め、この地域の農村集落の原風景を明らかにすることを目的としたい。

集落構成を復原的に検討するため、清渓村の8集落（泉原・馬場・免山・庄ノ本・千提寺・梅原・神合）が収録されている昭和2年の『家屋調査原図』（免山　篤家所蔵、写真1参照）と昭和4年の地籍図（同家所蔵、図18）を用いた。これらを現状の都市計画地図と重ね合わせて、昭和初期の集落構成の復原を試みた。そして、調査地域の中でも村落の構成がよく維持され、比較的伝統的な集落景観を保つ茨木市北部清渓村の内、免山・泉原・馬場の3集落を取り上げ、これらについて、現状と昭和初期の状況とを比較・検討し、戦前から現在への伝統的農村集落の変容過程を明らかにした。

第2節　昭和初期の農村集落

1．『家屋調査原図』について

『家屋調査原図』には、泉原・高山・馬場・免山・庄ノ本・千提寺・梅原・神合の各集落について、1屋敷ごとに、家主名とともに家屋配置が描かれ、その各棟ごとに〈木・平・藁・住〉〈木・二・瓦・雑〉といったように、構造、階数、屋根の葺き方、用途などが記載されている（図19、及び付表）。用途は、住・土蔵・倉・雑と書き分けられている。本稿では、土蔵と倉を同じものと見なした。屋根の葺

き方については、藁・瓦・亜・杉皮・皮の５種類が記載されているが、煩雑さを避けるために杉皮と皮を同種として扱うことにした。また、各家屋には桁行と梁行が記載されているために、それぞれの家屋規模が知られる。

以下、これら各屋敷の当時の家屋配置を明らかにして、地籍図をもとに戦前期の集落構成を復原した。

２．昭和初期の集落構成

本節では各集落ごとに現状の集落と比較しながら、昭和２年の『家屋調査原図』をもとに、昭和初期の集落構成について述べる。また、図20～22は、『家屋調査原図』と地籍図により、昭和初期の家屋配置を可能な限り復原した。

１．免山集落（図20）

集落の規模は現状と変わらず、軒数も１・２軒増減はあるものの殆ど変化がない。

主屋の配置は、現状と比較すると同じ位置・同じ向きで建てられている。主屋以外の付属屋の配置も現状とよく対応する。入口の向きは、佐保川以南では東西に振れるものの、全てが南入りとなっている（入口の位置は、土間部分を記すものとクチノマ部分を記すものがある）。主屋の形式については茅葺き民家が18棟、ツシ２階建ての家屋が５棟であり、茅葺き民家の中にツシ２階建ての家屋が点在する構成であったことがわかる。

土蔵は23軒中17軒が所有しており、免山集落の土蔵所有率は73.9％と高い。同集落は、比較的富裕な農民で構成されていたと推察される。土蔵の配置に注目すると、免山　篤家のように土蔵を２棟連ねる家屋が目立ち（写真79）、いずれも北西（乾）の方角に建てられている。また主屋の規模が大きくなるにつれて、土蔵を数多く所有している傾向も見て取れる。

２．泉原集落（図21）

泉原集落においては、『調査家屋原図』のうち18軒分の家屋の史料（網掛けした範囲）が失われているために、それ以外の部分で検討を行っている。

現状と比較して集落の形は変わらず、軒数もほぼ同数である。主屋の向きも大半が南面し、現状と変わらない。ただし、集落内の南端に見られる家屋は集落の中心に向かって建てられている（現状も同様である）。

主屋の形式は茅葺きの家屋が46棟、ツシ２階建ての家屋が９棟である。免山集落と同様に、茅葺きを主体とする集落内にツシ２階建てが点在した集落構成を取っている。

また、瓦葺きの主屋の中には3.5坪や6.6坪といった著しく小さい家屋もある。これは、他地域では「ひと間住まい」などとも呼ばれる１室程度の隠居家等に多い形式である（川島宙次『滅びゆく民家－間取り・構造・内部－』主婦と生活社　1973　P.27）。

土蔵は、55軒中22軒が所有している。土蔵の数も戦前と現状では殆ど変わってないことが図７と図21との比較からわかる。

３．馬場集落（図22）

現状と比較すると、戦前期より北西と茨木川以南へ広がっていることがわかる。家屋配置の状況は、現状と基本的に変わらない。

大正４年の大火事で集落中央から南半分が焼けたことから、主屋の形式は北半分では茅葺き、南半分は瓦葺きツシ２階建ての民家が相対的に多い。大火のために、他集落とは異なり瓦屋根が高い比率を占

図18　昭和４年地籍図（清渓村部分）

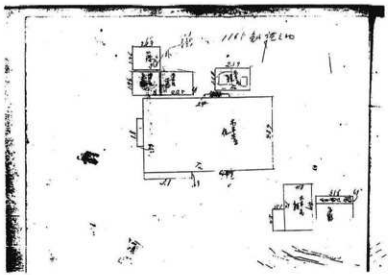


図19　『家屋調査原図』の一例（免山　篤家分）

写真１　家屋調査原圖

める集落であったことが知られる。

土蔵は34軒中15軒と集落の約半数が所有している。土蔵の配置は免山集落と同様に、当集落でも２棟を並べて建てられていることが多く、しかも例外なく屋敷の北西または南東に建てられている。

３．主屋規模と付属屋の構成

以上、３集落について昭和初期の集落構成を概観した。その結果、まず、当時の主屋配置を現状と比較すると、現状は新築であっても戦前の主屋と同じ位置・同じ向きで建てられていることが殆どで、主屋は伝統的な家屋配置を継承していることが知られた。主屋形式は、馬場集落を除けば茅葺民家が主流で、その中にツシ２階建て民家が散在する状況であったことがわかった。馬場集落の南半分は、先述のように大正４年の火災により

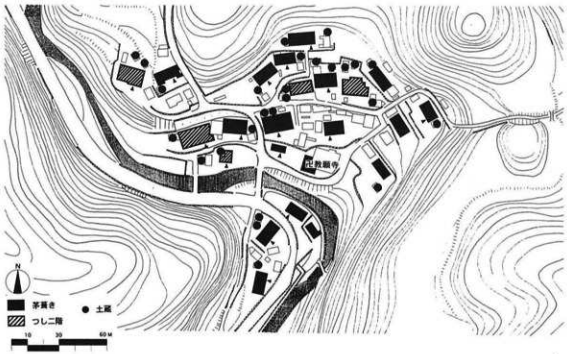


図20　昭和初期・主屋の形式（免山集落）

その後改築されたもので、ツシ２階が大部分を占めている。入口は南入の平入りが殆どである。免山・馬場では土蔵を２棟連ねる主屋が目立ち、その方角は免山では北西が多く、馬場は北西または南東に必ず配置されていた。

本節では、昭和初期における主屋の規模を始め、離れや土蔵など付属屋の構成などについて検討した（表２）。

１．屋根形式　（図23）

居宅について、火災のあった馬場を除くと、茅葺は各集落約６割から８割、瓦葺は約２割から４割の値を示しており、茅葺民家の中に瓦葺民家が散在している様子が窺える。

すなわち、［住］と記された主屋などの居宅についてみてみると、茅葺きが泉原84％・高山63％・免

表２　伝統的農村集落の変容（昭和２年～現在）

	免山		泉原		馬場	
	昭和２年	現在（平成８年）	昭和２年	現在（平成８年）	昭和２年	現在（平成８年）
主屋の形式	23棟 茅葺 18棟（78.3％） 瓦葺 5棟（21.7％）	22棟 茅葺 7棟（31.8％） 瓦葺 4棟（18.2％） 新築 11棟（50％）	55棟 茅葺 46棟（83.6％） 瓦葺 9棟（16.4％）	53棟 茅葺 22棟（41.5％） 瓦葺 6棟（11.3％） 新築 25棟（47.2％）	34棟 茅葺 21棟（61.8％） 瓦葺 13棟（38.2％）	41棟 茅葺 1棟（2.4％） 瓦葺 13棟（31.7％） 新築 27棟（65.9％）
新築の形式		住：非＝6棟：5棟 （55％：45％）		住：非＝14棟：11棟 （56％：44％）		住：非＝12棟：15棟 （44％：56％）
土蔵数	26棟	16棟	31棟	27棟	19棟	13棟
土蔵所有家数	17軒	13軒	22軒	21軒	15軒	11軒
土蔵所有率	73.9％	59.0％	40.0％	39.6％	44.1％	26.8％
入口の向き（確認できたもののみ）	南入― 15棟 東入― 1棟	南入― 18棟 東入― 2棟	南入― 24棟 東入― 2棟 西入― 1棟 北入― 1棟	南入― 41棟 東入― 3棟 北入― 1棟	南入― 27棟 東入― 1棟 西入― 1棟	南入― 32棟 東入― 3棟 西入― 2棟 北入― 2棟

※瓦葺：ツシ２階
※住：住統的新築
※非：非住統的新築
※土蔵所有率＝土蔵所有家数／家数（主屋数）

図21　昭和初期・主屋の形式（泉原集落）

図22　昭和初期・主屋の形式（馬場集落）

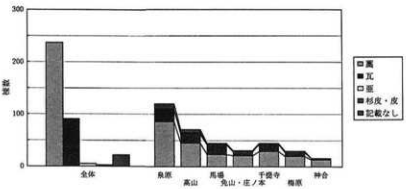


図23　居宅（住）の屋根形式の分類

山78%・千提寺64%・梅原67%・神合81%・馬場62%であり、集落内の6～8割が茅葺きであったことがわかる。また瓦葺きは泉原16%・高山37%・免山22%・千提寺36%・梅原33%・神合19%・馬場38%であった。

また、土蔵は約90%が瓦葺で、残り約10%は茅葺であった。現在でも、集落内には茅葺きの土蔵が1棟残っているという（免山　篤氏談）。

2．主屋と離れの規模（図24）

主屋は、20～30坪が集落全部の約34%と最も多く、30～40坪が約27%を占めている。これらの間取は梁行・桁行と最初に行った家屋の実測調査よりおおよそ検討すると二列四間取であり（図25）、主屋全体の半数以上が二列四間取の形式をとっていたと推測できる。しかし、20坪以下の主屋が、集落全部の約30%を占めていたこともわかった。これらは居室が1・2室程度の小規模住居であると思われる。一方、離れは、梁行3間以下、桁行も1例を除いて5間を越えない。

3．土蔵と主屋規模（図26）

土蔵所有率（土蔵所有家数／家数）を各集落について求めると14.8%（梅原）から73.9%（免山）と大差があった（馬場：44.1%、高山：41.1%、千提寺：40.0%、泉原：40.%、神合：21.4%）。また、主屋の規模が20坪以下では土蔵の所有は殆どなく、20坪以上で1棟、30坪以上で2棟、50坪以上で3～4棟土蔵を所有していることが判明し、主屋規模との相関が認められた。前項に示した主屋の間取の検討と合わせると、土蔵の所有は、二列四間取が成立する規模より大きい家に限られることが明らかになった。

第3節　農村集落の変容過程

1．戦前より現在に至る主屋形式の変化（図27・28）

調査を行った集落において、戦前より建て替えが行われたと考えられる主屋は、免山52%（12／23棟）、泉原58%（32／55棟）、馬場73%（25／34棟）であった。建て替えられた民家は、6坪程より60坪程まで幅広い階層にわたっていた。一方、取り壊された民家は比較的小規模なものに多く、結果として、現在まで残る民家は相対的に規模が大きいことも明らかとなった。現存する主屋は殆ど梁行約4間、桁行6.5間を越えていることが現状の調査からも知られる。つまり、梁行4間、桁行6.5間以下のもの、換言すれば約26坪以下の主屋の殆どは、この間に姿を消したことになる。

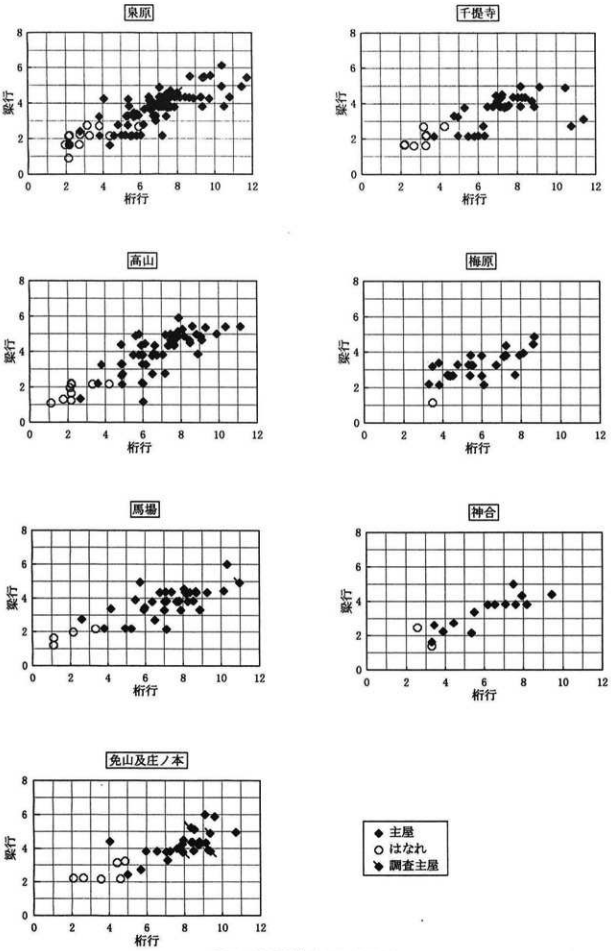


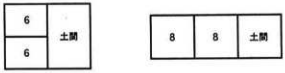
図24　家屋規模（主屋・はなれ）

①10 坪以下（梁行 2 間程、桁行 4 間程）… 一間取り

17/300 棟（5.7%）

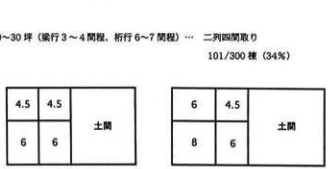
②10～20 坪（梁行 2～3.5 間程・桁行 4～6 間程）… 二間取り・三間取り

63/300 棟（21%）



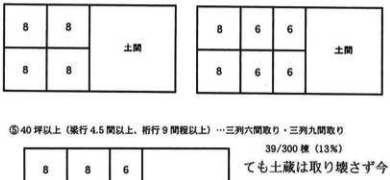
③20～30 坪（梁行 3～4 間程、桁行 6～7 間程）… 二列四間取り

101/300 棟（34%）



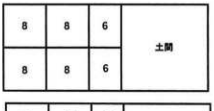
④30～40 坪（梁行 4～5 間程、桁行 8～9 間程）…二列四間取り・三列六間取り

80/300 棟（27%）



⑤40 坪以上（梁行 4.5 間以上、桁行 9 間程以上）…三列六間取り・三列九間取り

39/300 棟（13%）



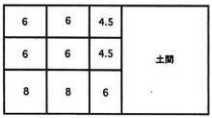


図25　主屋規模（坪数）と平面形式との関係

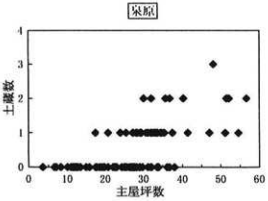
2．伝統の評価

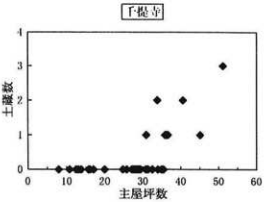
調査集落の宅地割の形態は、地籍図と現状を比較したところ殆ど変化はみられなかった。主屋に関しては、免山・泉原では主屋数に変化はなく、集落規模も変わっていない。しかし、馬場では畑地から宅地への転化があり集落域は拡張している。

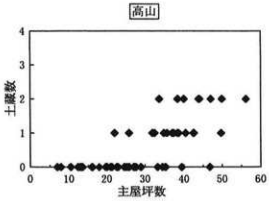
主屋形式は、ツシ 2 階建て民家の棟数は殆ど変わらず、茅葺民家が大きく減少した。また約半数が明らかに戦後の新築であった。しかし、新築の内半数は、伝統的な民家形式の外観を受け継いでおり、集落景観を構成する要素として評価できる。主屋の向き・入口は、現状も南向平入りが主流である。要するに、集落内での主屋の向きが現在もかなり揃っていることを意味し、建て替えが進行しても家屋形式及びその立地は、伝統形式が継承されているといえる。なお、土蔵については主屋の建て替えを経ても、土蔵所有家数の減少は少ない。すなわち仮に主屋を新築しても土蔵は取り壊さず今日まで所有していることがわかる。

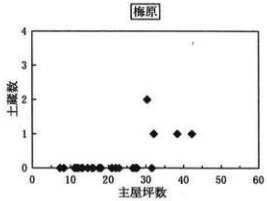
3．まとめ

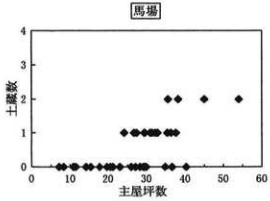
これまでの考察結果をさらにまとめると、昭和初期においては、二列四間取と考えられる20～40坪の主屋は集落の過半数を占めていたが、逆に20坪以下の小規模民家も約 3 割程占めていたことも判明した。しかし、これら小規模民家は殆ど現存していない。また土蔵の所有率は、集落ごとに大きな差があったが、その所有数は主屋規模に比例し、20坪以下では

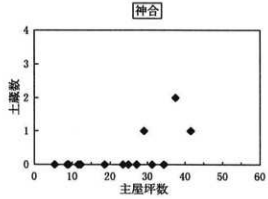












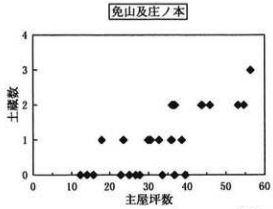


図26　主屋坪数と土蔵数

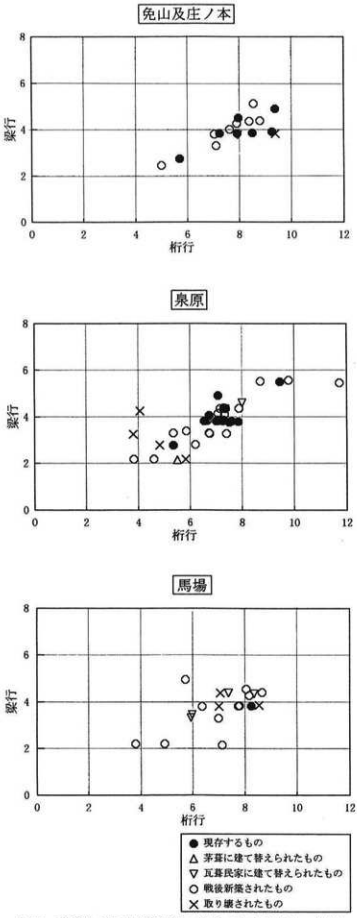


図27　茅葺主屋の規模別動向（昭和２年と現状との比較）

殆ど土蔵を持たないことがわかった。また、小規模民家は今日では姿を消したものの、家屋配置や家屋形式では伝承形式がよく維持されていること、土蔵の残存率が高いことが、伝統的な集落景観を保つ大きな要因となっていることが明らかとなった。

第５章　む す び

以上、茨木市北部地域の農村集落（免山・泉原・馬場の各地区を中心に）を取り上げ、集落構成と伝統民家の建築形式について復原的に検討した。その結果、上記の３集落を中心に伝統的な集落景観と構成が基本的によく維持されていることが確認された。しかも昭和初期と比較しても、戦後の建て替え民家を含めて家屋配置や形式に伝統形式が堅持されていることが確認できた。

また、個別の民家遺構についても、18世紀前期に遡り文化財的価値の高い西浦家住宅を筆頭に、大正期までの各年代の伝統民家が多く維持され、しかも土蔵や長屋門など付属屋を含めた屋敷構えもよく受け継がれていて、伝統性が良好に保持されていることが見いだせた。

大都市近郊にあって、今日なおこの様な農村集落の構成が温存されている事実は貴重である。その伝統的景観ならびに生活様式は、

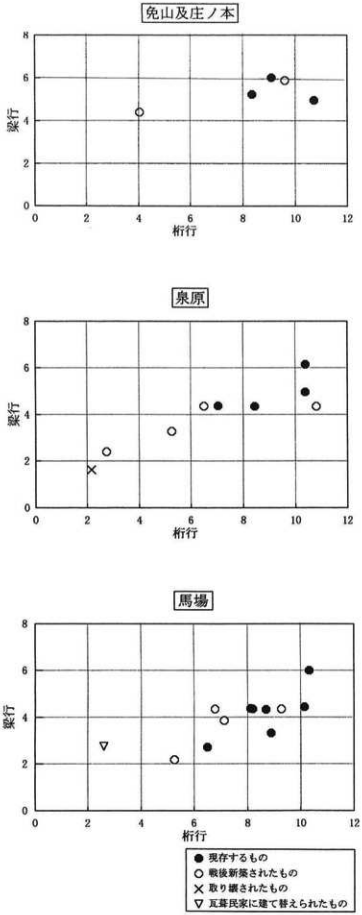


図28　瓦葺主屋の規模別動向（昭和２年と現状との比較）

今後北摂地域の均衡ある発展にとって重要な資産となるはずであり、積極的な保全の方策が検討されることが望まれる。

付表　清溪地区『家屋調査原図』(1927) 記載一覧

泉原(1)　(茨木市)

No.	番地	住					土蔵・倉					雑					備考
		階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	
1	741	平	瓦	7.88	4.36	34.36	二	瓦	2.22	2.05	4.55	平	瓦	2.00	1.63	3.26	
												平	瓦	5.46	2.72	14.85	
2	738	平	瓦	7.33	4.10	30.05	平	瓦	2.20	1.88	4.14	平	瓦	4.32	2.72	11.75	
							二	瓦	2.00	1.80	3.60	平	瓦	2.15	1.62	3.48	
3	737	平	瓦	6.20	2.80	17.36						平	瓦	3.80	2.16	8.21	
4		平	瓦	6.75	3.27	22.07						平	瓦	4.88	2.72	13.27	
												平	杉皮	3.80	1.91	7.26	
5	744	平	瓦	7.60	3.81	28.96						平	瓦	3.25	2.17	7.05	
6	754	平	瓦	5.50	2.15	11.83						平	瓦	3.25	2.17	7.05	
7	756	記載なし		9.46	5.50	52.03	二	瓦	2.80	1.87	5.24	平	瓦	5.45	2.70	14.72	
							二	瓦	2.84	2.28	6.48	平	瓦	2.72	1.63	4.43	
	755											平	瓦	4.18	2.17	9.07	
8		平	瓦	8.44	4.35	36.71						平	瓦	3.80	2.72	10.34	
9	938	平	瓦	7.37	4.35	32.06						平	瓦	3.23	2.72	8.79	
												平	瓦	2.17	1.10	2.39	
												平	瓦	2.10	0.85	1.79	
		平	瓦	3.80	2.72	10.34											
10		平	瓦	7.08	3.82	27.05						平	杉皮	4.88	2.48	12.10	
11	942	平	瓦	6.55	3.81	24.96						平	瓦	5.49	2.72	14.93	
12	943	平	瓦	7.26	3.82	27.73						平	瓦	3.27	2.19	7.16	
13		平	瓦	7.11	3.84	27.30						平	瓦	2.18	1.10	2.40	
												平	瓦	4.64	2.20	10.21	
												平	亜	1.50	1.35	2.03	
14	935	平	瓦	10.38	4.96	51.48	二	瓦	3.26	2.18	7.11	平	瓦	3.28	2.17	7.12	
		平	瓦	2.13	0.90	1.92	二	瓦	2.18	2.18	4.75	平	瓦	4.34	2.72	11.80	
		平	瓦	5.94	2.68	15.92											
		平	瓦	4.38	2.16	9.46											
	別地	平	瓦	2.18	1.65	3.60											
15	940	平	瓦	7.08	4.14	29.31	二	瓦	2.43	1.80	4.37	平	瓦	4.90	2.72	13.33	
16		平	瓦	7.07	4.91	34.71	二	瓦	2.20	1.95	4.29	平	瓦	3.80	2.72	10.34	
												平	瓦	3.30	2.48	8.18	
17		平	瓦	7.85	3.79	29.75						平	瓦・杉皮	3.80	2.12	8.06	
18		二	瓦	5.27	3.28	17.29						平	亜	2.72	1.63	4.43	
19	782	平	瓦	6.73	4.05	27.26	二	瓦	3.45	1.60	5.52	平	瓦	3.15	1.63	5.13	
												平	瓦	1.70	1.75	2.98	
20	785	平	瓦	5.35	3.30	17.66						平	瓦	4.80	1.65	7.92	
21	777	平	瓦	7.09	3.82	27.08						平	瓦	3.28	2.18	7.15	
22		平	瓦	7.40	3.28	24.27						平	杉皮	1.75	1.25	2.19	
												平	瓦	3.82	2.17	8.29	
23		平	瓦	4.60	2.18	10.03						平	瓦	3.27	2.12	6.93	
24		平	瓦	7.07	3.82	27.01						平	瓦	3.81	2.07	7.89	
												平	瓦	3.26	1.70	5.54	
25	768	平	瓦	6.65	3.82	25.40	二	瓦	2.20	1.68	3.70	平	亜	3.26	2.20	7.17	
26	769	平	瓦	8.70	5.52	48.02	二	瓦	2.05	1.65	3.38	平	瓦	6.75	2.72	18.36	
							二	瓦	2.20	2.20	4.84	平	瓦	1.62	1.63	2.64	
							平	瓦	1.68	1.63	2.74	記載なし		2.16	1.64	3.54	
27	814	平	瓦	3.82	2.18	8.33						平	瓦	3.28	2.70	8.86	
28		平	瓦	8.00	4.60	36.80	二	瓦	2.15	1.63	3.50	平	瓦	4.50	2.15	9.68	
							二	瓦	2.72	2.20	5.98						
												平	瓦	2.50	1.95	4.88	
29	811	平	瓦	7.35	4.36	32.05	平	瓦	2.21	1.68	3.71	平	瓦	6.33	2.17	13.74	
												平	瓦	1.99	1.20	2.39	
30	809	平	瓦	7.15	4.35	31.10						平	瓦	2.00	1.00	2.00	湯舎
												平	瓦	4.36	2.33	10.16	
31	807	平	瓦	5.35	2.77	14.82											
32												記載なし		4.30	3.30	14.19	工場
33	791	平	瓦	4.07	4.25	17.30	平	瓦	2.18	1.85	4.03						倉
34	793	平	瓦	7.05	4.37	30.81	二	瓦	2.65	2.03	5.38	平	瓦	2.17	3.96	8.59	
	787	平	瓦・瓦	11.73	5.45	63.93	二	瓦	2.23	2.18	4.86	平	瓦	1.53	0.84	1.29	
		平	瓦	2.76	2.24	6.18	二	瓦	2.70	1.92	5.18	平	瓦	3.25	2.84	9.23	
		平	瓦	3.13	2.75	8.61	二	瓦	2.67	1.94	5.18	平	瓦	1.86	1.35	2.51	
												平	瓦	2.18	1.62	3.53	
												記載なし		2.72	2.17	5.90	
												記載なし		1.52	1.09	1.77	
												平	瓦	1.30	1.05	1.37	
	788 別地											平	瓦	3.81	2.17	8.27	
35	796	平	瓦	7.07	3.82	27.01						平	瓦	5.25	2.16	11.34	
36	819	平	瓦	7.40	3.81	28.19						平	瓦	4.53	3.26	15.09	
37		平	瓦	6.50	4.36	28.34	二	瓦	2.20	1.66	3.65	平	瓦	3.78	2.72	10.28	
38		平	瓦	2.75	2.40	6.60											

泉原(2)　(茨木市)

No.	番地	住					土蔵・倉						雑					備考
		階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数		
39		記載なし		7.30	4.38	31.97	平	瓦	1.60	1.55	2.48	平	瓦	3.38	2.15	7.27		
							二	瓦	2.20	1.85	4.07	記載なし		3.00	2.00	6.00	下屋	
40		平	藁	7.32	4.35	31.84						平	皮・瓦	4.96	2.50	12.40		
41		平	瓦	10.39	6.15	63.90	二	瓦	2.80	1.88	5.26	平	瓦	4.85	2.72	13.19		
		平	瓦	2.17	1.65	3.58						平	杉皮	3.00	2.18	6.54		
												平	杉皮	3.82	2.72	10.39		
42	825	平	藁	6.73	3.30	22.21						平	藁	2.65	1.65	4.37		
43	827	平	藁	7.29	3.85	28.07	二	瓦	2.20	2.18	4.80	平	瓦	2.20	2.18	4.80		
												平	瓦	3.80	2.72	10.34		
44		平	亜	4.38	1.64	7.18												
45	866	平	藁	6.58	3.82	25.14						平	藁	3.80	2.70	10.26		
46		平	藁	5.85	3.39	19.83						平	亜	3.80	2.72	10.34		
47		平	瓦	2.17	1.63	3.54						平	瓦	4.10	2.72	11.15		
48		平	藁	4.82	2.78	13.40						平	藁	1.75	0.90	1.58		
49		平	藁	9.79	5.57	54.53	二	瓦	2.76	2.10	5.80	平	瓦	4.86	2.70	13.12		
												平	瓦	4.90	1.62	7.94		
												平	瓦	5.42	2.18	11.82		
												平	藁	2.73	2.02	5.51	本宅と同じ?	
50	485	平	瓦	10.80	4.35	46.98	二	瓦	2.06	1.94	4.00	平	瓦	5.25	2.63	13.81		
		平	藁	5.50	3.28	18.04						記載なし		1.65	1.12	1.85	工場	
												平	藁	8.75	3.55	31.06		
												平	藁	1.85	1.55	3.05		
51		平	藁	5.82	2.18	12.69												
52		平	藁	7.01	3.81	26.71						平	藁	3.81	2.72	10.36		
												記載なし		2.20	1.33	2.93		
53	843	平	藁	7.05	3.85	27.14	二	瓦	1.69	1.66	2.81	平	瓦	4.85	2.15	10.43		
												記載なし		1.65	1.51	2.49		
54	491	平	藁	7.50	3.76	28.20						平	藁	3.27	2.15	7.03		
55	1	二	瓦	7.20	2.18	15.70												
56	2	平	藁	6.53	3.83	25.01												
57	355-9											平	藁	8.20	3.10	25.42		
												平	瓦	5.00	4.40	22.00		
58	420	平	藁	6.05	2.21	13.37						記載なし		3.85	2.20	8.47	下屋	
59	423-3	平	藁	5.22	2.20	11.48												
60	424	平	藁	5.00	2.20	11.00						平	藁	3.48	1.65	5.74		
		平	藁	2.15	2.15	4.62												
61		平	藁	5.58	2.18	12.16						記載なし		3.86	2.18	8.41	下屋	
62																		
63	433	平	藁	7.05	3.82	26.93						平	藁	3.82	2.72	10.39		
												平	瓦	2.21	2.17	4.80		
64	435	記載なし		9.26	4.35	40.28	二	瓦	2.20	1.68	3.70	平	瓦	2.18	2.18	4.75		
							二	瓦	2.23	2.20	4.91	平	瓦	3.26	2.72	8.87		
65	4-1	記載なし		5.38	4.22	22.70						記載なし		3.30	1.65	5.45		
66		平	藁	6.81	3.85	26.22						平	藁	4.53	2.17	9.83		
		平	瓦	1.95	1.65	3.22												
67	442	平	藁	7.65	3.80	29.07						平	藁	2.22	1.60	3.55		
												平	瓦	4.88	2.68	13.08		
												記載なし		3.85	2.20	8.47	下屋	
68		平	藁	5.93	3.31	19.63						平	藁	3.80	2.18	8.28		
												平	瓦	2.18	1.90	4.14		
69	436-1	平	藁	7.19	3.84	27.61						平	藁	3.65	2.17	7.92		
70		平	藁	5.68	3.48	19.77						平	藁	3.27	2.72	8.89		
		平	藁	2.72	1.67	4.54												
71		平	藁	7.55	4.32	32.62	二	瓦	2.20	1.65	3.63	平	藁	4.33	2.52	10.91		
												平	藁	1.65	1.65	2.72		
72		平	藁	8.15	4.34	35.37	二	瓦	2.20	2.20	4.84	平	藁	2.15	1.60	3.44		
												平	瓦	5.42	2.33	12.63		
73		平	藁	10.50	3.83	40.22	二	瓦	2.20	1.68	3.70	平	藁	3.75	2.00	7.50		
		二	瓦	3.26	2.17	7.07	平	瓦	2.15	1.65	3.55	二	瓦	4.34	2.72	11.80		
												平	瓦	2.72	2.18	5.93		
74		平	藁	3.80	3.25	12.35						平	藁	1.65	1.40	2.31		
75	858	平	藁	7.35	4.34	31.90	二	瓦	2.18	1.75	3.82	平	藁	2.20	2.20	4.84		
												記載なし		4.10	1.90	7.79	下屋	
76												平	藁	3.55	2.50	8.88		
77		平	藁	7.07	4.34	30.68	平	瓦	2.13	1.68	3.58	平	藁	7.00	1.45	10.15		
												平	瓦	1.47	0.83	1.22		
												平	藁	3.28	1.63	5.35		
												平	藁	1.52	1.42	2.16		
78	1209	平	藁	6.85	3.03	20.76	二	瓦	2.20	1.65	3.63	平	藁	4.70	2.65	12.46		
79	1210	平	藁	7.57	3.84	29.07	平	藁	2.20	1.65	3.63	平	藁	3.76	2.19	8.23		
80		平	藁	7.70	4.40	33.88						平	藁	3.81	2.17	8.27		

泉原(3)　（茨木市）

No.	番地	住					土蔵・倉					雑					備考
		階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	
81	325	平	瓦	7.62	4.41	33.60	二	瓦	2.30	2.25	5.18	平	瓦	4.15	2.09	8.67	
												平	瓦	3.27	2.51	8.21	
82	328	平	瓦	6.55	3.86	25.28						平	瓦	3.85	2.22	8.55	
												平	瓦	2.08	1.1	2.29	
83	1203-4・5	平	瓦	7.62	4.35	33.15	二	瓦	2.20	1.65	3.63	平	瓦	4.32	3.23	13.95	
	別地											平	瓦	2.81	1.60	4.50	
												平	瓦	2.72	2.08	5.66	
84	別地											平	瓦	1.62	1.42	2.30	
85	1201	平	瓦	7.65	4.38	33.51						平	瓦	3.28	2.72	8.92	
86												平	瓦	7.85	4.35	34.15	
87	1197	平	瓦	7.55	3.90	29.45	二	瓦	2.17	1.80	3.91	平	瓦	3.13	2.10	6.57	
88	1160	平	瓦	8.87	4.28	37.96						平	瓦	3.82	2.20	8.40	
	別地											平	瓦	2.72	2.17	5.90	
												平	瓦	2.17	2.24	4.86	
												平	杉皮				
89	1211	平	瓦	6.52	4.16	27.12	二	瓦	2.21	2.15	4.75	平	瓦	3.42	1.63	5.57	
90		平	瓦	7.44	4.55	33.85						平	瓦	3.28	2.18	7.15	
												平	瓦	4.86	2.18	10.59	
												平	亜	1.52	1.18	1.79	
91		平	瓦	9.36	5.46	51.11	二	瓦	3.22	2.16	6.96	記載なし		4.88	2.70	13.18	
92		平	瓦	7.10	3.83	27.19						平	瓦	3.25	1.15	3.74	
93	1108	平	瓦	6.25	3.67	22.94						平	瓦	3.25	2.18	7.09	
												記載なし		3.5	2.00	6.30	
94		平	瓦	7.30	4.27	31.17	二	瓦	2.15	1.57	3.38	平	瓦	2.18	1.60	3.49	
	別地											平	瓦	4.80	2.68	12.86	
95	775	平	瓦	7.15	3.82	27.31											
96		平	瓦	6.60	3.63	23.96	二	瓦	2.65	2.15	5.70	記載なし		4.35	2.72	11.83	
97		平	瓦・瓦	9.70	4.27	41.42	平	瓦	2.25	1.73	3.89	平	瓦	5.68	2.72	15.45	
												平	瓦	1.72	1.64	2.82	柴屋
98	1093	記載なし		8.65	4.33	37.45	二	瓦	2.20	1.72	3.78	平	瓦	2.18	2.18	4.75	
												平	瓦	1.44	1.08	1.56	
												記載なし		5.70	2.35	13.40	
99	1153	平	瓦	7.65	4.72	36.11						平	瓦	4.20	2.20	9.24	
100		平	瓦	11.44	4.95	56.63	二	瓦	2.80	1.72	4.82	二	瓦	4.40	2.77	12.19	
							二	瓦	3.35	2.25	7.54						
101		平	瓦	5.78	3.30	19.07						平	皮	2.02	1.07	2.16	
102	1216-2	平	瓦	6.85	3.30	22.61						平	瓦	3.78	2.15	8.13	
103												平	瓦	7.65	4.85	37.10	工場
												平	瓦	5.43	3.25	17.65	工場
												平	瓦	5.43	4.43	24.05	工場
104												平	瓦・亜	5.44	4.50	24.48	工場
105	54	平	瓦	6.65	3.83	25.47											
106												平	亜	5.43	4.33	23.51	工場
												平	瓦	3.80	2.16	8.21	工場
107	56-3	平	瓦	5.67	3.26	18.48						平	瓦	2.65	2.17	5.75	
		平	瓦	2.19	2.17	4.75											
108	4-1	平	瓦	5.42	3.83	20.76						平	亜	4.00	2.72	10.88	
109	1214	平	瓦・瓦	9.34	3.82	35.68	二	瓦	2.16	2.14	4.62	平	瓦	4.15	2.72	11.29	納家
							平	瓦	2.72	1.62	4.41	平	瓦	2.18	1.65	3.60	物入
												平	瓦	2.18	1.62	3.53	柴屋

高山(1)　（豊能郡豊能町）

No.	番地	住					土蔵・倉					雑					備考
		階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	
1	282	平	瓦	7.55	4.90	37.00	平	瓦	2.18	1.65	3.60	平	杉皮	2.35	1.65	4.87	
												平	瓦	4.30	2.17	10.63	
2	279	平	瓦	6.17	3.26	20.11						平	杉皮・亜	4.36	2.17	8.81	
												平	杉皮・亜	2.33	1.95	3.96	
												記載なし		1.50	1.60	2.56	下屋
3	26	記載なし		7.33	4.35	31.89	二	瓦	2.15	2.15	4.62	平	瓦	2.20	1.10	2.42	土蔵二階未成
	地番外											二	瓦	2.70	1.63	4.40	
	地番外	平	瓦	4.19	2.17	9.09						平	瓦	2.16	2.17	4.69	
												記載なし		6.50	1.55	10.08	下屋
4		平	瓦	5.79	3.82	22.12	二	瓦	2.10	?		平	杉皮	2.70	1.63	4.40	
												平	瓦	1.72	1.33	2.29	
												平	瓦	6.00	2.16	12.96	
5	264	平	瓦	8.62	5.45	46.98	二	瓦	2.20	2.08	4.58	平	杉皮	2.20	1.07	2.35	
							二	瓦	2.23	2.25	5.02	平	瓦	1.33	1.10	1.46	
												平	瓦	4.04	2.18	8.81	
												二	瓦	2.18	2.18	4.75	
	265											平	杉皮	2.50	1.68	4.20	

高山(2)　(豊能郡豊能町)

No.	番地	住					土蔵・倉					離					備考
		階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	
6	20	平	瓦	7.47	5.00	37.35	平	瓦	2.70	1.35	3.65	平	瓦	4.05	2.20	8.91	
7	29	平	瓦	7.88	4.88	38.45	二	瓦	2.27	1.70	3.86	平	瓦	1.68	1.00	1.68	
							平	瓦	1.62	1.63	2.64	平	瓦	5.49	2.18	11.97	
												記載なし		1.70	1.70	2.89	下屋
												二	瓦	2.18	1.63	3.55	離二階部分住
	別地											平	杉皮	2.65	1.62	4.29	
8	422	平	瓦	7.72	5.00	38.60	平	瓦	1.93	1.70	3.28	平	瓦	2.00	0.60	1.20	
												平	瓦	4.90	2.18	10.68	
	別地											平	杉皮	2.18	2.10	4.58	
9		二	瓦	11.14	5.43	60.49	二	瓦	3.25	2.00	6.50	平	瓦	1.75	1.41	2.47	
		平	瓦	2.17	1.64	3.56	二	瓦	2.60	2.25	5.85	平	瓦	4.00	1.62	6.48	
		平	瓦	1.10	1.08	1.19						記載なし		6.50	2.18	14.17	
10		平	杉皮	6.00	1.17	7.02											
11	815	平	瓦	7.20	4.96	35.71	二	瓦	2.26	2.22	5.02	平	杉皮	2.55	1.70	4.34	
												平	瓦	3.62	2.17	7.86	
12	15	二	瓦	4.87	2.65	12.91											
13		平	瓦	4.89	3.30	16.14						平	瓦	3.25	1.89	6.14	
14		平	瓦	6.75	3.80	25.65						平	杉皮	2.95	2.50	7.38	
15		平	瓦	3.60	2.20	7.92						平	杉皮	3.25	2.16	7.02	
16	452	平	瓦	5.80	4.99	28.94						平	瓦	4.25	2.22	9.44	
17	32	平	瓦	5.95	2.24	13.33						記載なし		2.63	2.60	6.84	下屋
18	265											平	瓦	4.55	2.20	10.01	
19												平	瓦	1.78	1.18	2.10	
20												平	亜	5.45	3.25	17.71	工場
21	588	平	瓦	4.92	2.75	13.53						平	瓦	3.00	1.60	4.80	
22	522	平	瓦	8.83	4.98	43.97	二	瓦	2.25	2.20	4.95	平	杉皮	1.40	0.80	1.12	
		平	瓦	2.16	1.25	2.70	平	瓦	2.25	1.70	3.83	平	瓦	3.26	2.18	7.11	
23	521	平	瓦	4.85	4.40	21.34						平	杉皮	3.25	1.65	5.36	
												平	杉皮	3.01	1.66	5.00	
24	529	平	瓦	8.48	4.65	39.43											
25	548	平	瓦	7.64	4.61	35.22						平	瓦	4.90	2.20	10.78	
	別地											平	杉皮	2.20	1.80	3.96	旧屋敷地
26		平	瓦	7.63	4.63	35.33						平	瓦	3.08	2.18	6.71	
												平	杉皮	3.25	2.10	6.83	
27	49	平	瓦	7.65	4.35	33.28											
28		平	瓦	7.40	4.38	32.41	二	瓦	2.25	2.20	4.95	平	瓦	4.90	2.70	13.23	
29	642-1	平	瓦	7.90	5.92	46.77											
30	635	平	瓦	6.00	2.20	13.20						平	杉皮	3.00	2.15	6.45	
31		平	瓦	7.47	4.67	34.88	二	瓦	2.20	2.20	4.84	平	瓦	3.20	2.20	7.04	
												平	杉皮	1.65	1.65	2.72	
												二	瓦	2.17	2.16	4.69	新築
32		平	瓦	4.90	2.15	10.54											
		平	杉皮	1.75	1.30	2.28											
33	730	平	瓦	6.00	3.82	22.92						平	瓦	5.98	2.42	14.47	
												平	瓦	2.17	2.17	4.71	現住形
34	760	平	瓦	5.92	3.82	22.61						平	亜	3.80	2.17	8.25	昨年新築
35	761	平	瓦	7.17	2.78	19.93											
36	780	平	瓦	3.80	3.25	12.35						平	杉皮	3.25	1.70	5.53	
		平	亜	3.30	2.15	7.10											
37	766	平	瓦	5.63	4.90	27.59						平	瓦	3.25	2.17	7.05	
38		平	瓦	6.50	2.75	17.88						平	瓦	3.75	2.15	8.06	
39							二	瓦	2.50	1.65	4.13						
							二	瓦	2.40	2.40	5.76						
40	481	平	瓦	10.36	5.42	56.15	二	瓦	2.20	2.20	4.84	平	瓦	5.44	2.71	14.74	
							二	瓦	2.72	2.18	5.93						
41	578	平	瓦	6.64	4.35	28.88						平	瓦	3.55	2.17	7.70	
42	513	平	瓦	7.66	4.40	33.70	二	瓦	2.80	1.70	4.76	平	瓦	4.87	2.46	11.98	
		平	瓦	2.10	1.95	4.10	二	瓦	2.20	1.60	3.52						
43		平	瓦	5.98	3.30	19.73						平	瓦	3.85	2.20	8.47	
44		平	瓦	6.58	3.92	25.79						平	瓦	3.90	2.18	8.50	
45		平	瓦	6.55	3.83	25.09						平	瓦	3.25	2.20	7.15	
46	23	平	瓦	8.50	4.51	38.34	二	瓦	2.20	2.25	4.95	平	瓦	2.75			
												平	瓦	2.20	2.17	4.77	
	地番外													1.70	1.65	2.81	
47	17	平	瓦	7.05	3.83	27.00						平	瓦	7.60	2.20	16.72	
48	18	記載なし		9.90	5.02	49.70	二	瓦	3.30	2.25	7.43	平	瓦	2.55	1.65	4.21	
												平	瓦	5.45	2.52	13.73	
49	40	平	瓦	9.11	4.67	42.54	二	瓦	2.79	2.24	6.25	平	瓦	7.73	2.70	20.87	
		平	瓦	2.20	2.15	4.73											
50	822	平	瓦	5.93	4.35	25.80	平	瓦	2.15	1.64	3.53	平	瓦	3.25	2.00	6.50	
51		平	瓦	4.85	3.29	15.96						平	亜	3.35	1.69	5.66	

高山(3)　（豊能郡豊能町）

No.	番地	住					土蔵・倉					雑					備考
		階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	
52	875	平	瓦・瓦	8.90	3.88	34.53						平	瓦	3.23	2.13	6.88	
												平	杉皮	2.15	1.62	3.48	
53	990	平	瓦	5.50	3.82	21.01						平	杉皮	2.00	1.65	3.30	
54		平	瓦	6.50	3.78	24.57						平	亜	3.26	2.16	7.04	
												平	亜	1.86	1.18	2.19	
55		平	瓦	6.13	4.45	27.28						平	瓦	5.25	2.72	14.28	
		平	瓦	2.17	2.20	4.77											
												平	瓦	1.90	1.80	3.42	
56												平	瓦	3.23	2.17	7.01	
		平	瓦	2.65	1.33	3.52											
57		平	瓦	8.19	4.89	40.05	二	瓦	2.75	2.30	6.33	平	瓦	6.45	2.20	14.19	
							二	瓦	2.90	2.23	6.47						土蔵二階部分住
	別地											平	杉皮	3.28	2.15	7.05	
58	922	平	瓦	8.10	5.27	42.69	二	瓦	2.25	2.20	4.95	平	瓦	1.65	1.60	2.64	
59		平	瓦	9.05	4.87	44.07	二	瓦	2.20	2.20	4.84	平	瓦	4.90	2.70	13.23	
		平	瓦	2.17	2.17	4.71	二	瓦	2.25	1.94	4.37						
60		平	瓦	9.30	5.37	49.94	平	瓦	1.70	1.67	2.84	平	瓦	5.66	2.72	14.85	
												平	瓦	2.18	1.02	2.22	
	地番外						二	瓦	1.73	1.60	2.77						
61		平	瓦	7.86	5.15	40.48	二	瓦	2.10	1.70	3.57	平	瓦	3.30	1.83	6.04	
												平	瓦	7.53	2.72	20.48	
												平	瓦	1.94	1.55	3.01	

馬場(1)　（茨木市佐保）

No.	番地	住					土蔵・倉					雑					備考
		階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	
1		平	瓦	7.75	3.82	29.61	二	瓦	3.20	1.63	5.22	平	瓦	3.80	2.18	8.28	
	地番外部地											平	瓦	2.10	1.75	3.68	
												平	瓦	3.26	2.72	8.87	
2	497	平	瓦	7.13	2.15	15.33											
	別地	平	瓦	2.16	1.97	4.26						平	瓦	4.33	2.40	10.39	
3	532	平	瓦	7.13	3.85	27.45	二	瓦	2.68	1.70	4.56	平	瓦	4.06	2.18	8.85	
												記載なし		2.15	2.00	4.30	
4	128	平	瓦	10.97	4.92	53.97	二	瓦	2.78	1.70	4.73	平	瓦	1.10	1.05	1.16	
							二	瓦	1.95	1.55	3.02	平	瓦	2.47	1.85	4.57	
												平	瓦	2.18	1.35	2.94	
	別地番											平	瓦	2.25	2.20	4.95	
	別地											平	瓦	4.90	2.72	13.33	
5		平	瓦	7.65	3.82	29.22						平	瓦	2.73	1.15	3.14	
		二	瓦	10.32	6.00	61.92	二	瓦	2.72	2.25	6.12	平	瓦		1.14		住二階部分記載なし
6							二	瓦	2.33	1.72	4.01						
	地番外											平	瓦	4.60	0.80	3.68	酒舎
	別地											平	瓦	3.80	2.72	10.34	
												記載なし		2.00	2.38	4.76	
7	505	平	瓦	8.88	3.32	29.48	二	瓦	2.14	1.94	4.15	平	瓦	4.93	2.70	13.31	
												平	瓦	2.15	1.63	3.50	
												平	杉皮	1.25	1.17	1.46	
8	508-1	平	瓦	4.93	2.20	10.85											
9	516	平	瓦	7.80	3.84	29.95						平	瓦	3.80	2.43	9.23	
10	512	平	瓦	5.26	2.18	11.47						平	瓦	2.15	1.35	2.90	
11	507	平	瓦	7.10	3.82	27.12						平	瓦	5.28	2.72	14.36	
12		平	瓦	3.80	2.20	8.36						平	杉皮	1.55	1.60	2.64	
												平	亜	3.30	2.10	6.93	
13		平	瓦	8.19	4.35	35.63	平		2.70	2.20	5.94	平	瓦	4.35	2.72	11.83	
							二		2.30	2.20	5.06	平	瓦	2.20	2.00	4.40	
14	501	平	瓦	7.38	4.38	32.32	二	瓦	2.20	1.72	3.78	平	瓦	6.50	2.15	13.98	
15	501											平	瓦	4.35	2.43	10.57	
16	496	平	瓦	8.67	4.41	38.23	平	瓦	2.20	1.65	3.63	平	瓦	4.20	2.11	8.86	
							二	瓦	2.10	2.15	4.52	平	瓦	2.18	1.76	3.84	
17	509	平	瓦	7.00	3.30	23.10											
18	494	平	瓦	8.36	4.35	36.37	二	瓦	2.75	1.90	5.23	平	瓦	4.35	2.45	12.13	
		平	瓦	1.10	1.20	1.32						平	瓦	2.70	2.17	5.86	
												平	亜	1.33	0.67	0.89	
												平	瓦	1.63	1.20	1.96	
19	487	平	瓦	8.69	4.33	37.63	二	瓦	2.75	1.65	4.54	平	瓦	4.30	2.43	10.45	
		平	瓦	1.10	1.63	1.79											
20	490	平	瓦	6.37	3.80	24.21	二	瓦	2.20	1.72	3.78	平	瓦	3.80	2.44	9.27	
	別地番											平	瓦	2.75	2.18	6.00	
21	492	平	瓦	5.93	3.32	19.69											
22	546	平	瓦	8.25	3.82	31.52	二	瓦	2.75	1.86	5.12	平	瓦	5.42	2.16	11.71	
												平	瓦	2.15	1.62	3.48	
23	541	平	瓦	8.55	3.85	32.92	二	瓦	2.62	2.23	5.84	平	瓦	3.82	2.15	8.21	

馬場(2)　(茨木市佐保)

No.	番地	住					土蔵・倉					雑					備考
		階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	
24		平	瓦	7.02	3.81	26.75	二	瓦	2.12	1.42	3.01	平	瓦	3.82	2.46	9.40	
												平	瓦	2.42	1.17	2.83	
	別地											平	瓦	4.42	1.76	7.78	
25	61	平	瓦	2.60	2.76	7.18						平	瓦	4.90	2.76	13.52	
26		記載なし		8.17	4.27	34.89						記載なし		6.00	2.75	16.50	
27	527	平	瓦	8.11	4.37	35.44	平	瓦	3.40	2.00	6.80	平	瓦	4.33	2.70	11.69	
												平	瓦	2.16	1.65	3.56	
28		平	瓦	6.50	2.72	17.68											
29	521	平	瓦	5.98	3.45	20.63						平	亜	2.80	1.63	4.56	
30	522	平	瓦		3.58							平	瓦	3.30	2.20	7.26	
												平	瓦	4.86	1.63	7.92	
31	525	平	瓦	7.07	4.38	30.97	平	瓦	2.15	1.88	4.04	平	瓦	3.84	2.72	10.44	
32	526-1	平	瓦	10.14	4.44	45.02	平	瓦	2.20	1.67	3.67	平	瓦	1.70	1.62	2.75	
							平	瓦	2.22	1.70	3.77	平	瓦	4.40	2.42	10.65	
33		平	瓦	6.78	4.35	29.49						平	瓦	4.35	2.70	11.75	
34	50	平	瓦	8.05	4.55	36.63						平	瓦	5.35	2.65	14.18	
												平	瓦	2.15	1.60	3.44	
												平	亜				通舎
35	510	平	瓦	9.26	4.35	40.28						平	瓦	4.37	2.72	11.89	
												平	瓦	4.27	1.65	7.05	
36		平	瓦	7.08	3.83	27.12											
37	211	平	瓦	5.72	4.95	28.31						平	瓦	5.89	3.27	19.26	
												平	瓦	5.44	2.65	14.42	
38	153-2	平	瓦	4.17	3.38	14.09						平	瓦	4.30	2.17	9.33	
39	152	平	瓦	5.47	3.90	21.33						平	瓦	3.82	1.65	6.30	
40	114	平	瓦	7.88	3.30	26.00						平	亜	1.08	0.80	0.86	
		平	瓦	3.32	2.17	7.20						平	瓦	10.88	3.45	37.54	工場
41		平	亜									平	瓦				
												二	瓦				

免山及庄ノ本(1)　(茨木市佐保)

No.	番地	住					土蔵・倉					雑					備考
		階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	
1	1213	平	瓦	7.04	3.79	26.68						平	瓦	3.75	2.45	9.19	
2	1147-1	平	瓦	10.73	4.95	53.11	二	瓦	3.17	2.10	6.66	平	瓦	4.75	3.23	15.34	
							二	瓦	2.15	2.15	4.62	平	瓦	5.75	2.18	12.54	
3	1146	平	瓦	7.96	4.50	35.82	二	瓦	2.70	1.85	5.00	平	瓦	6.75	2.17	14.65	
4	1164	平	瓦	9.37	4.89	45.82	二	瓦	3.23	1.96	6.33	平	瓦	7.75	1.63	12.63	
							平	瓦	2.25	1.96	4.41	平	瓦	8.75	2.40	21.00	
												平	杉皮	9.75	0.67	6.53	通舎
5		平	瓦	7.93	3.77	29.90	二	瓦	3.29	1.86	6.12	平	瓦	10.75	2.43	26.12	
6		平	瓦	7.90	4.25	33.58						平	瓦	11.75	2.05	24.09	
7	1171	平	瓦	8.50	3.85	32.73	二	瓦	2.15	1.65	3.55	平	瓦	12.75	2.70	34.43	
												平	瓦	13.75	0.90	12.38	
												平	瓦	1.85	1.58	2.92	
												平	杉皮	1.50	1.00	1.50	
8		平	瓦	7.11	3.30	23.46	平	瓦	2.75	2.20	6.05	平	瓦	2.70	2.05	5.54	
												平	瓦	3.25	1.58	5.14	
9		記載なし		5.00	2.45	12.25											
10	935	平	瓦	9.13	4.32	39.44						平	瓦	3.97	2.17	8.61	
												平	瓦	2.81	1.50	4.22	
												平	瓦	2.70	1.66	4.48	
11		平	瓦	6.55	3.82	25.02											
12		平	瓦	8.75	4.19	36.66						平	瓦	2.00	1.30	2.60	
												平	亜	3.75	2.10	7.88	
												平	亜	2.25	0.80	1.80	通舎
13		平	瓦	5.98	3.82	22.84											
14		平	瓦	8.45	4.36	36.84	二	瓦	2.20	1.73	3.81	平	瓦	3.27	2.15	7.03	
		平	瓦	2.08	2.22	4.62	二	瓦	2.20	1.65	3.63	平	瓦	1.86	1.62	3.01	
	別地											平	瓦	6.75	3.65	24.64	工場
15	1133	平	瓦	7.63	4.00	30.52	二	瓦	2.15	1.60	3.44	平	瓦	3.52	2.30	8.10	
												平	杉皮	2.55	1.87	4.77	
												平	瓦	1.60	1.45	2.32	
	別地番	平	瓦	3.55	2.17	7.70											
16	1136	平	瓦	8.38	4.35	36.45	平	瓦	2.13	1.60	3.41	平	瓦	3.80	2.17	8.25	
							二	瓦	2.15	2.15	4.62						
												平	瓦	4.36	1.08	4.71	
17		平	瓦	5.70	2.73	15.56											
18	1138	平	瓦	7.25	3.82	27.70											
19	1144	平	瓦	4.05	4.40	17.82	平	瓦	2.20	1.57	3.45						

免山及庄ノ本(2)　(茨木市佐保)

No.	番地	住					土蔵・倉					雑					備考
		階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	
20		記載なし		9.61	5.87	56.41	記載なし		3.89	2.21	8.60	記載なし		2.50	1.88	4.70	
							記載なし		1.90	2.00	3.80						
							記載なし		3.73	2.18	8.13						
		二	瓦	4.43	3.14	13.91						平	瓦	2.45	1.85	4.53	酒舎
												平	瓦	2.55	0.60	1.53	酒舎
												平	瓦	3.27	1.82	5.95	酒舎
												平	瓦				
												平	瓦	3.94	2.75	10.84	
												記載なし		4.65	3.05	14.18	
												平	瓦	3.25	1.65	5.36	
21		記載なし		9.10	6.00	54.60	二	瓦	2.70	1.80	4.86	平	瓦	3.87	2.70	10.45	
							二	瓦	2.10	1.65	3.47	平	瓦	3.30	1.65	5.45	
22	1165	平	藁	7.91	3.82	30.22	平	瓦	2.11	1.60	3.38	平	瓦	2.00	0.67	1.34	
												平	瓦	3.05	2.02	6.16	
												平	亜	2.75	1.68	4.62	
23	1168	平	瓦	8.36	5.22	43.64	二	瓦	2.70	1.90	5.13	平	瓦	3.53	2.64	9.58	
							二	瓦	2.10	1.68	3.53						
		二	瓦	4.84	3.23	15.63						平	瓦	1.56	1.21	1.89	
												平	瓦	3.80	2.17	8.25	
24	1164	平	藁	8.80	4.38	38.54	平	瓦	3.65	1.65	6.02	平	瓦	3.30	2.75	9.08	
												平	藁	1.25	1.05	1.31	
		平	藁	4.60	2.18	10.03						平	藁	6.52	0.55	3.59	酒舎
25	1166	平	藁	9.26	3.90	36.11	二	瓦	2.15	2.15	4.62	平	瓦	1.76	0.95	1.67	
		(一部瓦)					二	瓦	2.17	1.62	3.52	記載なし		3.84	2.18	8.37	
												平	亜	1.52	0.70	1.13	
												平	皮	1.65	1.63	2.69	
												平	亜	2.17	1.03	2.24	
26	1169	平	藁	8.55	5.12	43.78	記載なし		2.17	1.92	4.17	平	瓦	2.16	1.50	3.24	
		二	瓦	2.60	2.23	5.80	記載なし		2.98	2.40	7.15	平	瓦	6.03	2.45	14.77	
												平	瓦	3.80	2.25	8.55	
												平	皮	2.35	0.55	1.29	酒舎
27		平	藁	9.38	3.83	35.93	二	瓦	2.17	2.12	4.60	平	藁	4.92	2.74	13.48	

千提寺(1)　(茨木市)

No.	番地	住					土蔵・倉					雑					備考
		階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	
1	30-10	平	藁	6.91	4.45	30.75						平	藁	4.05	2.03	8.22	
	別地番											平	亜	1.58	1.35	2.13	字神阪
2		平	藁	3.70	2.15	7.96											
3	90-3	平	藁	5.30	3.76	19.93						平	藁	3.63	2.45	8.89	
												平	藁	2.20	1.57	3.45	
4		平	瓦	7.22	4.50	32.49						二	瓦	5.43	2.73	14.82	
												記載なし		2.00	1.17	2.34	
												記載なし		2.17	1.25	2.71	
5	385	平	藁	7.55	3.89	29.37	二	瓦	2.12	1.67	3.54	平	藁	2.72	1.95	5.30	
6	382	平	藁	4.95	2.18	10.79											
7	380	平	藁	7.45	3.82	28.46	平	瓦	2.12	1.60	3.39	平	瓦	4.35	2.70	11.75	
8	379	平	藁	7.36	3.80	27.97						平	瓦	3.52	2.20	7.74	
	別地											平	亜	3.30	2.20	7.26	
9	374-1	二	瓦	6.26	2.72	17.03						平	藁	5.90	2.18	12.86	
10	337	平	藁	6.32	2.17	13.71											
												平	藁	6.17	2.75	16.97	
11		記載なし		4.74	3.31	15.69											
12	373	平	藁	7.10	3.82	27.12						平	藁	3.55	2.15	7.63	
												平	瓦	7.13	2.73	19.46	
13		平	瓦	11.38	3.11	35.39						平	亜	1.09	0.80	0.87	
14	150-2	平	瓦	4.95	3.25	16.09						平	瓦	3.28	2.76	9.05	
		平	藁	4.25	2.71	11.52						平	杉皮	3.26	2.76	9.00	
15	155	平	藁	8.73	4.14	36.14	二	瓦	2.73	2.20	6.01	平	瓦	4.95	2.71	13.41	
	別地											平	杉皮	3.25	2.17	7.05	
16		平	藁	10.45	4.89	51.10	二	瓦	2.49	2.25	5.60	記載なし		1.83	1.30	2.38	
							平	瓦	2.21	1.60	3.54	平	瓦	4.35	2.71	11.79	
							二	瓦	3.25	2.20	7.15	平	瓦	2.40	1.65	3.96	
17		平	藁	6.97	4.14	28.86	二	瓦	2.22	2.22	4.93	平	藁	2.18	1.09	2.38	
												平	藁	2.18	2.15	4.69	
												平	藁	3.34	2.45	8.18	
18	181	平	藁	5.80	2.15	12.47											
19	274	平	藁	8.18	4.96	40.57	二	瓦	2.19	2.19	4.80	平	瓦	4.90	2.72	13.33	
							二	瓦	2.20	1.90	4.18						
	別地											平	藁	3.15	1.65	5.20	柴屋
20	272-1	平	藁	8.17	3.84	31.37						平	藁	3.80	2.72	10.34	
	別地											平	藁	2.70	1.60	4.32	柴屋

千提寺(2)　（茨木市）

No.	番地	住					土蔵・倉					雑					備考
		階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	
21		平	瓦	8.85	3.82	33.81	平	瓦	2.18	1.64	3.58	平	瓦	4.09	2.72	11.12	
	別地番						二	瓦	2.75	2.20	6.05						
												平	藁	2.19	1.64	3.59	
22	266	平	瓦	7.34	3.83	28.11						平	藁	3.82	2.45	9.36	
23		平	瓦	10.75	2.72	29.24	二	瓦	2.20	2.18	4.80	平	瓦	2.73	2.17	5.92	
		平	瓦	2.17	1.65	3.58	二	瓦	2.72	2.06	5.60	平	瓦	4.64	2.18	10.12	
		平	瓦	2.67	1.62	4.33						平	瓦	4.34	2.72	11.80	
24		平	藁	7.15	3.82	27.31	二	瓦	2.37	2.17	5.14	平	藁	5.45	2.42	13.19	
		平	瓦	3.27	1.63	5.33											
25		平	藁	7.17	4.35	31.19						平	瓦	3.80	2.72	10.34	
26	168	平	藁	7.79	4.36	33.96						平	瓦	4.28	2.17	9.29	
	167-1											平	藁	4.80	1.65	7.92	
27												平	藁	4.36	4.35	18.97	工場
28												平	藁	4.90	2.18	10.68	工場
29	319	平	藁	7.10	4.35	30.89	二	瓦	1.88	1.83	3.44	平	藁	3.20	2.17	6.94	
30		平	藁	5.48	2.15	11.78											
31		平	藁	9.13	4.94	45.10	二	瓦	2.75	2.20	6.05	平	瓦	2.18	2.12	4.62	
		平	瓦	3.17	2.70	8.56						平	瓦	3.78	2.61	9.87	
												平	瓦	1.61	1.52	2.45	
												平	藁	3.84	2.17	8.33	
32	249	平	藁	8.25	4.34	35.81	二	瓦	2.25	2.22	5.00	平	瓦	2.74	2.17	5.95	
		平	藁・亜	3.30	2.22	7.33						平	瓦	1.63	1.10	1.79	
												記載なし		2.20	1.70	3.74	下屋
												平	藁・亜	4.35	2.72	11.83	
												平	瓦	2.40	2.05	4.92	
33	134	平	藁	6.00	2.18	13.08											
34	136	平	藁	6.48	3.83	24.82						平	藁	3.80	2.74	10.41	
35	288	平	藁	6.76	3.82	25.82	二	瓦	2.15	2.15	4.62	平	瓦	3.28	2.72	8.92	
		平	瓦	2.18	1.65	3.60						平	藁	5.42	2.18	11.82	
36	326	平	藁	8.04	4.34	34.89						平	藁	6.75	2.16	14.58	
37	9	平	藁	7.32	3.77	27.60						平	瓦	4.88	2.72	13.27	
		二	瓦	3.28	2.16	7.08						平	亜	3.26	2.18	7.11	
38		平	瓦	8.41	4.34	36.50	二	瓦	3.25	2.17	7.05	平	瓦	3.80	2.72	10.34	
	別地											平	瓦	3.27	2.18	7.13	

梅原(1)　（茨木市佐保）

No.	番地	住					土蔵・倉					雑					備考
		階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	
1		平	瓦	6.00	3.80	22.80						平	瓦	2.44	1.52	3.95	
2		平	亜	4.25	2.72	11.56											
3	854	平	瓦	3.82	2.16	8.25											
4		平	瓦	3.27	2.20	7.19											
5												平	杉皮	3.27	2.20	7.19	
6	821	記載なし		5.48	3.27	17.92											
7												平	亜	1.60	1.43	2.29	工場
												平	亜	2.65	2.50	6.63	工場
												平	亜	3.25	3.25	10.56	工場
	別地											平	亜	4.35	2.63	11.44	
8	458-2	平	瓦	7.15	3.81	27.24						平	瓦	2.73	1.09	2.98	
9		平	藁	4.75	3.30	15.68						平	藁	2.70	2.72	7.34	
												平	亜	2.00	1.63	3.26	
10	401	平	藁	6.72	3.26	21.91											
	410											平	藁	3.82	2.12	8.10	
11	403	平	藁	6.00	2.66	15.96											
12		平	藁	7.22	3.82	27.58											
13		平	藁	4.27	2.68	11.44											
14	406	平	藁	7.92	3.83	30.33	平	瓦	2.20	1.65	3.63	平	藁	3.35	2.17	7.27	
							二	瓦	3.28	2.22	7.28						
	別地											平	藁	2.07	1.86	3.85	
15	445	平	藁	3.46	3.20	11.07											
16		平	藁	7.68	2.72	20.89						平	藁	1.98	1.75	3.47	
	別地											平	藁	4.90	2.73	13.38	
17	1096	平	藁	8.12	3.95	32.07	二	瓦	3.95	2.22	8.77	平	瓦	3.34	2.73	9.66	
												平	瓦	2.15	1.00	2.15	
												平	瓦	1.83	1.35	2.47	
												平	藁	5.40	1.35	7.29	
	1062											平	藁	7.00	1.50	10.50	過舎
18	1067	平	藁	6.10	2.15	13.12											
19		平	藁	5.33	3.28	17.48											
20		平	藁	7.10	3.74	26.55						平	藁	4.35	2.46	10.70	
21		平	藁	8.61	4.45	38.31	二	瓦	3.35	2.20	7.37	平	瓦	1.35	0.84	1.13	
	別地											平	藁	5.00	1.84	9.20	

梅原(2)　（茨木市佐保）

No.	番地	住					土蔵・倉					雑					備考
		階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	
22	1093	平	瓦	5.44	3.83	20.84						平	瓦	4.38	2.50	10.95	
23	1103	平	瓦	5.40	2.68	14.47						平	瓦	2.18	1.10	2.40	
												平	瓦	2.35	1.34	3.15	
												平	瓦	6.00	2.18	13.08	
24		二	瓦	3.80	3.40	12.92											
		平	杉皮	3.46	1.15	3.98											
25		平	瓦	4.50	2.67	12.02											
26	1110	平	瓦	5.55	3.25	18.04											
27	1114	平	瓦	8.66	4.87	42.17	二	瓦	3.80	1.90	7.22	平	瓦	4.32	2.70	11.66	
		平	瓦		2.16							平	瓦	2.70	1.65	4.46	
												平	瓦	1.54	1.05	1.62	
												平	瓦	2.20	1.38	3.04	
												平	杉皮	2.00	0.50	1.00	鶏舎
28	854	平	瓦	7.22	4.37	31.55						平	瓦	2.85	2.35	6.70	
29		平	瓦	4.37	2.65	11.58											

神合　（茨木市佐保）

No.	番地	住					土蔵・倉					雑					備考
		階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	階数	屋根	桁行	梁行	坪数	
1		平	瓦	7.92	4.33	34.29						平	瓦	3.25	2.70	8.78	
												平	瓦	2.15	1.60	3.44	
												平	瓦	1.90	1.60	3.04	柴屋
2	311-1	平	瓦	8.17	3.82	31.21						平	瓦	3.25	1.63	5.30	
												平	瓦	2.70	1.62	4.37	
3	308 別地	平	瓦	6.18	3.80	23.48						平	瓦	3.25	2.17	7.05	
4	307	平	瓦	6.53	3.82	24.94						平	瓦	1.60	1.35	2.16	柴屋
												平	瓦	2.56	1.05	2.69	
												平	瓦	4.98	2.75	13.70	
5	310	平	瓦	7.60	3.82	29.03	二	瓦	2.77	2.23	6.18	二	瓦	5.45	2.45	13.35	雑二階記載なし
	別地番	平	瓦	2.58	2.47	6.37						平	瓦	3.26	1.67	5.44	
												平	瓦	2.15	1.90	4.09	柴屋
6		平	瓦	5.35	2.15	11.50											
7		平	瓦	3.30	1.63	5.38											
8		平	瓦	7.07	3.83	27.08						平	瓦	2.17	1.61	3.49	
9		平	瓦	5.50	3.37	18.54											
10		平	瓦	3.43	2.62	8.99											
11		平	瓦	4.42	2.74	12.11						平	瓦	3.28	2.16	7.08	
12	287-2	平	瓦	3.88	2.23	8.65											
		平	瓦	3.30	1.38	4.55											
13	300	平	瓦	9.43	4.40	41.49	二	瓦	2.70	1.65	4.46	平	瓦	4.00	2.72	10.88	
	別地番											平	瓦	2.58	2.16	5.79	
												平	瓦	3.30	1.75	6.65	柴屋
14		平	瓦	7.48	5.00	37.40	平	瓦	2.18	1.60	3.49	平	瓦	4.00	3.85	18.67	
							二	瓦	4.09	1.62	6.63	平	瓦	3.36	2.15	8.51	

佐保地区

免　山

1. 免山集落遠景

2. 雛壇状に造成された宅地例
（免山　篤家）

3. 野面積の石垣事例（免山）

4. 切石積の石垣事例（免山）

5. 渡辺家遠景（免山）

6. 免山集落内の景観

泉原地区

7. 宮前家外観

8. 素盞嗚尊神社

9. 泉原集落内の景観

10. 長屋門の事例（西浦家）

11. 西門家の外観

12. 長徳寺本堂外観

佐保地区

馬　場

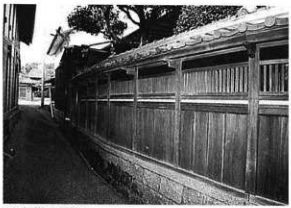
13. 馬場集落の遠景

14. ツシ2階建て主屋の事例

15. 茅葺きの主屋の事例

16. 長屋門の事例（北浦家）

17. 乾蔵の事例（北浦家）


18. 板塀の景観

泉原地区

西浦章雄家住宅

19. 西浦家の外観（長屋門）

20. 主屋外観

21. 土間上部の梁組

22. 梁組みの詳細

23. クチノマを望む

24. 座敷まわり

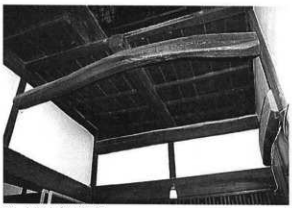
佐保地区免山

渡辺晃司家住宅

25. 渡辺家住宅・主屋外観

26. 主屋外観　詳細

27. 主屋全面の前庭


29. 土間上部の梁組

28. 土間入口まわり

30. 座敷まわり

佐保地区免山

岡田種雄家住宅

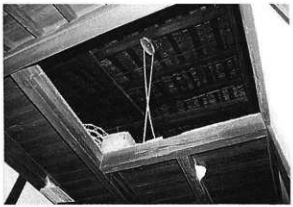
31. 岡田家土蔵の外観

32. 屋敷構えの外観

33. 主屋外観

34. 土間入口まわり

35. 土間上部の梁組



36. 梁組と小屋組詳細

37. 露地門　詳細

38. 座敷まわり

39. 座敷より仏間を望む

40. ダイドコより裏手の石垣を望む

41. 主屋裏手の石垣詳細

42. 主屋背面外観

佐保地区免山

佐藤篤三家住宅

43. 佐藤家屋敷構えの外観

44. 主屋外観

46. 土間上部の梁組

47. 座敷まわり

45. 土間入口まわり

48. ダイドコより裏手の石垣を望む

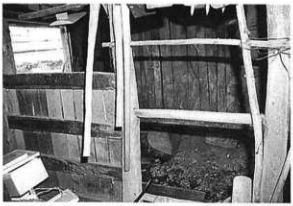
佐保地区庄ノ本

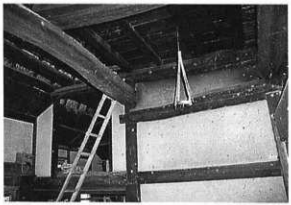
庄田興造家住宅

49. 庄田家屋敷構えの外観

50. 乾蔵の外観

51. 土間上部の梁組


52. 厩（うまや）


53. 厩上部のツシ2階

54. 竈（かまど）まわり

佐保地区免山

免山　篤家住宅

55. 免山家屋敷構えの詳細

56. 主屋背面と乾蔵

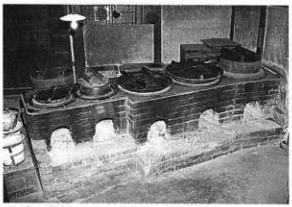
57. 主屋外観

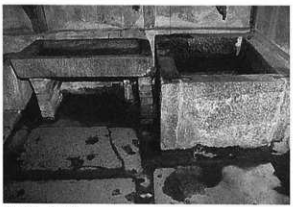
58. 土間入口まわり

59. 土間裏手の勝手まわり

60. 雪隠まわり

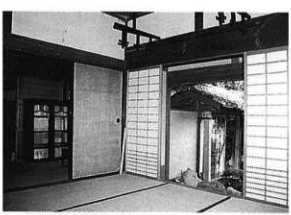
61. 竈まわり

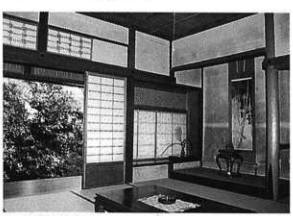

62. 竈　詳細


63. 流しと水槽

64. 五右衛門風呂

65. クチノマより座敷を望む


66. 座敷より露地門を臨む


67. 座敷まわり

68. 書院欄間の詳細

69. 土蔵を2棟連ねる事例

佐保地区馬場

北浦照之家住宅

70. 板塀外観

73. 主屋入口まわり詳細

75. 土間入口まわり

71. 北浦家長屋門

72. 主屋外観

74. 式台玄関まわり詳細

76. 土間入口の大戸

77. 座敷より玄関の間を望む

78. 玄関の間より座敷（左手）と仏間を望む

Ⅶ. 石造物調査

茨木市佐保周辺地区の石造物調査

藤　澤　典　彦

第１章　年度別調査経過及び概要

第１節　1995年度の調査

1995年度は、箕面市粟生地区の近世寺院跡である徳大寺跡の石造品調査を実施した。

Ａ．徳大寺跡寺僧墓所（№１～23は、写真図版、石塔・石仏データ一覧表№と共通する。以下、同じ。）

中世の遺品は一石五輪塔２基と像容板碑２基、五輪塔水輪１基で、いずれも室町後期の遺品である。この地に元々存在したものか、後世寄せ集められたものか不明確である。

近世のものは基本的には寺僧の墓石類であり、無縫塔・櫛形墓碑などが用いられており、近世を通じて見られる。歴代の記銘のあるものと無いものとがあるが、没年代順に並べると一応以下のように整理できる。○印は墓塔に代数を明記するものである。

開山	○無縫塔	高泉敦老和尚（1695）
二代	○無縫塔	了翁覺大和尚（？）
三代	櫛形墓碑	天霖津公和尚（1712）、または自然石墓碑　普門行正禪人（1721）
四代	櫛形墓碑	悦堂室大和尚（1752）（宝篋印塔（1732）に嗣法沙門悦堂とみえる。）
五代	○櫛形墓碑	密仙賢和尚　（1763）
六代	○無縫塔	中興瑞耀昭大和尚（1809）
七代	○櫛形墓碑	霊仲洞和尚（1802）
八代	池上家文書に徳大寺住職死去の記載あり。（1828）	
九代		
十代	○方柱墓碑	忍仙徳大和尚（1857）
十一代？	櫛形墓碑	黙堂契上坐（1861）
十二代？	櫛形墓碑	誓譽願如海善法尼・誓譽善澄法女（1867）

開山は銘文通り「當寺開山賜紫高泉敦老和尚」であり、元禄８(1695)年示寂と知られる。開山時期は1695年の示寂より遡ること数十年の範囲内であろうから、寛文～延宝年間頃が考えられる。このころから元禄にかけては近世寺院が族生する時期であり、當寺もその流れの中で成立した寺院といえる。

三代は記銘が無いが、没年代から天霖津公和尚(1712)・普門行正禪人(1721)のいずれかと考えられる。四代も記銘は無いが享保17(1732)年に建立された宝篋印塔に「嗣法沙門悦堂」とみられ、1732年の時点で沙門悦堂が徳大寺にいたことは確実で、宝篋印塔造立時点が何らかの記念すべき時であり、宝篋印塔造立は徳大寺住職への着任記念的意味合いを有したかと考えられる。

五～六代は墓塔に記銘があり問題はない。八代は「池上家文書」に1828年に徳大寺住職死去の記載が

あるとのことであり、名前は不明だがその人物が八代目に当たると考えられる。九代目は不明だが八代から九代の間がやや開いており、その間に九代目が入るものと考えられる。十代目は記銘があり問題はない。次いで「黙堂契上坐」の墓碑があるが年代的にはこの人物が十一代目であろうか。あるいはこの人物が九代目で生前に十代目に住職を譲ったが、十代目が先に無くなったというようなことも考えられる。

最後の尼僧二名は無住になっていた徳大寺に留守番として派遣されていた師弟関係にある二人であり、その死は押し込み強盗による殺害であることが、歴史環境調査（II）班の調査で確認されている。この時期、寺院に対するこのような狼藉は頻発しており、政治変動による社会不安・動揺から小さな田舎の寺院も逃れられなかったのである。

明治4(1871)年に廃寺願いが本寺である萬福寺天真院より高槻県庁に提出されており、この時点で廃寺になったのである。残された寺僧墓所は徳大寺の成立から廃寺までの歴史を正確にとどめているといえる。幕末・維新の動乱の中で廃寺になった寺院も多く、徳大寺は近世寺院動向の一つの典型を示している。

この墓地は寺僧墓ということになるが、墓塔が大きな流れとしては無縫塔から櫛形墓碑そして方柱墓碑への変遷を見せている。

寺僧墓以外に、享保17(1732)年の宝篋印塔がある。個人の供養塔ではなく、銘文は宝篋印塔の供養の功徳を述べたもので、銘文中の「外除災殃」・「勝因何彊」が願意としてある。この時期の宝篋印塔造立の一般的なあり方を示しており、江戸時代中期以降の典型的な遺品である。願意の背後には近世村落の人々の五穀豊饒などに対する願い・祈りがあり、近世寺院と村落の関わりを示す遺品として重要である。

第2節　1996年度の調査

1996年度は、茨木市佐保地区馬場の佐保クルス（栗栖）山墓地遺跡・佐保馬場共同墓地・教圓寺の調査を実施した。

B．佐保クルス山墓地遺跡（No.24～41）

佐保クルス山墓地遺跡では板碑形石仏5基、光背石仏8軀、無銘の舟形碑1軀、五輪塔地輪2基を調査した。いずれも室町時代中～後期のものである。墓地遺跡下では「頬無し地蔵」と通称される光背地蔵石仏1軀を調査した。江戸初期のものと考えられる。佐保クルス山墓地遺跡はかつて一部分の発掘調査が行われており、火葬場遺構が検出されている。かつての調査位置より上方にテラス状平坦面が広がり、石仏・石塔も散在しており、墓域はさらに広がるものと考えられた。本稿執筆時点で発掘調査が実施されており、300基を越える石組墓が検出されている。現位置を保った石仏・石塔もあり、今後の下部調査が期待される。

C．佐保馬場共同墓地（No.42～100）

佐保馬場共同墓地には、墓地の一角に佐保クルス山墓地から移転された石仏類が集められている。板碑形石仏20軀、光背石仏35軀、石龕仏1軀、五輪塔残欠20点（空風輪5、火輪11、地輪3）、一石五輪塔3基がある。佐保クルス山墓地に残されていたものに比してやや古い遺品がみられるが、いずれも室

町時代中〜後期の遺品である。

そのほかに自然石墓碑１基を調査した。これは延宝３(1675)年の紀年銘を有し、「空巌夢玄庵主」とあり、おそらく佐保の寺院の僧侶であったと考えられる。この時期は近世墓地が成立する時期に当たっており、この墓地の草創を考える上で重要な遺品となるであろう。

D．教圓寺（№101）

教圓寺には大型の宝篋印塔残欠がある。隅飾三弧で、別石造りの特異な構造の宝篋印塔である。隅飾だけでなく、蓋部も上階と下階とが別石である。この点は大型遺品にままみられる所である。相輪の先端と隅飾２と基礎が失われているが、復元すると３ｍを越え、希にみる大型であり、極めて珍しい遺品である。

類例としては、

誠心院宝篋印塔（京都市）	正和２(1313)年	和泉式部供養塔伝承あり
勝林院宝篋印塔（京都市）	正和５(1316)年	
清涼寺宝篋印塔（京都市）		
雲厳庵宝篋印塔（京都府与謝郡野田川町）		
小町寺宝篋印塔（京都市左京区）	小野皇太后供養塔。	小野小町供養層塔がそばにある。
善峰寺宝篋印塔（京都市右京区）		
智恩寺宝篋印塔（京都府宮津市）		和泉式部供養塔伝承あり
梅津宝篋印塔　（京都市右京区）		
遊女塚宝篋印塔（神戸市垂水区）	建武４(1337)年	

等があげられ、その他、滋賀県にも点在している。これらの塔はいずれも大型という共通点があり、その結果として隅飾・蓋下階・基礎上階（返花座）などが別石造り、あるいは基礎が前後二石造りになっている例が目に付く。隅飾三弧だけの例ならさらに多くみられる。そして和泉式部伝承が付随する石塔が目に付くのも特徴的である。紀年銘遺品をみてもわかるように、年代的には鎌倉時代末から南北朝時代にかけてのものが多く、本例もその範疇に入るものである。このような伝承が付随する石塔は、個人の供養塔ではなく、総供養塔的性格を有する塔であったと考えられる。おそらく墓所及び石塔を管理していた聖たちの有した自己起源伝承が石塔に付加されたものと考えられる。

第３節　1997年度の調査

前年度に引き続き茨木市佐保地区、粟生岩阪地区の調査を実施した。主な調査地は、佐保地区の免山共同墓地、屋上共同墓地、教恩寺、高座神社、粟生岩阪地区の稲荷神社、岩阪墓地であり、その他個人宅や個人墓所、路傍の遺品調査を行った。また、佐保には大型石槽の未製品２基が残されており、その実測を行った。周辺地区には大阪府指定になっている石槽（石湯船）が集中してみられるので、並行してそれらの石湯船の調査をも行った。1997年度の調査遺品の点数は、以下の通りである。

石　仏：光背石仏（光背形の中に石仏を浮彫したもの）（113）
　　板碑形石仏（板碑形の中に石仏を浮彫したもの）（50）
　　板碑形石龕石仏（屋根部が板碑形で、碑身部を石龕風に彫り込んだもの）（24）

石龕石仏（寄せ棟屋根形を彫りだしたもの）（8）

石　塔：	五輪塔（78）	一石五輪塔（18）	宝篋印塔（2）	
その他：	狛犬（3）	棺台（1）	鳥居（1）	花立（1）
	燈籠（8）	前机（1）	手水鉢（槽）（5）	名号碑（1）
	墓碑（1）	棚部品（1）		

等である。以下注目すべき遺品について概要を記す。石槽については節を改めてふれる。

E．免山家墓所（No.102～170）

周辺から出土した石仏類が集められており、室町中後期の遺品が主流であるが、中には空風輪や上面ほぞ穴を大きく彫り込んだ地輪など室町前期まで遡るであろうような遺品がみられ、この地区の墓所の古さを示しており、注目される。

中でも注目されるのは、本地区出土品ではなく安威地区のものだが、No.103の五輪塔空風輪である。四方向にキャ・カ（ラ・バ・ア）の四門展開が大きく薬研彫りされている。空輪が少し細長くいわゆる栃の実形をしており西大寺系の五輪塔が五輪塔形の主流を占める以前の形である。京都・神護寺の文覺上人墓塔の空風輪に似ており、鎌倉時代前期まで遡る可能性がある。

F．免山地区墓地（No.171～200）

A地区としたのは、先の免山氏墓所につながる墓所で個人の墓所である。現代の墓石の周辺に室町末の石仏が寄せ集めてある。B地区としたのは少し離れた尾根頂部にある免山集落の共同墓地である。現代の墓石が並ぶ一角に古い石仏類が集めてある。また山の裾部に上から転落したと考えられる石仏類がみられるがそれらを一括してB地区のものとした。B地区には自然石を組み合わせて作った棺台（供物台？）（No.199）がみられ、共同墓地として機能していたことがわかる。

G．佐保神(ひごろ)合共同墓地（No.351～359）

墓地中央に総高86.6cmの地蔵立像（No.359）がみられる。銘文はなく、墓地の迎え本尊と考えられる。蓮台には蓮弁の彫刻はなく、この地域に多くみられる小形の石仏類と同時期で室町時代末期の遺品とみられる。他に、五輪塔の地輪が3基みられるが、その内の一基には阿弥陀坐像が刻されている（No.352）。

また、いずれの地輪も幅が35cm前後あり、佐保の他地域でみられる地輪の幅に比べてワンサイズ大きいことも注目される。

H．岩阪墓地（No.421～427）

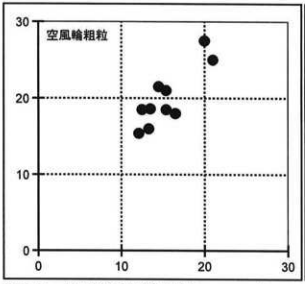
墓地は整理され古い雰囲気は残らないが、墓地中央に前机があり、宝永4（1707）年の紀年銘がある（No.426）。1700年前後が近世墓地の確立期であり、この時期に墓地整備のなされたことがわかる。

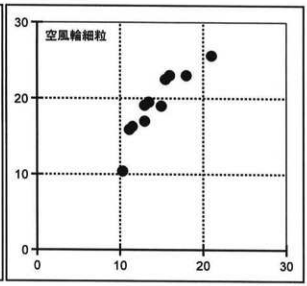
第2章　石塔・石仏の分析

以下、今回調査した石塔・石仏類についてのデータ分析を行う。今回の調査では佐保地区を中心に調査を実施した。それだけでは一つの谷筋だけの狭い地域のデータになるので、より普遍性を持たせるために、手元に有する安威川流域金石文調査のデータをも併せてデータ処理をする。

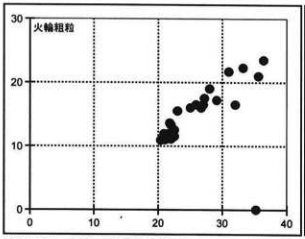
第1節　五輪塔

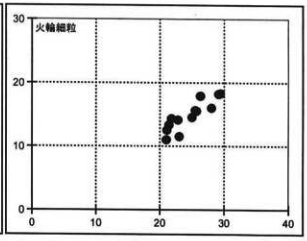
五輪塔に関しては、今回の調査では忍頂寺五輪塔・大岩八幡神社五輪塔以外は紀年銘をもつ遺品が無く、五輪塔の年代措定には困難が伴うが、五輪塔の形態に関するこれまでの研究の積み重ねを参考に考えてみたい。また、この地域の石造品の使用石材はいずれも花崗岩だが、それらは粗粒タイプと、細粒



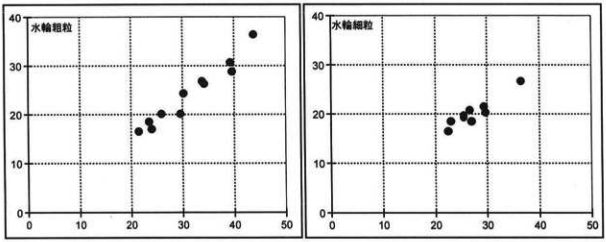


グラフ1　空風輪石材別法量散布　（1－1）　（1－2）

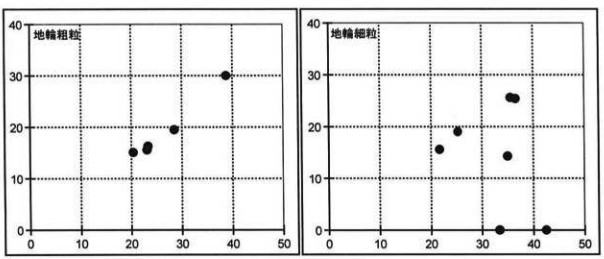




グラフ2　火輪石材別法量散布　（2－1）　（2－2）



グラフ３　水輪石材別法量散布　（３－１）　（３－２）



グラフ４　地輪石材別法量散布　（４－１）　（４－２）

タイプに分類されることが井本伸廣氏により指摘されている（Ⅳ．地学環境調査参照）。石材の種類を分類・編年に加味するとき新しい視点が開けることが期待される。そこで五輪塔の各部の大きさを示す散布図を石材別に作成してみた。

形態的には粗粒のものの方が古く、細粒の方が新しい傾向にある。それが数値的にどのように現れてくるかをグラフで表現したものがグラフ１～４である。空風輪・火輪・水輪・地輪の大きさをいずれも粗粒と細粒に分けて表現した。

以下に粗粒と細粒遺品の形態的特徴について述べる。空風輪の場合、粗粒のものは空輪が尖った形をしており、細粒の方は空輪上のカーブに角が有る形態をしている。風輪の場合、下カーブは粗粒が丸いカーブを描くが、細粒の方はカーブの途中に角がみられる。水輪の場合、粗粒は下カーブの膨らみが豊かであり、細粒は膨らみが削げて直線的である。地輪高は粗粒よりも細粒の方がやや高い傾向を示している。これらの形態的要素はいずれも粗粒の方が古く細粒の方が新しい形態であることを示している。上記の形態的・サイズ的諸条件を勘案するとき、この地域における石材使用が粗粒から細粒に動いたことを示している。その具体的様相はどの様であったのか。

サイズ的には火輪の散布グラフが見やすいので火輪のグラフ２－１で説明する。サイズ的には大きく

表１　五輪塔　法量・年代・石材変遷表

	14C	15C			16C		
世紀	後	前	中	後	前	中	後
粗粒大	----------						
粗粒中	----------	----------					
細粒中		----------	----------	----------	----------		
細粒小					----------	----------	----------
粗粒小						----------	----------

大・中・小に分類できる。そして粗粒の方が大・中・小とみられるのに対して、細粒の方は中・小に集中していることがわかる。そして空風輪から地輪までのグラフをみても粗粒の方がサイズ幅が大きく、細粒の方はサイズ幅が小さいことが窺える。石塔のサイズは造立者の社会階層の位置を示すものであり、一般的には大型から次第に小型のものが出現する傾向がみられる。この現象は造塔階層の下への広がりを示すものと解されるが、これは絶対的な規準ではなく大きな流れとして云えるということであって、各時代内でのサイズの相違は当然のことながらみられる。一つのサイズが一つの時代のものということはできず、一つの時代のサイズは一定の幅を持って考えるべきである。ならば、グラフ２－１、２－２は次の様に解釈できるであろう。

先に粗粒の大型が有り、次第に中型が作られるようになる。そして新しい石材としての中型が作られるようになり石材の粗・細の主流が逆転し、細粒が主流になる。次いで細粒の小型が多く作られる様になった時期に、また粗粒の小型が作られるという石材使用の展開が考えられる。粗粒の小型遺品の形態をみても、それらは古い時点にはおくことが出来ず、粗粒の石材使用には一時断絶が考えられる。これらの展開の時期的な措定が問題になるが、一応表１の変遷表の様に考えておきたい。

第２節　石仏類

石仏類は像容の明確なものはほとんどが定印阿弥陀如来であり、像容が不明確で阿弥陀か地蔵の区別のつき難いものもあるが、それらもほとんどが阿弥陀と考えられる。室町時代を通じて墓地におかれる個人の供養石仏は、そのほとんどが地蔵または阿弥陀であるが、その在り方は地域によって異なる。奈良の場合、地蔵菩薩立像の方が多く、阿弥陀があっても多くは来迎印立像であり、定印阿弥陀はきわめて少ない。対して京都では定印の阿弥陀が圧倒的である。佐保地域は京都文化の影響を強く受けていると云えるだろう。これは先述の宝篋印塔の場合にも共通するところである。

さて、この石仏類も紀年銘を有するものは無く、その年代措定は難しいが、『安威川総合開発事業に伴う文化財等総合調査中間報告書』（（財）大阪府文化財調査研究センター　1997.７）のⅨ．石造物部門で示した石仏の分類編年規準に石材変遷の問題を加味して今一度編年を行ってみる。

Ａ．石仏の分類

石仏類では光背と石仏を一石で作る「光背石仏」、板碑塔身に像容を彫り出す「板碑形石仏」、「石龕仏」の系譜を引くものとに大きく３分類される。

B．石仏の編年

① 光背石仏

仏像表現では、

イ．仏像・蓮台まで表現するもの。

ロ．蓮台の表現が無くなるもの。

ハ．仏像の膝の下部分の表現が無くなるもの。

ニ．仏像の膝の横部分の表現が無くなるもの。

ホ．膝上の表現もなくなり、手から上の表現しかないもの。

仏像表現のイ→ロ→ハ→ニ→ホは基本的には経時的な変化とみてよい。さらに顔の輪郭が丸いものほど古く、新しいものはやや細面になる傾向がみられる。さらに彫りが深いものから浅いものへの変化も同じである。光背面を凹面状にした彫込光背内に仏像を浮彫するタイプもみられる。この変遷は室町時代中・後期～江戸初頭の中での変遷という事になる。

② 板碑形石仏

板碑の塔身部分に仏像を刻むものを云うが、先ず塔身部分では、

Ⅰ．龕状の彫り込みを設けるもの。

Ⅱ．龕状彫り込みのないもの。

圭頭部の形では、

a．板碑の圭頭部の額部に三条の凸帯が彫り出されているもの。

b．額部凸帯が一条になるもの。

c．額部凸帯が屋根の軒端様の表現に変化する。

d．軒端状の表現が無くなり、圭頭下の縁辺部が尖るもの。

e．圭頭部前面の傾斜がなくなり平坦になるもの。

いずれもⅠ→Ⅱ、a→b→c→dの動きは基本的には経時的な変化である。内部に彫られている仏像に関しては、先述の像容表現イ→ロ→ハ→ニ→ホの変化がそのまま適応可能である。また、板碑塔身部分は次第に細長く、根部分が深いものに変化していく方向がみられる。これらの要素が絡みあって個々の遺品があるわけで、これらの要素を並べるとその編年が可能になるが、あくまでもこれは相対年代であり、紀年銘遺品が無い状況では絶対年代に置き換える事は困難である。他地域の紀年銘遺品とのすり合わせが必要となろう。

③石龕仏

石龕仏は龕に入った仏像を表現するもので、基本的な構成としては屋根と仏像の彫られた軸部とからなる。屋根の形態により屋上に宝珠を頂くものと、棟の表現がなされるものとに分類できる。奈良県地域では屋根と軸部別石のものが多くみられる。南北朝頃から遺品が見られ、当初は2m近い大型遺品が見られるが、次第に小型化して室町時代末には軸部高で1～2尺程度の大きさのものが大量に作られている。

当地域では古い遺品に屋根と軸部別石のものが少数みられるが、ほとんどは屋根・軸部一石造りである。一石造りの遺品のうち、寄せ棟屋根に作るものが古く、次第に棟部分の幅が狭くなり板碑の圭頭状に近くなる。そして先述の板碑圭頭部のc段階は、板碑と全く同様な圭頭でありながら額部の両端部分に反りを持たせ、軒端的表現をしたものがある。この段階で板碑形石仏と石龕仏との区別が曖昧になり、

両者が融合してきた様子が窺える。

石龕内の仏像はほとんど定印阿弥陀であるが、佐保・庄本氏屋敷跡にあるものだけが来迎印立像であり（№222）、珍しい。また二体が並座するものも見受けられるが、これは両者共に阿弥陀であり、夫婦の供養に関わるものと考えてよいだろう。

一石の石龕仏出現の背景には石龕と仏像とが別石作りのものがあり、その場合、石龕は屋根・軸部両側壁・奥壁が別石で作られることが多い。それらの石龕の出現が16世紀中期以降であり、それらは村落中の古い家筋で祭祀の対象になっているところが多く、多くの墓地でそれらの石龕を筆頭に近世墓地につながる傾向があり、近世村落を形成した新しい階層の墓と考えられる。それらの石龕墓は、石塔・石仏が内部に複数（多くの場合二基）納められる事が多く、その場合、基本的には夫婦の供養に関わるものといえ、戦国時代を通じて形成されてきた新しい階層の家形成の動きを示すものである。一石石龕はそれらが個人のものとして、あるいは二基・二体を彫り込む場合は夫婦の供養に関わるもの、さらに下の階層の家の供養施設として作られたものと考えられる。

第３章　佐保の石槽及び北摂の石湯船について

今回調査した佐保地域には、特異な遺物として馬場谷石槽（写真１－１）・広田石槽（写真１－２）の二基の石槽が見られる。共に未完成品である。未製品は作り方を我々に教えてくれるという意味では完成品より魅力的なものでもある。この石槽に関しては古墳時代の石郭だとの意見もあるが、飛鳥の「益田岩舟」にみられる石の彫り込み方、すなわち方眼状に溝を掘り方眼内を横から割り取る方法とは異なり、方眼状に土手を残すように方眼中央を深く掘り、後で土手を割り取る方法が採られている。この作業を繰り返して面を落としていくのであり、この技法をどのように評価するかによって、この遺品の時代が決定されるだろう。

また、この周辺に石風呂（石湯船）が濃密に分布しており、石風呂の可能性も指摘されている。石槽の所在地の何れも脇に水が流れており、馬場谷の方はすぐ近くに寺跡の伝承があり、また「イヤ」の地名が残る。「ユヤ」の転訛とも考えられ、石風呂の可能性は捨てきれない。そこで、以下、今回調査した石湯船に付いて若干の考察を加えることにする。

第１節　風呂の源流

Ａ．風呂と湯

温泉の場合、古くから記録があり、温泉の湧くところでは原始時代から温泉利用はあったと考えられる。しかし風呂を日本に広めたのは仏教といってよい。古代寺院は皆、浴堂（温室）を設置していたようで、法隆寺・大安寺・観世音寺など資材帳が残されている寺などでは「温室」として資料にでてくる。観世音寺では「鉄釜一口」とみられ、現代でも東大寺や興福寺には大きな湯釜が残されている。

現代では「風呂に入る」も、「湯に入る」も同じ行為を指すが、本来、風呂と湯とは全く別物であり、現代では風呂と湯とが混同して使用されている。

風呂の歴史にまずでてくるのは、光明皇后の作ったという奈良の法華寺の風呂であり、それは現在も残されており、風呂場に敷かれている塼は奈良時代のものだとされている。それは蒸し風呂、いわゆるサウナ風呂であり、湯気と熱気で汗を流して汚れを落とすものである。先の「温室」は正にこのような蒸し風呂タイプの物である事を示している。蒸し風呂には大きく二つのタイプがある。隣の釜屋で湯を沸かしその湯気を送るものと、湯釜の上に簀の子を架けて上で汗を流す、いわば蒸芋タイプとの二つである。このような蒸し風呂タイプの風呂は現在も各地に残されてる。大分・周防・安芸・伊予・讃岐・阿波などの瀬戸内海沿岸部には特に多く残されている。図1は大分県のもので、二段の石室構造になっており、下で火を焚いて石室内部全体を焼いて暖めてから火を掻き出して、濡れた筵をかぶって内部に入り、汗を流すものであり、いわば石焼き芋タイプである。これらが本来的な風呂なのである。朝鮮半島では熱風を送るタイプの風呂もあるとの事である。

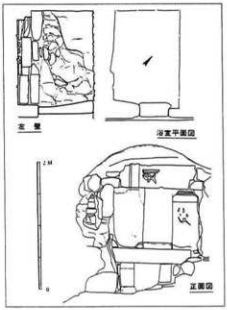


図1　山香町長田石風呂実測図
（入江英親『豊後の石風呂』1980より）

対して、湯とは現代の風呂に近い物で直接湯に入ったり、湯をかぶるタイプの物をいう。湯釜で湯を沸かしそれを湯船に移したものと考えられる。ここで問題にする石風呂とは、石で造られた湯船のことであり、普通には石風呂と呼ぶが、正確には石湯船というべきである。湯船は必ずしも石製とは限らず、木製の湯船も多くあったと思われる。

B．風呂を広めた人々

風呂・湯そして温泉に関しては多くの伝説がまとわりついている。『古今著聞集』には、行基菩薩が摂津の有馬温泉で病人を洗ったところ、其の病人は実は薬師如来の化身であったとの話が載っている。有馬温泉には温泉寺という寺があり、そこは行基創建伝承を有している。

また、先の周防の風呂に関しては、重源上人が風呂を造ったという伝承が県内各地にみられる。これらすべてが事実かどうかの問題はあるが、少なくとも重源の系譜を引く僧侶によって開始されたと考えることは可能であろう。それに重源の業績一覧とでも言うべき「南無阿弥陀仏作善集」は重源の作善業を細かく記しているが、各地における湯屋の建立がみられる。

さらに注目すべきは叡尊の場合である。湯の展開には叡尊の律宗教団が大きく関わっていたと考えられる。先述の行基・重源と叡尊はそれぞれに共通点を有した僧侶ということができる。行基は東大寺大仏造営の勧進を行った人物であり、重源は重衡によって焼かれた大仏の造営勧進を大勧進職という役職について実施した人物である。重源は自分の業績と行基の業績を重ねて考えていたようで、東大寺の内部でも同様な信仰が形づくられている。

叡尊は大仏とは直接の関係はないが、各地の国分寺の復興造営勧進を精力的に行っている。東大寺は総国分寺であり、法華寺は総国分尼寺であり、国分寺造営も大仏造営と同一線上の営みといえる。法華寺は叡尊が復興した寺で、『西大寺末寺帳』に記載されている。そこに風呂の伝承があるということは注目する必要がある。法華寺の風呂にまつわる光明皇后の伝説は、おそらく叡尊の法華寺入寺を契機と

して再度注目を集めたものと考えられる。叡尊の弟子である忍性はさらに重要である。

重源・叡尊・忍性たちは、勧進聖の系譜を引き、行基とおなじ系譜に連なる人物だということができる。特に律宗は地方の民衆に積極的な布教を展開し布薩会を行い、菩薩戒を授けたりするが、そのときに施しの湯が立てられたと考えられる。これらが後の念仏講に展開してゆくのである。

C．風呂屋の源流

奈良市の旧市街・奈良町の中に風呂町という町がある。地名としては北風呂町と南風呂町に分かれている。かつて新浄土寺という寺があり、そこで風呂が営業されていた名残の地名である。各地に残る風呂・湯屋・湯船などの地名は、そこにはかつて風呂があった事を示すものと考えてよい。この風呂に関しては安田次郎氏の研究（「にぎわう都市寺院－奈良の新浄土寺－」『都市の中世』　五味文彦編　所収）があり、かなりのことが明らかにされている。以下、その研究に従い風呂町の風呂についてみてみる。

風呂屋のあった新浄土寺は興福寺蔵の「小五月郷絵図写」（簡聚図絵鈔）からその位置が知られ、元興寺極楽坊の真西、今の風呂町にあたる。また「大乗院門跡領目録」には、「城戸郷湯屋辻子に在り」と記されている。今も「城戸」の地名が残されている。大乗院門跡の尋尊はその日記に湯屋辻子のことを「いっさいの諸役皆免の所なり」と記し、税金がかからない所であった事が知られる。さらに浄土寺の造立について「浄土寺の本願は興正菩薩（叡尊のこと）の孫弟子大安寺の長老の弟子、鎌倉極楽寺の僧なり」と記している。叡尊の孫弟子とすれば13世紀末から14世紀始め頃の造立になる。また「大乗院門跡領目録」は新浄土寺について「律院なり　鎌倉極楽寺の末寺なり」と記している。そしてこの律院に銭湯があり、ここが後々、風呂町と呼ばれるようになったのである。尋尊はこの風呂について「地下（じげ）風呂」と言っており、庶民に解放された風呂であったと考えられる。尋尊は「二百年計に及ぶ銭湯なり」ともいっており、その風呂の歴史は新浄土寺の歴史にほぼ重なるものといえる。『大乗院寺社雑事記』には風呂の経営権を寺ではなく他人に貸したことや、風呂の改築のことなど興味深い記載が諸処に出てくる。

西大寺の２代目長老の慈道が鎌倉時代後期に奈良の南市（現在の紀寺町近辺）で元興寺の修理料を得るために銭湯を営んでいる。鎌倉時代後期の律僧は病人や障害者の慈善救済事業を広範に展開するが、彼らの活動の中での風呂は本来、厄除け・病気療養のためのものであり、もとは無料の湯であったと考えられる。高野山「大湯屋釜鋳目録」には沐浴の功徳が「浄五体垢穢自得内心清浄依此内外身清浄」「現除癩病患證心身安楽」と記されており、中世の人々が入浴を如何に考えていたかがよくわる。本来は施しの湯であり本来無料であっても、多くの人々はなにがしかの布施を支払ったと考えられ、それが次第に商売に展開していくのである。

また、新浄土寺では後に茶屋が営まれるようになり、そして次第に信仰の問題から離れたいわゆる風呂屋に展開して行く。

今、南風呂町に十念寺（浄土宗）があるが、この寺は忍性の開基ということになっている。境内には愛染堂と「忍性」と地輪に刻まれている大型の五輪塔がある。愛染堂は新浄土寺にあったという愛染堂（天和４(1684)年まで確認できる）の後身と考えられている。また境内には大きな井戸があり、忍性が掘ったと言い伝えられている。その大きな井戸は湯のための水を供給したものと考えられる。また、十念寺のご住職の話によると、つい最近まで風呂の排水の用と考えられる溝の痕跡が見られたとのことである。

このようにして風呂で得た金が、寺社の修理や慈善事業に当てられ、さらには憑支や金貸しなどの金融にも利用していたと考えられている。

第2節　北摂の石風呂とその周辺

以上のことから、律僧が風呂に大きく関与していたことがわかり、各地にみられる石風呂もこの様な人々の関与によって造られたものとする事ができるだろう。以下、事例をみたい。

A．石風呂の事例

生駒市の長弓寺には二基の石湯船がみられる。この寺は現在真言律宗である。長弓寺のある谷の奥には「イヤダニ」の小字名が残されている。これは「湯屋谷」のなまったものと考えられる。また生駒市の宝憧寺に一基の石湯船が残されている。この寺は行基信仰関連の寺である。もちろん西大寺にも残されており、これらの寺院をみてみると律宗関係の寺院の多いことが窺われる。年号のある物としては、木津町・海住山寺の遺品には正嘉2（1258）年、長谷寺の遺品には正平13(1358)年の紀年銘がみられる。大阪府下では一覧表にみられる物がある。最近発見された茨木市上音羽・常福寺の遺品を除いて大阪府の指定文化財になっている。石風呂の重要性が認識されているということであり、この様なものの指定自体画期的なことでもある。

(1)高槻市

高槻市には芥川の教宗寺（写真1－7）と、市原・八阪神社（写真1－6）の二基がある。芥川は西国街道沿いの大きな宿のあったところで、人々の集まる場所であり、都市的な風呂として注目される。市原・八阪神社のものには雲形の把手状作り出しが有り、花頭状の線刻飾りが刻まれている。『是害房絵巻』の浴室（図2）に見られる湯船にも同様の作り出しが描かれており、この石槽がまさに湯船であることを示している。また「和銅四年」の刻銘があるが、勿論この石槽の作られた年号ではない。しかし、何らかの意図があって刻まれたものであろうから、その背景を考えてみる必要はある。行基信仰を有した律僧と風呂とが関係するとするなら、この紀年は行基と何らかの関係を有するものと考えられる。行基の後年の活動の開始点は和銅三年の母親の死、和銅五年の服喪終了以後とするのが普通だが、おそらく「和銅四年」は行基の後年の活動開始点の認識と関連するものではなかろうか。

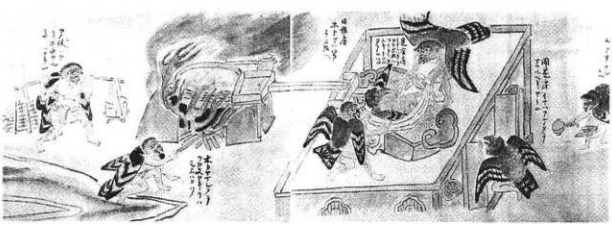
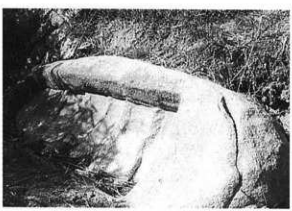


図2　是害坊絵巻（部分）（兵庫県立歴史博物館『湯の聖と俗と－風呂と温泉の文化』 1992より）



1：茨木市佐保　馬場谷石槽　2：茨木市佐保　広田石槽　3：茨木市銭原　銭原石槽　4：豊能郡豊能町切畑法性寺石槽　5：茨木市上音羽　常福寺石槽　6：高槻市市原　八阪神社石槽　7：高槻市茨川町　教宗寺石槽

写真１　周辺地域の石槽

⑵茨木市

茨木市上音羽・常福寺の遺品は車裡玄関前で手水槽として利用されている（写真１－５）。原位置を保っていないようだ。口縁部外側が丸く整形されており、胴部中央やや上のラインに段を有し典型的な石風呂である。

茨木市・銭原のものは絶海国師隠棲地という場所にある（写真１－３）。斜面中腹を切り開いた平場の端に設置されており、本体は口縁部が地面からでるだけでほとんど埋められている。斜面の方向に排水孔があり、斜面下に排水するようになっている。古いものかどうかは不明だが現在も排水の石組みが残されている。石湯船横には径50cmばかりの上面平坦の円形の石が据えられており、一対のものと考えられる。この石風呂は現位置を保っている可能性がある。

⑶豊能町

銭原をさらに北西に登っていくと豊能町域に入るが、切畑の法性寺のもの（写真１－４）は近代になって近くの走湯神社から移されたものである。内部底面には水切り溝が刻まれ側面に穿たれた排水孔にまでつながっている。

同じく豊能町木代にも一基の石風呂が見られるが、そこは字「風呂」の地名がある。法性寺の背後の山は湯谷ヶ岳という山であり、京都府側の湯谷村にも湯壺と呼ばれる石船があり、現在は満願寺に移転されているとのことである（日本歴史地名体系20『京都府の地名』 1981）。湯谷ヶ岳の名前はこの周辺に石風呂が多く分布することと無関係ではないだろう。

B．石風呂のサイズ

石風呂のサイズを寸法の明確な内法でみるとき、長／幅が、1.7台が２，1.8台が２，2.0台が２，1.6台以下が２，と分類され、まとまり毎に比較的近い数値を示す。このことは規格があったことを示しているだろう。銭原、上音羽、豊能町木代の遺品は、おそらく近い時期に、同一石工の手で作られた可能性が高いだろう。長：幅の比率が長く変化するのか短く変化するのか現段階では不明だが、八坂神社の遺品にみられる雲形作出しが古い様相を残す物だとすると長くなる方向で変化する可能性が考えられる。今後の検討課題である。

表２　北摂及び近辺所在石槽サイズ表

名称	長	幅	高	長／幅	内法長	内法幅	内法深	長／幅
高槻市芥川町・教宗寺	182	115	45	1.583	150	82	36	1.829
高槻市市原・八坂神社	160	120	65	1.333	111	73	49	1.521
茨木市銭原	206	130	86	1.585	167	80	54	2.088
豊能町切畑・法性寺（走湯天王社旧在）	190	120	70	1.583	148	82	58	1.805
豊能町切畑・旧朝川寺	245	150	100	1.633	151	91	57	1.659
豊能町木代・頂応寺	230	140	80	1.643	173	86	58	2.012
四条畷市上田原住吉神社	195	118	73	1.653	133	77	58	1.727
大阪市・四天王寺	185	118		1.568	163	94		1.734
			平均	1.573			平均	1.797
茨木市佐保馬場谷	450	220	130	2.045	260	89		2.921
茨木市佐保広田	400				240			
			平均	2.045			平均	2.921

C．北摂の石風呂分布の背景

大阪府の場合、表2からは北摂地域に多く分布する事が窺える。この分布の背景にいかなる事がみられるのか。

西大寺律宗の祖である叡尊に関しては、行動記録をまとめた『金剛佛子叡尊感身学正記』がある。それによると、叡尊は弘安6（1283）年秋に北摂地域を巡錫している。十月九日に薬室浄住寺にいて、十日「下向芥河 摂津國嶋上郡」とあり現在の高槻市芥川にゆき、そこで「自十一日三ケ日。於地蔵堂。説十重戒意。」「十四日。二百九十人授菩薩戒。」とみられ、その日の「夕方。登同國忍頂寺。」「十五日。於薬師堂。説十重戒意。」「十六日。於同所。三百三十四人授菩薩戒。五ケ村殺生禁断状。」「於件前申上畢。未見及殺生具皆焼失畢。」とある。17日には大和國高山にゆく。18日にはそこの八幡宮で136人に菩薩戒を授け、19日に西大寺に帰っている。叡尊の晩年83歳の年のことである。

高槻の教宗寺の遺品は、先の叡尊の芥川下向と関係づけて考えるべき遺品であろう。茨木市の遺品の多くは忍頂寺の寺辺村落に存在するといえ、「殺生禁断」の五ケ村と関係する可能性がある。

四条畷にも遺品が見られるが、先の叡尊の大和への帰り道をみてもわかるように、おそらく四条畷を通って奈良の高山に入って行ったと考えられ、これも北摂と一連の物と考えられる。そして長弓寺は、まさにその帰還ルート上にある寺である。北摂における石風呂の分布はこの叡尊の行動軌跡と重なるところが多く、叡尊の巡錫はそれ一度のことであっても、以後その影響が強く残ったと考えられる。律宗にとっては、湯は布教の展開にとって重要な手段であったわけで、北摂の石風呂とされるものは、律宗の展開の痕跡であったと考えられる。また四天王寺にも見られるが、四天王寺は叡尊・忍性ともに一時期別当として入っており、これも律宗の影響が考えられる。

D．風呂の維持

奈良市・中墓寺にみられる大乗妙典一千部供養碑は「奉供養大乗妙典一千部并風呂建立／法華講衆万人講衆乃至法界普利／天文壬子（天文21年＝1552）霜月吉日本願瑞派敬白」の銘文があり、「法華講衆万人講衆乃至法界普利」と同時に風呂建立の供養を兼ねており、室町末には村落の講によって風呂が維持されていることを明瞭に示している。和束町湯船の白山神社には木製の湯船があり、かつては大晦日に村人が湯浴みをしていたという。そして元は石製の湯船であったと伝えられている（日本歴史地名大系20『京都府の地名』1981）。先述の法華寺の風呂は近年まで法華寺の村の管理であったようで、法華寺の風呂が、村落に設けられた風呂と同じ性格のものとして整備され、以降、村人の管理のもとに受け継がれてきたことを示している。

各地に見られる石風呂は念仏講などによって維持されてきたものが多く、また律僧は念仏講的な集団のリーダーとなっていることが多く、風呂造営に通暁している彼らによって講的集団の宗教的設備として造られたものが多いと考えられる。

第3節　佐保石槽の整形技法

最後に石を彫り込む技法の問題点について述べる。先の表中、佐保の石槽とされる広田・馬場谷の石槽は未完成品である。未完成品は物を研究する立場からすると、技法的な問題を解決するためのヒントがそこに残されており、完成品にない魅力がある。

これは石造品すべてに共通する在り方であるが、石のような重量物は最終的な整形は別にして、石を切り出した所でほとんどの整形を行い、できるだけ軽くしてから搬出するのが普通である。特に石槽の様な箱形遺品の場合は内部を深く彫り込むので、石を切り出した所で内部の刳り抜きをほとんどすませて、できるだけ軽くしてから運搬したと考えられる。石の切り出しについては、石切場の発掘がこれまでに数件なされており、それらが参考になる。

A．滑石の石切場

長崎県西彼杵郡ホゲット遺跡は滑石の石切場である。ここでは石鍋が作られており、その制作技法が明確になる。石の露頭が各所にみられ、そこから素材の石を切り出すが、興味深いのは素材の石を切り出してそれを加工するのではなく、直接岩に容器の祖形を彫り込んでそれを切り離すというやり方をとることである。そのためにまず鍋の直径に当たる方眼状の溝を彫り込み鍋の直径を決め、方形の隅を落として丸く整形してからはぎ取る。単に一つの鍋を造るのではなく、多くの鍋を一度に造る大量生産の技法である。簡単に内部を刳り抜いてから搬出し、後に丁寧な整形がなされたと考えられる。ここでもできるだけ軽量にしてしてから搬出している。これは石槽の内部を刳り抜いてから搬出しようとしたのと全く同じである。

ホゲット遺跡では様々な物が作られているが、もっとも多く作られたのは鍋を中心とした容器である。図3は石鍋の編年表（中世土器研究会『概説　中世の土器・陶磁器』 1995より引用）であるが、鍋は12世紀後半頃から形が大きく変化する。古いものは口径と底径がほぼ等しいが、以降は底径が小さくなる。ホゲット遺跡ではそれに合わせて石の切り出し方が、四角い石のブロックを切り出すやり方(A)から模式図図4のように垂形のものを交互に切り出すやり方(B)に変化すると指摘されている。このやり方は、一つの鍋の形を掘ると次の鍋底の形が半分ほど自然にできることになる鍋底のカーブを上手に利用した掘り方である。一つを掘りだした後の四隅の高まりを次の鍋本体にするのである。この技法への変化の背景には、量産という経済的な要因が強く働いたと考えられる。またこの掘り方は、佐保石槽の土手

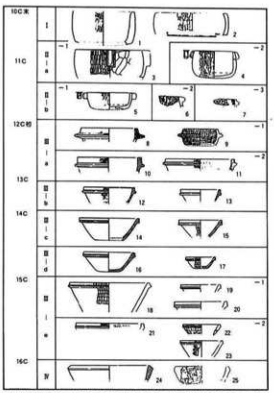


図3　石鍋編年表
（木戸雅寿「石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』1995より）

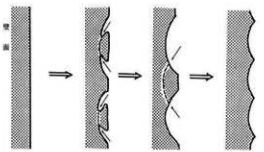


図4　石鍋の切り出し方模式図(B)
（引用：図3と同じ）

状のメッシュを残すやり方に通じる所があるといえる。

B．凝灰岩の石切場

奈良県と大阪府の境にある二上山の西麓で凝灰岩の石切場が発掘されている。そこでは石塔、主に五輪塔の各輪の未製品が出土している。13世紀半ばから14世紀にかけての頃の遺品が中心である。最終的な表面の磨きはなされていないが、ほぼ完成品に近い遺品がみられるので、ほとんど石を切りだしたその場で完成に近い段階まで仕上げてから、搬出していた事がわかる。長崎県のホゲット遺跡と同様な光景がみられる。切り出し方は先のAタイプの切り出し方の方が多いようで、四角い穴は四角い穴で連続しており、丸い穴は丸い穴で連続している様子がみてとれる。四角い穴は地輪・火輪などであり、丸い穴は水輪空風輪等を彫り出した痕跡と考えられる。

C．和泉砂岩の石切場

時代的には少し降るが、関西国際空港造成に関連して、阪南市の箱作の山の中で砂岩の石切場跡が発掘されている。この地域は和泉砂岩の産地であり、近世になると近畿地方一帯に同地の石が運ばれている。近世中後期の墓石は、一部地域で花崗岩の使われる所もあるが、畿内のほとんどの所では和泉砂岩が使用されている。和泉砂岩の代表的な遺品は墓石であるが、それ以外に石燈篭とか、もっと生活に密着した物では石臼に利用されている。『和泉名所図会』には箱作の石屋の風景がみられるが、そこでは石臼や石燈籠など、様々な物が同一工房で造られていた様子が窺える。出土した未製品から石臼の切り出し方も先ほどの石鍋の模式図Aと全く同じ切り出し方である。

D．スカンジナビアバイキングの石鍋作成方法

以上のような石の切り出し方は、日本だけではなく世界的に共通するようである。図5はスカンジナビアのバイキングの石鍋作成方法である。以下は、ジャクリーヌ・シンプソンの『バイキングの世界』（早野勝巳訳　1982）からの引用である。

石鹸石は、軟かく削りやすいうえに、熱にきわめて強いという利点があり、織機の重し、錘の輪、ランプ、碗、鍋、金属を鋳造する時の鋳型として多用された。この石を手に入れるために穴やトンネルを掘ることは稀で、垂直になった崖の面に露出しているため、天然の岩石から直接品物を作ることができた。例えば碗を作るときは、岩の表面が碗の底になるように、まず長い鑿を使って幾分大きめに粗削りした。それからマッシュルーム状に切り込んでいき、削り出す。そして内部をくりぬき、細かな鑿で形を整えた上で、やすりをかけた。最後のプロセスは、しばしば自宅で行われた。持ち帰らなかった未完成の碗を、崖の下に今日もなお見ることができる。石鹸石の用具は他のノルウェーの地域ばかりか、デンマーク、ドイツ、アイスランドへ大量に送られた。（中略）スカンジナビア産の陶器が、ヴァイキング時代後期までほとんど発見されないのは、おそらくは石鹸石が広く用いられていたためであろう。

図5　ノルウェーの採石場（ジャックリーヌ・シンプソン『バイキングの世界』1982より）

ここでは石鹸石と訳されているが、滑石の一種と考えてよいだろう。

この使用法は全く日本の使用法と変わらない。

E．古代の石剝ぎ技法

さて石鍋は古代末から中世、和泉砂岩の場合は近世の状況であるが、古代ではどうであったのか。加古川市に残されている「石の宝殿」も横口式石郭の未完成品と考えられ、益田岩舟と同類の遺品と云ってよい。石の宝殿は横に倒れた形をしている。まず外形をある程度整えてさらに彫り込む面を上に向けて、上から下へ掘る方が作業しやすいので、まず横位置で作り、後で正位置に据えるものであったことが窺える。益田の岩舟も全く同じものと考えてよい。

飛鳥の益田の岩舟の整形技法はきわめて興味深いものがある。上から大きな穴を掘り下げているが、その底部に餅焼き網のように方形メッシュの溝が掘られた痕跡がある。外面にも同様な痕跡がある。石の切り出し方と石の掘り込み方、及び表面整形は基本的に同じ技法が使われていることも注目される。

方眼状に溝を掘る手法は平坦に面を落としていく場合に適している。広い面積を平坦に面落としする場合、ある部分だけが深くなる危険性があるが、先ず溝を掘り、深さを確認しながら面を落し、それを繰り返す。この方法を採ると平均した面落としが可能になる。発掘調査で、まず遺跡の深さを確認するためにトレンチを入れるのと同じである。

益田岩舟の場合は、外面にも同様な溝の方眼が残っている。穴を掘るときだけではなく外面の整形でも同じ手法が用いられている。近世や近代の大型の記念碑の類などでも、背面などにはそのような方眼の痕跡が時々見受けられ、それがある種のアクセント或いは装飾になっている場合もある。

まとめにかえて　－佐保石槽の石剝ぎ技法の特徴－

佐保の石槽の場合、今までみてきた技法と少し異なる所がある。それは深さを確認するのに、発掘でいうなら、方眼状に土手を残して層位を確認するのと似たような手法が取られている。土手を残して掘り、ある程度掘ると今度は土手をはずして平坦にし、さらにまた同じ作業を繰り返して面を下げていくやり方である。佐保石槽の内側面には、その過程が数度繰り返された様子が見られる。これも深さを確認する技法の一つであるが、ホゲット遺跡の石の切り出し方のBに似た技法と言うこともできる。するとこの技法は中世的な要素を持つと言うことができるかもしれない。石切り場の調査例が少なく、この点はまだこれからの研究課題である。

佐保馬場谷石槽は長径：短径の比率が長径1に対して短径0.48であり、その他の石風呂は短径は0.6～0.63あたりで、サイズ的に異なり石風呂といえるかどうか疑問がある。

この二基は古墳の石郭だといわれることが多いが、果たしてそうなのか？　先述したように面落としの技法的側面からは新しい傾向も窺えるわけで、佐保広田石槽の近くには「湯屋」と考えられる字名が残されている事を考えると石風呂の可能性は捨て切れず、まだまだ課題の多い遺物だということになる。石の切り出し技法研究のさらなる深まりが期待される。

石塔・石仏データ一覧〈1〉

No.	住所・所在	名称	総高	高	幅	厚	時代	紀年	西暦	月	日	銘文・備考
1	大阪府箕面市粟生間谷川合 徳大寺跡	徳大寺墓地跡風景										
2	大阪府箕面市粟生間谷川合 徳大寺跡	徳大寺墓地跡A区風景										№1～3まで。
3	大阪府箕面市粟生間谷川合 徳大寺跡	徳大寺墓地跡B区風景										№4～18まで。内№4は下段、以外は上段。
4	大阪府箕面市粟生間谷川合 徳大寺跡	無縫塔	102.3	49.0	27.8		江戸	元禄8	1695	10	16	【銘文】 〔正面〕 黄檗第五代雲寺開山鵬病義泉敬老和尚之塔 〔背面〕元禄八年乙亥十月十六日示寂 ※法量：塔身高49.0、塔身幅27.8、塔身幅下17.8、請花高13.2、請花幅28.2、請花下径17.2、反花高1.6.3、反花上径17.2、反花径32.1、台座高23.8×64.3×55.6。
5	大阪府箕面市粟生間谷川合 徳大寺跡	無縫塔	103.9	47.6	25.8		江戸					【銘文】 〔正面〕 □二代丁勃隳大和尚之?□ ※塔身四分割になる。法量：塔身高47.6、塔身幅25.8、塔身幅下17.7、請花高13.9、請花幅28.3、請花下径16.7、反花高16.7、反花上径17.7、反花径32.4.6、台座高25.7×64.8×55.1。
6	大阪府箕面市粟生間谷川合 徳大寺跡	櫛形墓碑	80.5	59.9	21.8	15.2	江戸	正徳2	1712	7	9	【銘文】 〔正面〕 臨済正傳三十六世天寶禅師和尚之塔 〔右面〕正徳二壬辰年七月九日示寂
7	大阪府箕面市粟生間谷川合 徳大寺跡	自然石墓碑		79.7	36.7	33.9	江戸	享保6	1721	9	13	【銘文】 〔正面〕 享保六　辛/丑　年 圓殿春門行正禪人之塔 九月十三日
8	大阪府箕面市粟生間谷川合 徳大寺跡	宝篋印塔	200.1	122.3	44.6		江戸	享保17	1732	4	8	【銘文】 〔正面〕 宝篋印　造立願主-願書欣求 〔右面〕 種首宝塔塔王金晃 内秘妙説外設災殃 舎利之聚和衆之場 成勝一花成就一香 若人瞻礼勝因何量 〔背面〕 吉享保十七年霜次壬子 四月初八日 吉拝山嗣臨沙門悦堂　謹撰 ※塔身梵字：西=ｷﾘｰｸ、北=ﾞﾝｿﾞ、東=ｷﾘｰｸ、南=ｷ。 ※台座法：1×44.8×39.3。台座上面西方両隅花立の穴あり。台座中央に径約14.7の孔が上下に貫通。下に赤褐色の蔵骨器埋納。解剖に墨書「南無阿弥陀佛」あり。
9	大阪府箕面市粟生間谷川合 徳大寺跡	櫛形墓碑	88.5	73.4	24.4	14.4	江戸	宝暦2	1752	9	3	【銘文】 〔正面〕 宝暦十三　癸/未　天 當寺第五代密仙賢和尚□□ 七月廿三日 ※台座上13.4×33.4×25.5、台座下16.8×42.1×42.9。
10	大阪府箕面市粟生間谷川合 徳大寺跡	櫛形墓碑	91.9	61.7	21.4	13.1	江戸	宝暦13	1763	7	23	【銘文】 〔正面〕 當寺第六代雲仙賢和尚之塔 〔背面〕文化六己巳年三月五日示寂 ※請花高15.3、請花幅28.2、台座20.8×47.9×47.0。
11	大阪府箕面市粟生間谷川合 徳大寺跡	無縫塔	84.5	48.4	25.9		江戸	文化6	1809	3	5	【銘文】 〔正面〕當寺第六代中興瑞耀昭大和尚塔 〔背面〕文化六己巳年三月五日示寂 ※請花高15.3、請花幅28.2、台座20.8×47.9×47.0。
12	大阪府箕面市粟生間谷川合 徳大寺跡	櫛形墓碑	83.0	47.0	18.8	12.3	江戸	享和2	1802	6	3	【銘文】 〔正面〕 當山第七代重仲興和尚塔 〔右面〕 享和二　壬/戌　年六月三日 ※台座上14.7×32.8×26.9、台座下21.3×43.0×37.9。
13	大阪府箕面市粟生間谷川合 徳大寺跡	方柱墓碑	90.4	50.8	19.1	19.7	江戸	安政4	1857	閏5	9	【銘文】 〔右面〕安政四　丁/巳　年 閏五月九日未刻示寂 〔正面〕當寺第十代忍仙徳大和尚塔 ※台座上22.8×36.9×31.8、台座下16.8×49.7×44.0。
14	大阪府箕面市粟生間谷川合 徳大寺跡	櫛形墓碑	63.0	46.3	19.7	13.5	江戸	文久1	1861	8	17	【銘文】 〔右面〕 文久元辛酉年八月十七日寂 〔正面〕 熟堂賢上坐之塔 ※台座16.7×30.8×22.2。
15	大阪府箕面市粟生間谷川合 徳大寺跡	櫛形墓碑	60.6	43.4		13.2	江戸	慶応3	1867	5	20	【銘文】 〔左面〕 慶応三　丁/卯　五月廿日 〔正面〕 智善顔如海善法尼 智善善復法女 〔右面〕 炭木　　岸田屋庄左衛門立之 ※台座17.2×38.7×31.2、台座上面線香立の窪みあり。両者の死（殺人）に関する一件書類が遺されている。
16	大阪府箕面市粟生間谷川合 徳大寺跡	墓碑台座		11.0	31.9	26.1	江戸					前方に線香立ての窪みあり。
17	大阪府箕面市粟生間谷川合 徳大寺跡	五輪塔水輪	20.5	20.1	29.6		室町					水輪、上面ホゾなし、下面ホゾあり。上面径14.3、下面径10.7、ホゾ径5.3、ホゾ高0.4。

石塔・石仏データ一覧〈2〉

No.	住所・所在	名称	総高	高	幅	厚	時代	紀年	西暦	月	日	銘文・備考
18	大阪府箕面市粟生間谷川合 撓大寺跡	板碑（阿弥陀）	39.7	39.7	24.1	17.3	桃山					正面地蔵。側面整形幅13.2。頭部高17.6。
19	大阪府箕面市粟生間谷川合 撓大寺跡	板碑（阿弥陀）	29.3	29.3	19.4	12.9	桃山					正面地蔵。像高11.8。
20	大阪府箕面市粟生間谷川合 撓大寺跡	一石五輪塔（火輪・水輪）	15.3	15.3	14.0	13.0	桃山					
21	大阪府箕面市粟生間谷川合 撓大寺跡	一石五輪塔	60.0	60.0	22.7	21.7	桃山					地輪高27.4、水輪高8.4、火輪高11.1、風輪高4.4、空輪高8.4。
22	大阪府箕面市粟生間谷川合 撓大寺跡	瓦製仏犬	21.9	11.9	19.5		江戸					
23	大阪府箕面市粟生間谷川合 撓大寺跡	瓦製仏犬	17.9	13.6	20.5		江戸					
24	大阪府茨木市佐保 クルス山墓地遺跡	墓地風景										
25	大阪府茨木市佐保 クルス山墓地遺跡	五輪塔地輪		28.4	37.3		室町					地輪。上面に径8.0深2.6のホゾあり。
26	大阪府茨木市佐保 クルス山墓地遺跡	五輪塔地輪		22.9	34.1		桃山					地輪。上面に径7.7深1.0のホゾあり。下部未整形。
27	大阪府茨木市佐保 クルス山墓地遺跡	板碑（阿弥陀）	36.3	16.5	21.4	11.4	桃山					
28	大阪府茨木市佐保 クルス山墓地遺跡	板碑（阿弥陀）	49.0	12.2	18.2	16.1	桃山					膝部なし。
29	大阪府茨木市佐保 クルス山墓地遺跡	板碑（阿弥陀）	49.6	14.3	26.8	16.4	桃山					
30	大阪府茨木市佐保 クルス山墓地遺跡	板碑（阿弥陀）	33.5	11.1	16.7	12.0	桃山					膝部なし。
31	大阪府茨木市佐保 クルス山墓地遺跡	光背石仏（阿弥陀）	48.0	21.5	30.2	15.5	桃山					
32	大阪府茨木市佐保 クルス山墓地遺跡	光背石仏（阿弥陀）	39.4	27.2	22.5	10.3	桃山					
33	大阪府茨木市佐保 クルス山墓地遺跡	光背石仏（阿弥陀）	41.5	19.0	26.7	13.0	桃山					膝部なし。
34	大阪府茨木市佐保 クルス山墓地遺跡	光背石仏（阿弥陀）	42.4	17.2	26.8	16.8	桃山					膝部なし。
35	大阪府茨木市佐保 クルス山墓地遺跡	光背石仏（阿弥陀）	45.0	19.2	28.8	19.0	桃山					
36	大阪府茨木市佐保 クルス山墓地遺跡	光背石仏（阿弥陀二尊）	45.8	15.7	30.6	10.8	桃山					石蟲風。像高は向って左を計る。
37	大阪府茨木市佐保 クルス山墓地遺跡	光背石仏（阿弥陀）	45.1	17.5	22.6	11.5	桃山					石蟲風。
38	大阪府茨木市佐保 クルス山墓地遺跡	光背石仏（阿弥陀）	44.5	19.8	22.6	13.0	桃山					上部欠損。板碑・石蟲の可能性あり。
39	大阪府茨木市佐保 クルス山墓地遺跡	一尊像	*40.0	*10.5	19.5	13.2	桃山					上部欠損。
40	大阪府茨木市佐保 クルス山墓地遺跡	舟　形	45.3		23.7	13.0	桃山					彫像なし。未製品か。
41	大阪府茨木市佐保 クルス山墓地遺跡	地蔵菩薩像	*99.7	50.0	46.7	20.7	江戸					クルス山墓地遺跡下の田街道脇にあり。通称縁なし地蔵。
42	大阪府茨木市佐保 佐保馬場共同墓地	墓地風景										
43	大阪府茨木市佐保 佐保馬場共同墓地	石塔残欠					室町					一石五輪塔残欠三基。五輪塔残欠20点（空風輪3、火輪1、水輪1、地輪3）。
44	大阪府茨木市佐保 佐保馬場共同墓地	板碑（阿弥陀立像・地蔵立像）	*80.0	27.0	32.1	19.0	桃山					石蟲風。立像。クルス山墓地遺跡から移転。像高は向って左を計る。
45	大阪府茨木市佐保 佐保馬場共同墓地	板碑（阿弥陀二尊）	*59.0	13.9	29.2	18.2	桃山					石蟲風。クルス山墓地遺跡から移転。像高は向って左を計る。
46	大阪府茨木市佐保 佐保馬場共同墓地	板碑（阿弥陀・地蔵）	*62.6	15.9	29.6	17.3	桃山					石蟲風。クルス山墓地遺跡から移転。像高は向って左を計る。
47	大阪府茨木市佐保 佐保馬場共同墓地	板碑（阿弥陀二尊）	*52.5	17.1	31.3	17.4	桃山					石蟲。像高は向って左を計る。
48	大阪府茨木市佐保 佐保馬場共同墓地	板碑（二尊）	*41.3	17.0	31.2	16.5	桃山					石蟲風。クルス山墓地遺跡から移転。像高は向って左を計る。
49	大阪府茨木市佐保 佐保馬場共同墓地	板碑（二尊）	*50.0	14.0	26.7	12.5	桃山					石蟲風。クルス山墓地遺跡から移転。像高は向って左を計る。
50	大阪府茨木市佐保 佐保馬場共同墓地	板碑（阿弥陀）	49.4	17.9	20.5	10.9	桃山					クルス山墓地遺跡から移転。
51	大阪府茨木市佐保 佐保馬場共同墓地	板碑（阿弥陀）	48.7	14.9	22.0	11.5	桃山					石蟲風。クルス山墓地遺跡から移転。
52	大阪府茨木市佐保 佐保馬場共同墓地	板碑（阿弥陀）	*50.0	14.0	24.5	19.4	桃山					石蟲風。クルス山墓地遺跡から移転。
53	大阪府茨木市佐保 佐保馬場共同墓地	板碑（阿弥陀）	34.2	14.3	22.2	13.8	桃山					石蟲風。クルス山墓地遺跡から移転。
54	大阪府茨木市佐保 佐保馬場共同墓地	板碑（阿弥陀）	53.6	14.5	19.8	13.5	桃山					石蟲風。クルス山墓地遺跡から移転。
55	大阪府茨木市佐保 佐保馬場共同墓地	板碑（阿弥陀）	55.2	13.0	19.0	14.7	桃山					石蟲風。クルス山墓地遺跡から移転。
56	大阪府茨木市佐保 佐保馬場共同墓地	板碑（阿弥陀）	52.9	14.9	18.7	11.4	桃山					石蟲風。クルス山墓地遺跡から移転。
57	大阪府茨木市佐保 佐保馬場共同墓地	板碑（二尊）	*36.8	10.3	23.5	11.0	桃山					膝部なし。クルス山墓地遺跡から移転。像高は向って左を計る。
58	大阪府茨木市佐保 佐保馬場共同墓地	板碑（阿弥陀）	45.5	13.5	17.9	10.4	桃山					クルス山墓地遺跡から移転。
59	大阪府茨木市佐保 佐保馬場共同墓地	板碑（阿弥陀）	*24.5	11.1	18.3	12.3	桃山					下部欠損。元は集落にあり。
60	大阪府茨木市佐保 佐保馬場共同墓地	板碑（阿弥陀）	51.4	13.5	19.2	11.6	桃山					クルス山墓地遺跡から移転。
61	大阪府茨木市佐保 佐保馬場共同墓地	板碑（阿弥陀）	*24.4	10.8	18.0	11.0	桃山					膝部なし。下部欠損。クルス山墓地遺跡から移転。
62	大阪府茨木市佐保 佐保馬場共同墓地	板碑（阿弥陀）	*28.5	14.0	15.6	9.3	桃山					下部欠損。クルス山墓地遺跡から移転。
63	大阪府茨木市佐保 佐保馬場共同墓地	板碑（阿弥陀）	44.0	15.3	18.5	14.0	桃山					膝部なし。クルス山墓地遺跡から移転。
64	大阪府茨木市佐保 佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	42.7	21.5	23.1	12.0	桃山					膝部なし。クルス山墓地遺跡から移転。
65	大阪府茨木市佐保	光背石仏（阿弥陀）	53.7	27.5	36.2	17.0	桃山					クルス山墓地遺跡から移転。

石塔・石仏データ一覧〈3〉

No.	住所・所在	名称	総高	高	幅	厚	時代	記年	西暦	月	日	銘文・備考
	佐保馬場共同墓地											
66	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	47.0	28.0	30.0	15.8	桃山					クルス山墓地遺跡から移転。
67	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	*42.1	26.8	26.8	16.7	桃山					クルス山墓地遺跡から移転。
68	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	43.0	19.3	27.9	14.9	桃山					膝部なし。クルス山墓地遺跡から移転。
69	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	39.9	18.3	26.2	9.4	桃山					石龕風。クルス山墓地遺跡から移転。
70	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	43.5	20.0	27.8	12.0	桃山					石龕風。クルス山墓地遺跡から移転。
71	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	33.6	15.8	22.2	9.2	桃山					石龕風。クルス山墓地遺跡から移転。
72	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	38.2	15.3	21.8	12.2	桃山					石龕風。クルス山墓地遺跡から移転。
73	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	40.5	19.3	25.5	12.3	桃山					クルス山墓地遺跡から移転。
74	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	38.5	18.4	23.6	11.8	桃山					石龕風。クルス山墓地遺跡から移転。
75	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	34.0	17.5	26.8	12.4	桃山					石龕風。クルス山墓地遺跡から移転。
76	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	45.0	18.0	26.5	13.2	桃山					石龕風。クルス山墓地遺跡から移転。
77	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	42.5	20.2	21.5	14.0	桃山					クルス山墓地遺跡から移転。
78	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	37.9	19.3	19.9	15.0	桃山					クルス山墓地遺跡から移転。
79	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	42.8	20.5	24.5	13.0	桃山					クルス山墓地遺跡から移転。
80	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	32.5	16.0	22.0	14.0	桃山					クルス山墓地遺跡から移転。
81	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	44.6	20.0	24.8	10.8	桃山					クルス山墓地遺跡から移転。
82	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	38.9	19.0	23.8	14.0	桃山					クルス山墓地遺跡から移転。
83	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	48.2	20.3	23.0	14.9	桃山					膝部なし。クルス山墓地遺跡から移転。
84	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	38.0	17.2	26.3	15.0	桃山					クルス山墓地遺跡から移転。
85	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	35.4	14.0	18.6	11.5	桃山					クルス山墓地遺跡から移転。
86	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	40.8	19.9	20.4	11.5	桃山					クルス山墓地遺跡から移転。
87	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	51.0	22.2	21.7	17.0	桃山					クルス山墓地遺跡から移転。
88	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	45.0	20.1	27.0	9.5	桃山					クルス山墓地遺跡から移転。
89	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	38.4	18.5	20.7	13.4	桃山					膝部なし。クルス山墓地遺跡から移転。
90	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	*40.5	17.7	22.7	13.6	桃山					膝部なし。クルス山墓地遺跡から移転。
91	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	43.2	16.9	22.2	15.5	桃山					膝部なし。クルス山墓地遺跡から移転。
92	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	46.0	17.0	23.0	11.5	桃山					膝部なし。クルス山墓地遺跡から移転。
93	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	38.3	18.3	26.3	14.4	桃山					膝部なし。クルス山墓地遺跡から移転。
94	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	39.4	16.2	22.1	13.0	桃山					膝部なし。クルス山墓地遺跡から移転。
95	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	43.5	19.4	25.0	10.0	桃山					膝部なし。石龕風。クルス山墓地遺跡から移転。
96	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	49.5	21.1	28.4	12.0	桃山					膝部なし。クルス山墓地遺跡から移転。
97	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	47.4	21.2	21.4	13.3	桃山					クルス山墓地遺跡から移転。
98	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	45.8	20.8	22.6	8.9	桃山					膝部なし。クルス山墓地遺跡から移転。
99	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	阿弥陀如来像	42.8	19.9	24.7	11.5	桃山					上部欠損か。板碑の可能性もある。膝部なし。クルス山墓地遺跡から移転。
100	大阪府茨木市佐保佐保馬場共同墓地	個人墓碑	*65.4		35.5	39.0	江戸	延宝3	1675	9	5	【銘文】 延宝三年 圓春空覺夢玄庵主 乙卯 九月五日　六十才
101	大阪府茨木市佐保字馬場　教園寺	宝篋印塔					鎌倉					境内に宝珠、相輪下部、蓮下部、風鐸り2、塔身（・・・・）あり。門前の階段下に蓮上部あり。他に五輪塔六輪と、地輪1あり。
102	大阪府茨木市佐保字鬼山　鬼山家墓所	墓地風景										
103	大阪府茨木市佐保字鬼山　鬼山家墓所	五輪塔空風輪	21.0		15.4		鎌倉					四門の梵字刻む。本来、宗旨地区出土のものである。空風輪、径は風輪、風輪下部に出ホゾあり。
104	大阪府茨木市佐保字鬼山　鬼山家墓所	五輪塔空風輪	25.0		21.0		室町					空風輪、径は風輪、風輪下部に出ホゾあり。
105	大阪府茨木市佐保字鬼山　鬼山家墓所	五輪塔空風輪	16.0		13.3		室町					空風輪、径は風輪、風輪下部に出ホゾあり。
106	大阪府茨木市佐保字鬼山　鬼山家墓所	五輪塔空風輪	25.6		21.0		室町					空風輪、四門の梵字刻む。径は風輪、風輪下部に出ホゾあり。
107	大阪府茨木市佐保字鬼山　鬼山家墓所	五輪塔残欠	22.3		17.5		室町					佐保川より拾い上げる。
108	大阪府茨木市佐保字鬼山　鬼山家墓所	五輪塔空風輪	18.5		15.4		室町					空風輪、径は風輪、風輪下部に出ホゾあり。
109	大阪府茨木市佐保字鬼山　鬼山家墓所	五輪塔火輪	21.7		31.0		室町					火輪、上面にホゾ孔あり。
110	大阪府茨木市佐保字鬼山　鬼山家墓所	五輪塔火輪	17.9		26.3		室町					火輪、上面にホゾ孔あり。

石塔・石仏データ一覧〈4〉

No.	住所・所在	名称	総高	高	幅	厚	時代	紀年	西暦	月	日	銘文・備考
111	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	五輪塔火輪	15.6		25.5		室町					火輪。上面にホゾ孔あり。
112	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	五輪塔火輪	13.3		22.0		室町					火輪。上面にホゾ孔あり。
113	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	五輪塔火輪	12.5		22.4		室町					火輪。上面に孔あり。
114	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	五輪塔火輪	11.9		20.9		室町					火輪。上面にホゾ孔あり。
115	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	五輪塔火輪	11.0		21.0		桃山					火輪。上面にホゾ孔あり。
116	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	五輪塔水輪	17.0		24.0		室町					水輪。
117	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	五輪塔水輪	16.1		24.4		室町					水輪。
118	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	五輪塔水輪	14.8		22.1		室町					水輪。上面にホゾ孔（奉竜孔）あり。
119	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	五輪塔地輪	*33.0		*20.0		室町					地輪。上面にホゾ孔あり。
120	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	五輪塔地輪	15.6		23.1		室町					地輪。
121	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	五輪塔	*43.5		23.3		室町					クルス山墓地遺跡より移す。空風輪欠失。幅は地輪。
122	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	一石五輪塔残欠（火水輪）	*15.4		12.3		室町					火水輪。幅は火輪。
123	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	67.5	20.8	20.3	14.7	室町					クルス山墓地遺跡より移す。
124	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	52.1	22.0	22.1	12.3	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。
125	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	*29.5	14.6	21.7	11.2	桃山					下半分欠失。
126	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	47.0	16.7	17.4	11.0	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。
127	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	51.7	14.9	17.7	11.3	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。
128	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	*39.3	21.2	23.4	8.5	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。膝部なし。
129	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	45.2	20.0	22.1	10.9	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。
130	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（二尊）	54.1	16.4	27.2	15.6	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。像高は向って右を計る。
131	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（二尊）	49.9	19.1	23.3	12.1	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。
132	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	53.4	23.6	21.7	10.1	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。
133	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（二尊）	53.9	13.9	23.4	12.6	桃山					像高は向って右を計る。
134	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（二尊）	55.8	14.6	19.4	14.3	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。像高は向って右を計る。
135	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	71.1	20.3	25.0	16.5	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。
136	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	43.1	11.6	16.1	7.5	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。
137	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	45.9	11.0	16.1	9.1	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。膝部なし。
138	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	36.4	12.0	15.9	9.8	桃山					膝部なし。
139	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	47.8	11.6	17.2	10.2	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。膝部なし。
140	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	38.3	13.3	21.4	10.6	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。
141	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	37.9	12.4	16.1	7.9	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。膝部なし。
142	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	63.2	14.2	24.3	15.8	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。
143	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	*43.1	24.7	32.5	12.0	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。蹠込光背。
144	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	52.7	22.1	26.3	16.5	室町					膝部なし。
145	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	50.9	21.6	24.0	14.5	桃山					膝部なし。
146	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	48.5	18.4	28.5	10.0	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。膝部なし。
147	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	42.2	21.1	31.9	7.9	桃山					膝部なし。石龕風。
148	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	37.5	21.5	18.7	10.9	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。膝部なし。
149	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	39.0	17.0	23.0	14.5	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。
150	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	37.4	22.1	19.4	12.0	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。
151	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	41.5	22.8	24.0	9.0	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。
152	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	34.5	21.2	20.0	11.5	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。
153	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	42.3	22.6	25.0	12.5	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。蹠込光背。
154	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	39.7	24.1	24.6	16.5	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。蹠込光背。
155	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	42.4	24.4	24.1	13.1	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。蹠込光背。
156	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	42.2	20.9	20.0	10.4	桃山					蹠込光背。
157	大阪府茨木市佐保字兔山兔山家墓所	板碑（阿弥陀）	36.8	15.8	21.5	9.6	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。蹠込光背。
158	大阪府茨木市佐保字兔山	板碑（阿弥陀）	33.4	16.8	22.3	11.4	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。膝部なし。

石塔・石仏データ一覧〈5〉

No.	住所・所在	名称	総高	高	幅	厚	時代	紀年	西暦	月	日	銘文・備考
	免山家墓所											
159	大阪府茨木市佐保字免山免山家墓所	板碑（阿弥陀）	33.6	15.3	21.5	9.0	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。銘部なし。
160	大阪府茨木市佐保字免山免山家墓所	板碑（阿弥陀）	*39.5	20.0	24.6	14.5	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。銘部なし。
161	大阪府茨木市佐保字免山免山家墓所	板碑（阿弥陀）	34.5	14.3	23.0	14.4	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。銘部なし。
162	大阪府茨木市佐保字免山免山家墓所	板碑（阿弥陀）	40.9	15.6	26.3	13.6	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。銘部なし。
163	大阪府茨木市佐保字免山免山家墓所	板碑（阿弥陀）	45.4	19.3	20.0	8.4	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。銘部なし。
164	大阪府茨木市佐保字免山免山家墓所	板碑（阿弥陀）	40.3	24.6	27.5	13.7	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。銘部なし。
165	大阪府茨木市佐保字免山免山家墓所	板碑（阿弥陀）	*33.4	17.1	26.3	15.5	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。銘部なし。
166	大阪府茨木市佐保字免山免山家墓所	板碑（阿弥陀）	*45.3	19.3	25.1	16.4	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。銘部なし。
167	大阪府茨木市佐保字免山免山家墓所	板碑（阿弥陀）	*29.8	*14.3	19.1	9.5	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。銘部なし。
168	大阪府茨木市佐保字免山免山家墓所	板碑（阿弥陀）	*31.6	16.4	21.1	7.3	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。銘部なし。
169	大阪府茨木市佐保字免山免山家墓所	板碑（阿弥陀）	44.0	12.7	16.7	7.6	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。銘部なし。
170	大阪府茨木市佐保字免山免山家墓所	板碑（阿弥陀）	43.5	15.9	22.0	8.5	桃山					クルス山墓地遺跡より移す。
171	大阪府茨木市佐保免山地区墓地A	墓地風景										
172	大阪府茨木市佐保免山地区墓地B	墓地風景										
173	大阪府茨木市佐保免山地区墓地B下田掛橋	五輪塔水輪	*15.0		*30.0		室町					水輪。
174	大阪府茨木市佐保免山地区墓地B	一石五輪塔（空・風・火・水）	*29.0		12.0		室町					地輪部欠失。水輪高7.6、火輪高7.9、風輪高4.4、空輪高8.1。水輪径12.0、火輪径11.8、風輪径10.3、空輪径9.7。
175	大阪府茨木市佐保免山地区墓地A	板碑（阿弥陀）	*52.4	15.8	24.3	13.0	室町					
176	大阪府茨木市佐保免山地区墓地A	板碑（阿弥陀）	*31.5	19.9	25.7	15.1	桃山					
177	大阪府茨木市佐保免山地区墓地A	板碑（阿弥陀）	*33.1	17.3	22.7	13.1	桃山					下部欠失。
178	大阪府茨木市佐保免山地区墓地A	板碑（阿弥陀）	43.3	12.5	18.2	11.8	桃山					
179	大阪府茨木市佐保免山地区墓地B	板碑（二尊）	47.9	17.3	25.0	9.5	桃山					
180	大阪府茨木市佐保免山地区墓地B	板碑（二尊）	71.3	11.4	27.1	12.5	桃山					
181	大阪府茨木市佐保免山地区墓地B下田掛橋	板碑（阿弥陀）	*21.7	*11.5	18.4	*13.0	桃山					下部欠失。
182	大阪府茨木市佐保免山地区墓地B	板碑（阿弥陀）	48.0	11.3	18.8	12.3	桃山					
183	大阪府茨木市佐保免山地区墓地B	板碑（阿弥陀）	53.1	21.3	22.0	12.0	桃山					
184	大阪府茨木市佐保免山地区墓地B下田掛橋	板碑（阿弥陀）	47.8	20.5	21.3	13.5	桃山					
185	大阪府茨木市佐保免山地区墓地B	板碑（阿弥陀）	36.6	11.1	14.6	7.5	桃山					
186	大阪府茨木市佐保免山地区墓地B	板碑（阿弥陀）	31.4	9.5	13.3	7.9	桃山					
187	大阪府茨木市佐保免山地区墓地B	板碑（阿弥陀）	35.3	10.9	18.1	9.5	桃山					銘部なし。
188	大阪府茨木市佐保免山地区墓地B	板碑（阿弥陀）	46.2	12.1	16.6	8.2	桃山					銘部なし。
189	大阪府茨木市佐保免山地区墓地B	板碑（阿弥陀）	46.1	10.7	15.8	9.3	桃山					銘部なし。
190	大阪府茨木市佐保免山地区墓地B	板碑（阿弥陀）	39.7	10.3	19.4	9.3	桃山					
191	大阪府茨木市佐保免山地区墓地B	光背石仏（阿弥陀二尊）	44.3	22.0	26.3	18.5	桃山					
192	大阪府茨木市佐保免山地区墓地B	光背石仏（阿弥陀二尊）	42.3	20.5	29.5	14.0	桃山					大くの二尊であり、小さい方は地蔵の可能性あり。像高は阿弥陀如来像。
193	大阪府茨木市佐保免山地区墓地B	光背石仏（阿弥陀）	35.0	22.9	26.0	12.3	桃山					彫込光背。
194	大阪府茨木市佐保免山地区墓地B	光背石仏（阿弥陀二尊）二尊像	51.3	18.3	29.0	14.1	桃山					彫込光背。像高は、向って右。阿弥陀如来。
195	大阪府茨木市佐保免山地区墓地B	光背石仏（阿弥陀）	43.7	21.9	23.1	11.0	桃山					
196	大阪府茨木市佐保免山地区墓地B	光背石仏（阿弥陀）	44.0	19.0	33.0	*10.0	桃山					銘部なし。
197	大阪府茨木市佐保免山地区墓地B	祠　台	63.0		178.0	63.1	江戸～					板石の組合せ。元は屋根があり「文政」銘の瓦が葺かれていた。
198	大阪府茨木市佐保字免山中の谷	光背石仏（阿弥陀）	48.1	26.8	29.7	13.5	室町					
199	大阪府茨木市佐保字免山中の谷	光背石仏（阿弥陀）	42.5	23.0	25.5	10.6	室町					銘部なし。
200	大阪府茨木市佐保字免山中の谷	光背石仏（二尊）	36.9	14.1	25.1	11.7	桃山					彫込光背。像高は向って右を計る。
201	大阪府茨木市佐保字免山下寸共宅前	板碑（一尊）	*34.0	*6.5	23.4	15.1	室町					下部欠失。もと石垣に積み込まれていた。
202	大阪府茨木市佐保字梅原上西氏宅横	風　景										
203	大阪府茨木市佐保字梅原上西氏宅横	板碑（阿弥陀）	45.4	13.6	17.8	12.6	桃山					
204	大阪府茨木市佐保字梅原上西氏宅横	板碑（阿弥陀）	34.9	9.1	15.8	12.0	桃山					
205	大阪府茨木市佐保字梅原	光背石仏（阿弥陀）	*35.3	19.8	23.5	14.1	桃山					光印ではなく、段出印のようである。銘部なし。

石塔・石仏データ一覧〈6〉

No.	住所・所在	名称	総高	高	幅	厚	時代	紀年	西暦	月	日	銘文・備考
	上西氏宅横											
206	大阪府茨木市佐保字正ノ本 庄田氏宅横横	風　景										
207	大阪府茨木市佐保字正ノ本 庄田氏宅横横	五輪塔火輪	16.5		27.0		桃山					火輪。上下面にホゾ孔あり。
208	大阪府茨木市佐保字正ノ本 庄田氏宅横横	五輪塔火輪	14.3		21.8		桃山					火輪。上下面にホゾ孔あり。
209	大阪府茨木市佐保字正ノ本 庄田氏宅横横	五輪塔地輪	19.5		28.5		桃山					上面にホゾ孔あり。
210	大阪府茨木市佐保字正ノ本 庄田氏宅横横	一石五輪塔（火・水）	*17.4		16.5		室町					火水輪部。水輪高9.8、火輪高7.6、水輪径16.5、火輪幅15.7。
211	大阪府茨木市佐保字正ノ本 庄田氏宅横横	板碑（阿弥陀）	*27.5	*12.0	22.5	13.5	桃山					下部欠失。
212	大阪府茨木市佐保字正ノ本 庄田氏宅横横	板碑（阿弥陀）	*44.5	12.0	20.5	9.5	桃山					頂部なし。
213	大阪府茨木市佐保字正ノ本 東浦氏墓敷跡	風　景										
214	大阪府茨木市佐保字正ノ本 東浦氏墓敷跡	五輪塔火輪	18.3		29.4		室町					火輪。上面にホゾ孔あり。
215	大阪府茨木市佐保字王ノ本 東浦氏墓敷跡	板碑（阿弥陀）	46.5	14.0	16.2	12.8	桃山					
216	大阪府茨木市佐保字王ノ本 東浦氏墓敷跡	光背石仏（阿弥陀）	34.5	17.8	18.8	11.5	桃山					
217	大阪府茨木市佐保字正ノ本 東浦氏墓敷跡	風　景										
218	大阪府茨木市佐保字王ノ本 東浦氏墓敷跡	五輪塔火輪	11.0-		21.1		室町					火輪。上下面にホゾ孔あり。
219	大阪府茨木市佐保字王ノ本 東浦氏墓敷跡	五輪塔空風輪	15.4		10.4		桃山					空風輪部。径は風輪部。風輪高6.2、空輪高9.2、風輪径10.4、空輪径10.2。
220	大阪府茨木市佐保字正ノ本 東浦氏墓敷跡	一石五輪塔	42.3		17.0		桃山					【銘文】 □・・・・ 為・・ ・・四月 ・・十九日 ※空輪部欠失。地輪高17.5、水輪高8.0、火輪高11.3、風輪高5.5、地輪幅17.0、水輪径16.5、火輪幅15.9、風輪径12.5。
221	大阪府茨木市佐保字正ノ本 東浦氏墓敷跡	一石五輪塔（空・風輪）	12.9		11.8		桃山					空風輪部。径は風輪部。風輪高5.3、空輪高7.6、風輪径11.8、空輪径10.8。
222	大阪府茨木市佐保字正ノ本 東浦氏墓敷跡	石蠟（阿弥陀立像）	50.0	22.0	29.2	20.0	室町					立像。幅・厚は蠟を計る。
223	大阪府茨木市佐保字正ノ本 東浦氏墓敷跡	板碑（阿弥陀）	50.0	21.5	20.8	13.0	桃山					
224	大阪府茨木市佐保字正ノ本 東浦氏墓敷跡	板碑（二尊像）	48.2	12.4	23.3	12.8	桃山					像高は向って右を計る。
225	大阪府茨木市佐保字正ノ本 東浦氏墓敷跡	光背石仏（阿弥陀）	44.3	24.5	26.8	12.2	桃山					脚込系背。
226	大阪府茨木市佐保字正ノ本 東浦氏墓敷跡	光背石仏（二尊）	38.9	22.0	37.0	13.8	室町					像高は向って右を計る。
227	大阪府茨木市佐保字正ノ本 東浦氏墓敷跡	光背石仏（二尊）	49.0	21.0	34.0	14.0	桃山					像高は向って右を計る。
228	大阪府茨木市佐保字正ノ本 東浦氏墓敷跡	光背石仏（阿弥陀）	38.0	11.6	23.7	9.4	桃山					
229	大阪府茨木市佐保字正ノ本 東浦氏墓敷跡	光背石仏（阿弥陀）	41.8	22.8	27.5	14.1	桃山					石蠟風。
230	大阪府茨木市佐保字正ノ本 東浦氏墓敷跡	花立	*55.2		26.3	21.7						内径12.9、深8.4。
231	大阪府茨木市佐保字正ノ本 東浦氏墓敷跡	手水鉢	*51.0		73.5	67.3						内径23.7、深9.9。
232	大阪府茨木市佐保字正ノ本 上野氏先祖墓	五輪塔空風輪	15.9		11.1		室町					空風輪。径は空輪。
233	大阪府茨木市佐保字正ノ本 上野氏先祖墓	五輪塔空風輪	16.3		11.5		室町					空風輪。径は空輪。
234	大阪府茨木市佐保字正ノ本 上野氏先祖墓	五輪塔火輪	*7.1		16.1		室町					火輪。上面にホゾ孔あり。
235	大阪府茨木市佐保字正ノ本 上野氏先祖墓	五輪塔水輪			28.0		室町					水輪。下面に出ホゾあり。
236	大阪府茨木市佐保字正ノ本 上野氏先祖墓	五輪塔水輪	*19.5		22.9		室町					水輪。下面に出ホゾあり。
237	大阪府茨木市佐保字正ノ本 上野氏先祖墓	五輪塔地輪	*17.5		24.5		室町					地輪。
238	大阪府茨木市佐保字正ノ本 上野氏先祖墓	宝篋印塔塔身	16.5		18.1		室町					塔身。月輪内に金剛界四仏種子を刻む。上面に出ホゾあり。
239	大阪府茨木市佐保字正ノ本 上野氏先祖墓	板碑（阿弥陀）	*28.9	13.0	16.5	9.0	桃山					
240	大阪府茨木市佐保字正ノ本 上野氏先祖墓	拓大残欠	10.6		5.9	7.3	江戸 ～					尾部。地所より移されたもの。
241	大阪府茨木市佐保字禿山 久保家墓所	風景										
242	大阪府茨木市佐保字禿山 久保家墓所	板碑（阿弥陀）	*42.5	16.8	24.4	12.5	室町					
243	大阪府茨木市佐保字梅原	板碑（阿弥陀）	45.8	15.2	23.0	13.2	桃山					
244	大阪府茨木市佐保字梅原	板碑（阿弥陀）	41.0	14.0	21.8	13.2	桃山					
245	大阪府茨木市佐保字梅原	板碑（阿弥陀）	*57.0	16.4	24.2	*7.5	桃山					
246	大阪府茨木市佐保字梅原	板碑（二尊）	49.5	14.8	23.6	17.6	桃山					像高は向って右を計る。
247	大阪府茨木市佐保字梅原	光背石仏（阿弥陀）	*42.5	21.8	26.8	14.2	室町					頂部なし。
248	大阪府茨木市佐保字梅原	光背石仏（阿弥陀）	*35.7	18.4	24.0	*9.0	桃山					
249	大阪府茨木市佐保字梅原 梅原氏宅前	風　景										
250	大阪府茨木市佐保字梅原 梅原氏宅前	五輪塔空風輪	15.4		12.1		室町					空風輪。径は風輪。
251	大阪府茨木市佐保字梅原 梅原氏宅前	五輪塔水輪	24.3		30.2		室町					水輪。上面に布施ちらしき径14.3径4.0のれあり。
252	大阪府茨木市佐保字梅原 梅原氏宅前	五輪塔水輪	20.1		25.9		室町					水輪。上面に出ホゾあり。

石塔・石仏データ一覧〈7〉

No.	住所・所在	名称	総高	高	幅	厚	時代	記年	西暦	月	日	銘文・備考
253	大阪府泉木市佐保字梅原 梅原氏宅前	五輪塔地輪	30.0		38.8		室町					地輪。上面にホゾ孔あり。
254	大阪府泉木市佐保字梅原 梅原氏宅前	板碑（二尊）	39.7	14.5	28.9	13.5	桃山					像高は向って右を許る。
255	大阪府泉木市佐保字梅原 梅原氏宅前	板碑（一尊）	44.8	13.8	17.7	11.0	桃山					
256	大阪府泉木市佐保字梅原 梅原氏宅前	石龕（阿弥陀）	61.9	20.5	30.2	15.5	室町					
257	大阪府泉木市佐保字梅原 梅原氏宅前	石龕（阿弥陀）	54.2	21.7	27.2	21.4	室町					
258	大阪府泉木市佐保字梅原 梅原氏宅前	石龕（阿弥陀）	62.5	19.8	31.8	17.9	室町					
259	大阪府泉木市佐保字梅原 梅原氏宅前	石龕（阿弥陀）	49.2	17.8	21.2	11.3	室町					
260	大阪府泉木市佐保字梅原 梅原氏宅前	光背石仏（阿弥陀）	45.2	26.3	25.0	14.6	室町					
261	大阪府泉木市佐保字梅原 梅原氏宅前	光背石仏（二尊）	37.0	15.0	31.2	15.4	桃山					彫込光背。
262	大阪府泉木市佐保字梅原 梅原氏宅前	光背石仏（阿弥陀）	42.2	14.9	26.8	14.6	桃山					彫込光背。
263	大阪府泉木市佐保字梅原 梅原氏宅前	光背石仏（阿弥陀）	50.2	21.0	28.3	11.4	桃山					彫込光背。
264	大阪府泉木市佐保字梅原 梅原氏宅前	光背石仏（阿弥陀）	41.0	11.0	23.0	8.0	桃山					彫込光背。像高は向って右を許る。
265	大阪府泉木市佐保字梅原 梅原氏宅前	光背石仏（阿弥陀）	41.0	18.5	23.0	11.6	桃山					
266	大阪府泉木市佐保字梅原 梅原氏宅前	光背石仏（阿弥陀）	35.1	14.5	21.0	10.8	桃山					
267	大阪府泉木市佐保字梅原 梅原氏宅前	光背石仏（阿弥陀）	42.5	17.9	24.5	10.7	桃山					
268	大阪府泉木市佐保字梅原 梅原氏宅前	光背石仏（阿弥陀）	40.0	16.5	24.5	12.4	桃山					
269	大阪府泉木市佐保字梅原 梅原氏宅前	光背石仏（阿弥陀）	39.3	21.8	25.5	13.7	桃山					
270	大阪府泉木市佐保字梅原 梅原氏宅前	光背石仏（阿弥陀）	*34.2	15.3	26.0	9.3	桃山					
271	大阪府泉木市佐保字梅原 梅原氏宅前	光背石仏（阿弥陀）	39.1	17.7	22.2	10.7	桃山					石龕風。
272	大阪府泉木市佐保字伏原 星上共同墓地	風景										
273	大阪府泉木市佐保字伏原 星上共同墓地	五輪塔空輪	*9.8		12.8		室町					空輪。
274	大阪府泉木市佐保字伏原 星上共同墓地	五輪塔火輪	16.0		26.7		室町					火輪。上面にホゾ孔あり。
275	大阪府泉木市佐保字伏原 星上共同墓地	五輪塔水輪	36.4		43.8		室町					水輪。下面に出ホゾあり。
276	大阪府泉木市佐保字伏原 星上共同墓地	五輪塔水輪	20.3		29.7		室町					水輪。上面にホゾ孔あり。
277	大阪府泉木市佐保字伏原 星上共同墓地	五輪塔水輪	28.8		39.6		室町					水輪。下面に出ホゾあり。
278	大阪府泉木市佐保字伏原 星上共同墓地	五輪塔水輪	26.8		33.8		室町					水輪。下面に出ホゾあり。
279	大阪府泉木市佐保字伏原 星上共同墓地	一石五輪塔	85.5	13.6	12.1		室町					地輪部に阿弥陀如来坐像を彫込む。 地輪高46.3、水輪高15.0、火輪高12.8、風輪高3.6、空輪高7.8、地輪幅19.2、水輪径18.5、火輪幅19.4、風輪径12.6、空輪径12.1。
280	大阪府泉木市佐保字伏原 星上共同墓地	一石五輪塔（火・水）	17.5		11.4		室町					火水輪間。水輪高8.3、火輪高8.2、水輪径11.4、火輪幅11.0。
281	大阪府泉木市佐保字伏原 星上共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	*34.4	*27.0	26.0	10.8	室町					彫込光背。
282	大阪府泉木市佐保字伏原 星上共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	*27.0	16.9	19.6	11.7	桃山					
283	大阪府泉木市佐保字伏原 星上共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	*27.8	17.5	25.8	12.3	室町					
284	大阪府泉木市佐保字伏原 星上共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	47.0	19.5	21.0	14.4	室町					
285	大阪府泉木市佐保字伏原 星上共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	41.2	18.8	24.2	15.0	室町					
286	大阪府泉木市佐保字伏原 星上共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	43.5	19.2	25.5	13.2	室町					
287	大阪府泉木市佐保字伏原 星上共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	44.0	21.5	23.4	11.5	室町					
288	大阪府泉木市佐保字伏原 星上共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	50.0	19.2	23.5	12.6	室町					
289	大阪府泉木市佐保字伏原 星上共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	*30.3	17.4	25.8	12.3	桃山					彫込光背。
290	大阪府泉木市佐保字伏原 星上共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	43.0	17.7	21.4	13.0	桃山					
291	大阪府泉木市佐保字伏原 星上共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	*26.0	13.5	20.0	13.5	桃山					
292	大阪府泉木市佐保字伏原 星上共同墓地	光背石仏（阿弥陀）	*32.8	19.5	21.5	12.5	桃山					線刻なし。
293	大阪府泉木市佐保字伏原 星上共同墓地	石柱	*78.0		22.5	16.8	江戸～					【銘文】二、/上方に方形の孔あり。
294	大阪府泉木市佐保字伏原 星上共同墓地	方柱状個人墓碑	78.3		24.3	24.0	江戸	安永8	1779	3	6	【銘文】 （正面） 南无阿彌陀佛 （背面） 北岸 （左面） 丁心　安永八亥 三月六日 釋 妙明
295	大阪府泉木市佐保字星上	板碑（阿弥陀）	*37.8	16.4	34.8	22.6	桃山					下部欠失。像高は向って右を許る。

石塔・石仏データ一覧〈8〉

No.	住所・所在	名称	総高	高	幅	厚	時代	紀年	西暦	月	日	銘文・備考
	西田氏宅前											
296	大阪府茨木市佐保字松谷 敷恩寺	風鼓										
297	大阪府茨木市佐保字松谷 敷恩寺	五輪塔空風輪	19.1		13.0		室町					空風輪。下面に出ホゾあり。
298	大阪府茨木市佐保字松谷 敷恩寺	五輪塔火輪	18.2		29.1		室町					火輪。上面にホゾ孔あり。
299	大阪府茨木市佐保字松谷 敷恩寺	五輪塔火輪	14.1		22.8		室町					火輪。上下面にホゾ孔あり。
300	大阪府茨木市佐保字松谷 敷恩寺	五輪塔火輪	12.5		22.5		室町					火輪。上面に出ホゾあり。
301	大阪府茨木市佐保字松谷 敷恩寺	五輪塔火輪	11.1		22.0		室町					火輪。上下面にホゾ孔あり。
302	大阪府茨木市佐保字松谷 敷恩寺	五輪塔火輪	13.6		21.8		室町					火輪。上下面にホゾ孔あり。
303	大阪府茨木市佐保字松谷 敷恩寺	五輪塔火輪	11.9		21.5		室町					火輪。上下面にホゾ孔あり。
304	大阪府茨木市佐保字松谷 敷恩寺	五輪塔火輪	10.9		20.4		室町					火輪。上面に出ホゾあり。
305	大阪府茨木市佐保字松谷 敷恩寺	五輪塔地輪	25.6		35.6		室町					地輪。
306	大阪府茨木市佐保字松谷 敷恩寺	五輪塔地輪	16.3		23.3		室町					地輪。上面にホゾ孔あり。
307	大阪府茨木市佐保字松谷 敷恩寺	一石五輪塔残欠	15.1		20.4		室町					地輪部。上面に出ホゾあり。
308	大阪府茨木市佐保字松谷 敷恩寺	宝篋印塔残欠	26.2		35.1		室町					基礎。四面に格狭間を彫ふむ。
309	大阪府茨木市佐保字松谷 敷恩寺	一石五輪塔	83.4		19.9	19.7	室町					地輪高31.2、水輪高11.4、火輪高11.0、風輪高4.3、空輪高7.1、地輪幅17.1、水輪幅16.2、火輪幅16.3、風輪幅9.9、空輪幅9.7。
310	大阪府茨木市佐保字松谷 敷恩寺	一石五輪塔残欠	*35.8		12.3		室町					空風輪部欠失。地輪高22.1、水輪高6.9、火輪高5.2、地輪幅12.3、水輪幅12.3、火輪幅12.0。
311	大阪府茨木市佐保字松谷 敷恩寺	板碑（阿弥陀）	*29.9	12.5	17.1	8.5	桃山					銘部なし
312	大阪府茨木市佐保字松谷 敷恩寺	光背石仏（阿弥陀）	34.9	17.9	20.6	11.5	桃山					
313	大阪府茨木市佐保字松谷 敷恩寺	光背石仏（阿弥陀）	35.8	16.7	23.1	11.4	桃山					彫込光背。
314	大阪府茨木市佐保字松谷 敷恩寺	手水槽	54.1		94.4	52.8	江戸	嘉永2	1849	6		【銘文】 （正面） 役起人中茂兵衛出 施主人大坂平野町 豊賀生富
315	大阪府茨木市佐保字サナベ 高座神社	石燈篭	329.0				江戸	弘化2	1845			【銘文】 （竿正面） 奉獻燈 （竿背面） 弘化二乙巳乃岡星 嘉平月日 （台石） 氏子中 ※参道入口向って右。
316	大阪府茨木市佐保字サナベ 高座神社	石燈篭	330.0				江戸	弘化2	1845			【銘文】 （竿正面） 奉獻燈 （竿背面） 弘化二乙巳乃岡星 嘉平月日 （台石） 氏子中 ※参道入口向って左。
317	大阪府茨木市佐保字サナベ 高座神社	石燈篭	213.0				江戸	寛政7	1795	4		【銘文】 （竿正面） 御神燈 （竿背面） 寛政七乙卯四月吉日 （台石） 願主 面山 太兵衛 ※鳥居前向って右。
318	大阪府茨木市佐保字サナベ 高座神社	石燈篭	220.0				江戸	天明6	1786	8		【銘文】 （竿正面） 御神燈 （竿背面） 天明六丙午八月之建 （台石） 願主 屋上 石工 吉左衛門 ※鳥居前向って左。
319	大阪府茨木市佐保字サナベ 高座神社	鳥居	389.0				江戸					「宝燈」年中作と云われる。
320	大阪府茨木市佐保字サナベ 高座神社	手水鉢	65.0		82.0	35.0	江戸	宝暦12	1762	1 1		【銘文】 奉献手水鉢 宝暦十二壬午天 十一月吉日
321	大阪府茨木市佐保字サナベ 高座神社	狛犬	145.0	82.0			江戸	慶応元	1865	6		【銘文】 （台石正面） 奉納 氏子中 （台石背面） 慶應元歳 乙丑六月

石塔・石仏データ一覧〈9〉

No.	住所・所在	名称	総高	高	幅	厚	時代	紀年	西暦	月	日	銘文・備考
322	大阪府茨木市佐保字ナナベ 高座神社	狐天	148.0	81.0			江戸	慶応元	1865	6		穂之 奉拝殿前向って右。台石は花崗岩。 【銘文】 （台石正面） 奉納 氏子中 （台石背面） 慶應元歳 乙丑六月 穂之 奉拝殿前向って左。台石は花崗岩。
323	大阪府茨木市佐保字伏原	光背石仏（阿弥陀）	46.5	21.3	24.1	11.6	桃山					小堂内。
324	大阪府茨木市佐保字伏原	光背石仏（阿弥陀）	39.6	21.3	26.5	15.5	桃山					小堂内。
325	大阪府茨木市佐保字神合	五輪塔地輪	15.6		21.7		室町					地輪。上面に出ホゾあり。
326	大阪府茨木市佐保字神合	板碑（二尊）	56.0	13.6	31.7	11.1	桃山					
327	大阪府茨木市佐保字神合	板碑（阿弥陀）	47.2	17.1	21.8	12.2	桃山					
328	大阪府茨木市佐保字神合 下門共宅内	一石五輪塔	*28.0		8.9		室町					総高は水輪から空輪までで、下部は埋没の為に計れず。幅は火輪、水輪高8.0、火輪高8.5、風輪高4.5、空輪高7.6、火輪幅10.1、風輪径6.8、空輪径8.9。
329	大阪府茨木市佐保字神合 下門共宅内	板碑（阿弥陀）	45.8	12.3	18.7	10.4	桃山					
330	大阪府茨木市佐保字神合 下門共宅内	板碑（阿弥陀）	52.2	13.9	16.9	10.3	桃山					膝部なし。
331	大阪府茨木市佐保字神合 下門共宅内	光背石仏（阿弥陀）	51.3	25.4	30.1	15.5	室町					
332	大阪府茨木市佐保字神合 下門共宅内	光背石仏（二尊像）	*25.6	12.1	25.5	*4.0	桃山					上下に二尊を彫込む。像高は下像。
333	大阪府茨木市佐保字神合 下門代宅上	五輪塔火輪	12.5		21.1		室町					火輪。上下面ホゾ孔あり。
334	大阪府茨木市佐保字神合 下門代宅上	五輪塔水輪	21.5		29.4		室町					水輪。下面出ホゾあり。
335	大阪府茨木市佐保字神合 下門代宅上	一石五輪塔	*42.0		14.0		室町					空風輪欠失。幅は火輪部。地輪高25.3、水輪高10.0、火輪高6.7、地輪幅14.0、水輪径14.0、火輪幅13.9。
336	大阪府茨木市佐保字神合 下門代宅上	一石五輪塔	*47.0		12.5		室町					空風輪欠失。幅は火輪部。地輪高29.6、水輪高8.6、火輪高7.8、地輪幅12.4、水輪径12.2、火輪幅12.5。
337	大阪府茨木市佐保字神合 下門代宅上	一石五輪塔	*43.4		11.7		室町					空輪部欠失。径は水輪部。地輪高23.7、水輪高6.8、火輪高6.1、風輪高4.8、地輪幅11.5、水輪径11.7、火輪幅11.0、風輪径8.7。
338	大阪府茨木市佐保字神合 下門代宅上	板碑（阿弥陀）	41.4	12.5	19.0	10.3	桃山					膝部なし。
339	大阪府茨木市佐保字神合 下門代宅上	板碑（阿弥陀）	40.1	11.9	18.6	10.5	桃山					膝部なし。
340	大阪府茨木市佐保字神合 下門代宅上	板碑（阿弥陀）	47.5	11.0	20.0	12.8	桃山					膝部なし。
341	大阪府茨木市佐保字神合 下門代宅上	板碑（阿弥陀）	43.3	7.2	15.8	10.7	桃山					膝部なし。
342	大阪府茨木市佐保字神合 下門代宅上	板碑（阿弥陀）	34.7	9.5	16.2	9.6	桃山					膝部なし。
343	大阪府茨木市佐保字神合 下門代宅上	光背石仏（阿弥陀）	44.0	15.5	23.4	12.1	桃山					
344	大阪府茨木市佐保字神合 下門代宅上	光背石仏（阿弥陀）	38.6	14.0	21.0	8.6	桃山					彫込光背。
345	大阪府茨木市佐保字神合 下門代宅上	光背石仏（阿弥陀）	35.0	13.1	17.5	8.1	桃山					
346	大阪府茨木市佐保字神合	一石五輪塔	66.8		16.1		室町					地輪高38.5、水輪高8.5、火輪高9.3、風輪高4.2、空輪高6.3、地輪幅16.0、水輪径15.5、火輪幅16.1、風輪径8.8、空輪径5.8。
347	大阪府茨木市佐保字神合	板碑（阿弥陀）	35.2	11.8	16.6	12.5	桃山					
348	大阪府茨木市佐保字神合	板碑（阿弥陀）	51.5	14.3	17.4	9.6	桃山					
349	大阪府茨木市佐保字神合	光背石仏（阿弥陀）	32.1	15.5	22.5	11.3	桃山					
350	大阪府茨木市佐保字神合	光背石仏（阿弥陀）	45.1	17.0	21.0	9.1	桃山					石蕨製。
351	大阪府茨木市佐保字神合 神合墓地	五輪塔地輪	25.4		36.6		室町					地輪。上面にホゾ孔あり。
352	大阪府茨木市佐保字神合 神合墓地	五輪塔地輪	25.3	14.3	35.0		室町					地輪。阿弥陀如来坐像を彫込む。。上面にホゾ孔あり。
353	大阪府茨木市佐保字神合 神合墓地	五輪塔地輪			33.4		室町					地輪。上面にホゾ孔あり。高は埋没の為計れず。
354	大阪府茨木市佐保字神合 神合墓地	五輪塔水輪	18.5		27.1		室町					水輪。下面に出ホゾあり。
355	大阪府茨木市佐保字神合 神合墓地	五輪塔水輪	20.8		26.7		室町					水輪。下面に出ホゾあり。
356	大阪府茨木市佐保字神合 神合墓地	五輪塔水輪	19.7		25.5		室町					水輪。下面に出ホゾあり。
357	大阪府茨木市佐保字神合 神合墓地	五輪塔水輪	19.3		25.5		室町					水輪。下面に出ホゾあり。
358	大阪府茨木市佐保字神合 神合墓地	板碑（阿弥陀）	46.5	17.8	21.3	13.2	室町					
359	大阪府茨木市佐保字神合 神合墓地	光背地蔵菩薩立像	86.6	60.8	52.7	19.4	室町					墓地の迫る本尊。立像。
360	大阪府茨木市重生岩阪 藤代神社	石燈篭	254.5				江戸	安政4	1857			【銘文】 （竿正面） 獻燈 （竿右面） 施主 池上政五郎 （竿背面） 安政四丁巳臘月日 奉拝殿前向って右。
361	大阪府茨木市重生岩阪 藤代神社	石燈篭	257.5				江戸	安政4	1857			【銘文】 （竿正面） 獻燈 （竿右面）

石塔・石仏データ一覧〈10〉

No.	住所・所在	名称	総高	高	幅	厚	時代	紀年	西暦	月	日	銘文・備考
												施主 池上政五郎 （竿背面） 安政四丁巳臘月日 巻拝殿前向って左。
362	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社	五輪塔火輪	15.5		25.7		室町					火輪。上下面にホゾ孔あり。
363	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社	五輪塔水輪	18.5		23.0		室町					水輪。上下面に出ホゾあり。
364	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社	板碑（阿弥陀）	*32.5	*11.3	23.5	14.0	桃山					上部欠失。石龕風。
365	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社	板碑（阿弥陀）	*35.0	*18.1	23.2	14.6	桃山					上部と左側欠失。
366	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社	板碑（阿弥陀）	44.0	13.5	19.0	13.5	桃山					
367	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社	板碑（二尊）	43.5	13.5	20.8	11.5	桃山					
368	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社	光背石仏（阿弥陀）	40.0	19.5	26.4	13.0	桃山					脚部なし。
369	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社	手水槽	36.3		93.5	35.0	江戸 ～					【銘文】 奉納 世話人 子供中 有志者 自然石
370	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社	手水槽	37.0	78.5	39.0		江戸 ～					【銘文】 貯中
371	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社	石燈篭	208.0				江戸	正徳3	1713	9		【銘文】 （竿正面） 奉寄進御寶殿 （竿右面） 施主大阪志有子屋 久松 （竿左面） 正徳三癸巳九月十四日 巻拝殿前向って左。
372	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社	石燈篭	205.0				江戸	安政6	1859	9		【銘文】 （竿正面） 奉寄進御寶殿 （竿背面） 安政六己未九月日 （竿左面） 施主池上與右衛門 巻拝殿前向って左。
373	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社	五輪塔空風輪	18.6		13.5		室町					空風輪。径は風輪。
374	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社	五輪塔空風輪	10.4		10.3		桃山					空風輪。径は風輪。
375	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社	五輪塔空風輪	19.5		13.5		室町					空風輪。下面に出ホゾあり。
376	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社	五輪塔空風輪	18.5		12.5		室町					空風輪。径は風輪。
377	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社	五輪塔火輪	16.0		25.0		室町					火輪。上面にホゾ孔あり。
378	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社	五輪塔火輪	19.0		28.0		室町					火輪。上面にホゾ孔あり。
379	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社	五輪塔火輪	17.5		27.2		室町					火輪。上面にホゾ孔あり。
380	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	五輪塔火輪	13.3		21.4		室町					火輪。上面にホゾ孔あり。
381	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	五輪塔水輪	*17.5		31.0		室町					水輪。下面に出ホゾあり。
382	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	五輪塔水輪	*18.5		24.0		室町					水輪。上下面に出ホゾあり。
383	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	五輪塔水輪	18.5		23.5		室町					水輪。上下面に出ホゾあり。
384	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	五輪塔水輪	16.5		23.5		室町					水輪。上下面に出ホゾあり。
385	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	五輪塔水輪	16.0		23.0		室町					水輪。上下面に出ホゾあり。
386	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	五輪塔水輪	16.5		22.5		室町					水輪。上下面に出ホゾあり。
387	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	五輪塔水輪	16.5		21.5		室町					水輪。上下面に出ホゾあり。
388	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	一石五輪塔	*36.0		14.0		室町					空風輪部欠失。地輪高18.7、水輪高9.4、火輪高7.9、地輪幅14.9、水輪径13.6、火輪幅12.9。
389	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	一石五輪塔	33.0		12.2		室町					空風輪部欠失。地輪高18.9、水輪高7.1、火輪高7.9、地輪幅12.2、水輪径10.9、火輪幅11.3。
390	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	板碑頭部	*11.5		22.1	9.3	桃山					屋根部。
391	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	板碑（阿弥陀）	*17.0	*8.0	14.3	8.2	桃山					下部欠失。
392	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	石龕（阿弥陀）	40.3	17.6	22.1	12.0	桃山					
393	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	石龕（阿弥陀）	*16.5	*5.3	22.5	10.3	桃山					下部欠失。
394	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	石龕（阿弥陀）	35.5	17.3	21.3	12.0	桃山					
395	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	石龕（阿弥陀）	*43.3	17.0	23.0	15.5	桃山					脚部なし。
396	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	石龕ヲ（阿弥陀）	31.0	16.3	21.4	14.0	桃山					
397	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	石龕（阿弥陀）	37.9	19.4	21.3	14.3	桃山					
398	大阪府茨木市粟生岩阪	石龕（二尊）	*31.4	13.0	25.5	10.5	桃山					下部欠失。

石塔・石仏データ一覧〈11〉

No.	住所・所在	名称	総高	高	幅	厚	時代	紀年	西暦	月	日	銘文・備考
	稲荷神社下											
399	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	石龕（阿弥陀）	*19.0	*10.5	19.8	10.0	桃山					下部欠失。
400	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	光背石仏（阿弥陀）	*33.0	23.5	26.0	15.3	桃山					彫込光背。
401	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	光背石仏（阿弥陀）	40.1	26.0	26.5	14.0	室町					膝部なし。
402	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	光背石仏（阿弥陀）	39.9	23.2	24.6	12.2	室町					
403	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	光背石仏（阿弥陀）	40.0	19.5	26.5	13.0	桃山					膝部なし。
404	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	光背石仏（阿弥陀）	40.2	19.9	27.5	14.0	桃山					
405	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	光背石仏（阿弥陀）	37.1	19.6	30.0	12.5	桃山					膝部なし。
406	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	光背石仏（阿弥陀）	*23.9	*17.5	24.8	12.4	桃山					下部欠失。
407	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	光背石仏（阿弥陀）	27.0	17.3	21.4	11.5	桃山					
408	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	光背石仏（地蔵立像）	36.3	21.5	28.4	13.8	桃山					石龕風。立像。
409	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	光背石仏（地蔵立像？）	*13.3	*8.5	15.6	7.5	桃山					上部欠失。
410	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	光背石仏（地蔵立像）	*31.5	21.3	27.5	15.3	桃山					彫込光背。立像。
411	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	光背石仏（阿弥陀）	35.0	20.0	28.5	14.5	桃山					彫込光背。
412	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	光背石仏（阿弥陀）	31.9	18.9	26.1	15.5	桃山					
413	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	光背石仏（阿弥陀）	*19.8	*15.4	24.0	13.5	桃山					下部欠失。
414	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	光背石仏（阿弥陀）	36.5	15.0	21.5	12.0	桃山					
415	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	光背石仏？（阿弥陀）	*38.0	19.5	20.4	9.0	桃山					上部欠失。板碑の可能性あり。
416	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	光背石仏（二尊）	*34.8	14.8	35.0	13.3	桃山					膝部なし。
417	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	光背石仏（阿弥陀？）	*15.5	*9.0	17.3	10.1	桃山					上下部欠失。
418	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	光背石仏（阿弥陀）	31.6	18.8	26.0	9.0	桃山					膝部なし。
419	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	板碑（阿弥陀？）	*15.3	*12.0	*17.5	7.5	桃山					上下左側欠失。
420	大阪府茨木市粟生岩阪 稲荷神社下	光背石仏（阿弥陀？）	*19.8	*9.0	*20.0	7.0	桃山					上部欠失。
421	大阪府茨木市粟生岩阪 岩阪墓地	風　景										
422	大阪府茨木市粟生岩阪 岩阪墓地	光背石仏（地蔵立像）	33.5	17.5	18.6	11.5	桃山					立像。
423	大阪府茨木市粟生岩阪 岩阪墓地	光背石仏（阿弥陀）	40.5	16.3	22.5	14.0	桃山					
424	大阪府茨木市粟生岩阪 岩阪墓地	光背石仏（阿弥陀）	49.0	16.1	19.4	13.3	桃山					
425	大阪府茨木市粟生岩阪 岩阪墓地	光背石仏（阿弥陀）	32.5	129.0	24.8	11.0	桃山					彫込光背。膝部なし。
426	大阪府茨木市粟生岩阪 岩阪墓地	前　机	68.0		137.3	54.6	江戸	宝永4	1707	1		【銘文】 （上段石側面） 宝永 四年 正月 上旬
427	大阪府茨木市粟生岩阪 岩阪墓地	自然石六字名号碑	207.5	135.0	70.5	29.0	江戸	弘化4	1847	9		【銘文】 弘化四歳九月上旬 南無阿彌陀佛 釋浄慶 （台石） 地上 改五郎 石建

徳大寺跡

笠面市粟生間谷地区川合

1

2

3

4

4

4

7

7

5

5

6

6

PL. 2

笹面市粟生間谷地区川合（2）

8

8

8

20

9

9

9

10

10

11

11

12

12

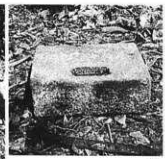
13

13

14

14

14


16

17

15

15

15

21

18

18

19

19

22

22

22

22

23

23

23

クルス山墓地遺跡

茨木市佐保地区馬場

24

24

24

24

25

26

27

28

茨木市佐保地区馬場（2）

29

30

31

32

33

34

35

36

36

37

38

39

40

41

41

41

馬場共同墓地

茨木市佐保地区馬場

42

44

43

45

46

47

48

49

50

51

52

53

54

茨木市佐保地区馬場（4）

55

56

57

58

59

60

61

62

63

64

65

66

67

68

69

70

71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

81

82

83

84

85

86

87

88

89

90

91

92

93

94

95

96

97

98

99

100

教　圓　寺

茨木市佐保地区馬場

101

PL. 10

茨木市佐保地区馬場（7）・免山（1）

101

101

101

101

101

101

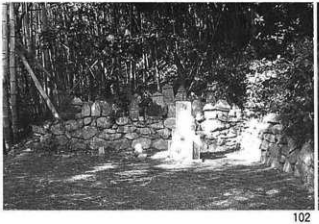
101

101

免山家墓所

茨木市佐保地区免山

103


102

104

104

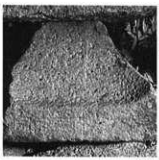
茨木市佐保地区免山(2)

106

107

108

109

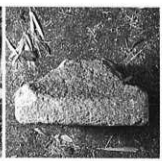

110

111

112

113

114


115

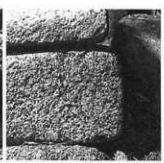
116

117

118

119

119


120

PL. 12

茨木市佐保地区免山（3）

121

122

123

124

125

126

127

128

129

130

131

132

133

134

135

136

茨木市佐保地区免山（4）

137

138

139

140

141

142

143

144

145

146

147

148

149

150

151

152

153

154

155

156

157

158

159

160

161

162

163

164

165

166

167

168

免山地区墓地

茨木市佐保地区免山

169

170

175

171

176

177

178

172

173

172

174

179

PL. 16

茨木市佐保地区免山（7）

180

181

182

183

184

185

185

187

188

189

190

191

192

193

194

195

196

197

佐　保

茨木市佐保地区

198

199

200

201

202

203

204

205

206

PL. 18

茨木市佐保地区庄ノ本（2）

207

208

209

210

213

211

212

214

218

215

216

217

219

220

220

茨木市佐保地区庄ノ本（3）

221

222

222

223

224

225

226

227

228

229

230

231

232

233

234

235

茨木市佐保地区庄ノ本（4）・免山（9）・梅原（2）

236

237

238

238

239

240

241

242

243

244

245

246

247

248

250

茨木市佐保地区梅原（3）

249

251

251

253

254

255

256

257

258

259

260

261

262

263

264

茨木市佐保地区梅原（4）・伏原（1）

265

266

267

268

269

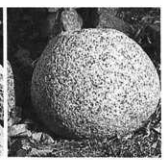
270

271

273

272

274


275

276

277

278

279

茨木市佐保地区伏原（2）

280

281

282

283

284

285

286

287

288

289

290

291

292

293

295

295

294

294

294

教恩寺

茨木市佐保地区松谷

296

297

298

299

300

301

302

303

304

305

306

茨木市佐保地区松谷（2）・サナベ（1）

307

308

309

310

311

312

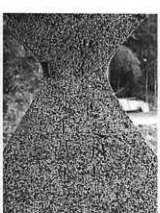
313

314

高座神社

茨木市佐保地区サナベ

315


315

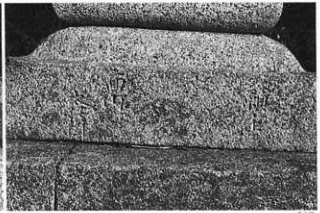
316

316

茨木市佐保地区サナベ（2）

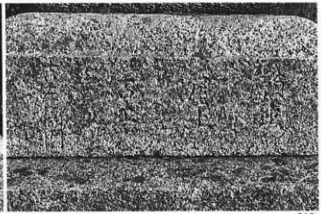
317

317


317

318

318


318

319

320

321

321

322

322

伏　原

茨木市佐保地区

323

324

神　合

茨木市佐保地区

325

326

327

328

329

330

331

332

333

334

335

336

茨木市佐保地区神合（2）

337

338

339

340

341

342

343

344

345

346

347

348

349

350

神合墓地

茨木市佐保地区

351

茨木市佐保地区神合（3）・粟生岩阪地区（1）

352

353

354

355

356

357

358

359

359

藤代神社

茨木市粟生岩阪地区

360

360

360

361

361

361

稲荷神社

茨木市粟生岩阪地区

362

363

364

365

366

367

368

369

370

371

371

371

371

372

372

372

372

稲荷神社下

茨木市粟生岩阪地区

373

374

375

376

377

378

379

380

381

382

383

384

385

386

387

388

389

390

391

392

393

394

395

396

397

398

398

400

401

402

403

404

405

406

407

408

409

410

411

412

413

413

415

416

417

418

419

420

岩阪墓地

茨木市粟生岩阪地区

421

422

423

424

425

426

426

427

427

427

Ⅷ. 美術工芸品調査

北摂丘陵地域の美術工芸品

吉原忠雄

はじめに

北摂丘陵地域の美術工芸品調査は、3地区について行ったので、報告する。なお、諸般の事情により、調査できなかった個所もあることを予めお断りしておく。これらについては、別の機会に譲る。

調査地区および調査個所は次のとおりである。

茨木市	佐保地区	免山	教願寺（真宗大谷派）
		松谷	高座神社
			教恩寺（真宗大谷派）
		馬場	言代神社・教圓寺（真宗大谷派）
	福井地区		新屋坐天照御魂神社・真龍寺（高野山真言宗）
			無量寺（高野山真言宗）・遍照寺（真宗大谷派）
箕面市	粟生間谷		善福寺（高野山真言宗）・法蔵寺（浄土宗知恩院派）
			法泉寺（浄土宗知恩院派）

調査3地区で、寺院9、神社3である。寺院の宗派の内訳は、高野山真言宗、浄土宗知恩院派、真宗大谷派である。

調査分野および調査件数は次のとおりである。（　）内は件数。

彫刻　(34)……仏像　(33)　神像　(1)

絵画　(30)……仏画　(22)　近世画（7）　近代画（1）

工芸品（8）……金工品（7）　木製品（1）

その他（6）

合計78件の調書（種別・名称・員数・制作期・法量・品質・構造・保存状態・伝来・銘文・備考）を作成し、写真撮影（白黒35㎜フィルム）を行った。なお、重要な資料については、35㎜ポジフィルムによる撮影も行った。

以下、各地区別に調査結果を報告して行くが、番号（通番）、名称、員数、品質、制作期、法量（単位は㎝、彫刻は像高、絵画は縦×横、工芸品は原則として縦×横×高）、作者の順で記している。

第1章　佐保地区の調査

第1節　調査概要

調査個所は神社２、寺院３の計５である。

神社は高座神社と言代神社で、『大阪府全志』（以下、『全史』と略す）によると、高座神社は天照皇大神を主神とし、天児屋根命・速素盞為命・健御名方命を祀るが由緒は不明である。

言代神社は八重事代主命を祀る。由緒は不明で、現在の社殿は明治35(1902)年の焼亡の後、翌年に再建されたものである。高座神社には明治38年作の川中島合戦図の絵馬が１面ある。言代神社には日露戦争時のロシアの銃弾と日本の連隊旗が奉納されており、当地が軍人輩出の地であることを示し、珍しい近代資料となっている。

寺院は教恩寺・教圓寺・教願寺で、いずれも真宗大谷派に属し、教行寺末である。今回の調査では、画像の裏書きなどによって、そのことは確認された。

『全志』によると、教恩寺は文明年中(1469～1487)に静圓が再建し、江戸時代の享和元(1801)年に恵眼が伽藍の修繕をした。今回の調査で、本尊は江戸時代以前の作の可能性があることがわかった。そして、真宗祖師画像のセットである七高祖画像、聖徳太子画像、親鸞聖人画像、蓮如上人画像は、もと高槻市碧流寺のものであったことが、裏書きによって分かった。しかし、教恩寺の諸画像が存在しない理由と碧流寺の画像が教恩寺に移動した理由は不明である。

また、同書によると、教圓寺は創立年月が不詳で、文化年中(1804～1818)に法琳が再建したが、本堂・庫裏は大正３年に焼失した。しかし、本尊、諸画像は火中より取り出されたことが今回の調査で確認された。そして、同書によると、教願寺も創立の年月は不明で、明応年中(1492～1501)に僧圓順が中興し、安永３（1774）年に火災で焼失したが、善鏡が再建した。しかし本寺でも本尊・諸画像は火中から救いだされたことが確認された。

第２節　高座神社の調査（茨木市大字佐保〈サナベ〉）

１．川中島合戦図　１面　板面著色　明治38(1905)年　　総縦46.2　横64.1　画面縦36.7　横54.7

絵馬藤

（額面墨書）

奉納／明治廿八乙六月／申年男

（画面墨書）

大阪黒金橋／絵馬藤筆（花押）

大阪黒金橋は、現在の西区阿波座２丁目あたりを立売堀鉄町といい、鉄をくろかねともいったことから鍛冶屋、釘屋の集中したこの地域に架かっていた橋であろう。筆者の絵馬藤については不明。

第３節　言代神社の調査（茨木市大字佐保〈馬場〉）

２．銃弾　10点　鉛製（額入）　明治39(1906)年　　額の法量　縦23.1　横32.2　厚2.5

これも奉納品で、絵馬状に額に入れて奉納している。

（墨書）

明治三十七八年役／紀念／戦利敵之小銃弾／明治三十九年四月十一日納之

明治37(1904)～38(1905)年の日露戦争の戦利品で、出征軍人上野竹次郎が明治39年に奉納したもの。

3．連隊旗図　1面　明治39(1906)年

（裏墨書）

明治参拾九年己之弐拾六歳　前助次郎

4．佐藤忠信図　（印刷）　1面

（裏墨書）

大正弐年六月上旬明治四十参年兵　現役紀年陸軍歩兵一等兵　前金次郎

2、3ともに、この地区が軍人を多く出していた歴史を物語るものである。

第4節　教恩寺の調査（茨木市大字松谷448）

5．阿弥陀如来立像　1軀　木造　江戸時代以前か　69.0

来迎印を結び、衲衣・偏衫・裳を着して立つ阿弥陀像。

ヒノキ材、寄木造、玉眼嵌入、漆箔仕上げ。頭部は耳後ろを通る線で前後二材矧。体幹部の構造は不明。右手前膊にかかる衣の内側部矧ぎつけ。両手首差し込み。両足先を寄せる。両足衲は本体と共木。左足先後補。

『茨木市史』によると、寛永6(1629)年に本尊免許があったとのことであるが、江戸時代以前の像を下付された可能性もある。

台座・光背は台座心棒の墨書によると、寛政11(1799)年、京都不明門松原下ル町の大宮忠兵衛の作。

（台座心棒墨書）

御身貳尺貳寸御尊形／寛政拾一己未十一月廿日□／京不明門松原下ル町大宮

6．七高祖像　1幅　絹本著色　江戸時代・正保2（1645）年　111.5×50.6

七祖、七高祖ともいう。親鸞が真宗相承の祖師とした7人の高僧で、インドの竜樹・天親、中国の曇鸞、道綽・善導日本の源信・源空（法然）をいい、画面の上部から4段に配したもの。

墨書によると、本図はもと摂津国島上郡芥川三島江（高槻市三島江）の碧流寺にあったもので、碧流寺は淀川に面していたため、寛永10(1633)年、洪水で堂宇が流失し、寛文11(1671)年に再建している（『全志』）。本図は堂宇再建に伴うものであろうか。正保2(1645)年時の東本願寺門主は宣如である。

（表具裏墨書貼付）

三朝高祖真影／本願寺釈□如（花押）／正保第弐乙酉木下林鐘念五月書之

／摂津國島上郡芥川三島江／道場碧流寺常住物也

7．聖徳太子像　1幅　絹本著色　江戸時代・正保2(1645)年　111.1×40.5

親鸞は聖徳太子を「和国の教主」として讃仰している。この姿は太子が16才の時、父用明天皇の病気平癒を、香炉を執って祈ったとされるところである。この画像は七高祖画像とともに本山から下付されたものである。

（表具裏墨書貼付）

上宮太子尊影／本願寺釈□如（花押）／正保貳□□□□□廿二日／摂州嶌上郡芥川

／三嶋江□道場碧流寺／常住也

8．真宗僧像　1幅　絹本著色　江戸時代　90.5×36.3

9．親鸞聖人像　1幅　絹本著色　江戸時代・延宝2(1673)年　72.0×49.1

浄土真宗の開祖親鸞の像。本図には別置きの裏書きがある。

（別置裏書）

親鸞聖人御影／大谷本願寺釈常如（花押）／延宝二歳甲寅八月下旬書之

／教行寺下摂劔島下郡／松谷惣道場教恩寺常／住物也

教恩寺が真宗大谷派五箇寺（現在は9箇寺）のひとつ、大和北葛城郡広陵町教行寺の下にあったことがわかる。

10. 蓮如上人像　1幅　絹本著色　江戸時代　98.0×40.9

本願寺中興の祖、八世蓮如の像。印にある「自庵」とは、住職が任意に後住を定めうる住職もちの寺院のこと。

（表具裏墨書）

蓮如上人真影／釈一如□書／教行寺下／摂津國左保村総道場

／願主教恩寺／「自庵免許」（印）

11. 従如上人像　1幅　絹本著色　江戸時代・明和3（1766）年　97.7×40.7

真宗大谷派第18世従如［延享元(1744)～宝暦10(1760)年在位］の像

（表具裏墨書）

清浄光院真影／本願寺釈乗如／明和三丙戌年三月朔日

／教行寺掛所摂州島下郡佐保村松谷教行寺什物也／願主乗□／「自庵免許」（印）

（箱蓋表墨書）

職掌清浄院御影／明和三年二月廿日／教行寺掛所粟津大學

／摂州佐保村松谷教恩寺石井隼人

12. 乗如上人像　1幅　絹本著色　江戸時代・寛政10(1798)年　110.7×51.1

真宗大谷派第19世乗如［延享元(1744)～寛政4(1792)年］の画像。第20世達如の裏書である。

（表具裏墨書）

歓喜光院真影／本願寺釈達如／寛政十年戊午十月三日／教行寺掛所摂州

／佐保村松谷／教恩寺常住物也／願主乗了「自庵免許」（印）

13. 西行富士川図　1幅　絹本墨画　江戸時代　33.4×55.8

14. 山水図　1幅　絹本墨画　江戸時代　92.4×32.1

15. 前卓　1基　木造

16. 光寿消息　1幅　紙本墨書　江戸時代　14.3×45.4

第5節　教圓寺の調査（茨木市大字佐保536）

17. 阿弥陀如来立像　1軀　木造　江戸時代　63.6

来迎印を結び、衲衣、偏衫、裳、袈裟を着して立つ阿弥陀像。玉眼嵌入、肉身金泥、衣部漆箔仕上げ。右手小指第一関節から先後補。足枘に「宗真」の銘があるとの住職の話。

18. 七高祖像　1幅　絹本著色　江戸時代　108.8×50.0

（表具裏墨書）

釈一如／摂津國馬場村／総道場教圓寺物也／「自庵免許」（印）

19. 聖徳太子像　1幅　絹本著色　江戸時代　　109.0×50.4

（表具裏墨書）

釈一如／摂津國馬場村／総道場教圓寺物也

20. 親鸞聖人像　1幅　絹本著色　江戸時代　　約60.0×45.0

21. 蓮如上人像　1幅　絹本著色　江戸時代　　97.7×40.7

（表具裏墨書）

蓮如上人尊影／釈一如／教行寺下摂津國馬場村総道場

／教圓寺常住物也／「自庵免許」（印）

22. 喚鐘　1口　鋳造　江戸時代・安永3（1774）年　　高約56.0　内径26.6　外径33.5　和田信濃

（池の間陰刻）

摂劭嶋下郡五ケ庄／佐保村馬場／施主何某／同行／安永三甲午年／

京／三条釜座／和田信濃

銘によると、京都三条釜座（中世以来の鋳物業者の同業組合）の和田信濃の作。

第6節　教願寺の調査（茨木市佐保1214）

23. 阿弥陀如来立像　1軀　木造　江戸時代　　54.7　宗重作

来迎印を結び、衲衣・偏衫・裳を着して立つ阿弥陀像。ヒノキ材、寄木造、玉眼嵌入、肉身金泥、衣部漆箔仕上げ。頭部は耳後ろを通る線で前後二材矧。体幹部は両足かかとを通る線で前後二材矧。両手衣の内側部矧ぎつけ。

（右足衲外側焼印）

宗重

（左足衲外側焼印）

御仏師

（右足衲外側焼印）

不明

宗重は東本願寺のお抱え仏師と思われる。ちなみに、西本願寺には代々渡辺康運を名乗るお抱え仏師がいたことが分かっている。

24. 弥陀如来立像　1軀　木造　江戸時代　　59.5

25. 如来立像　1軀　木造　江戸時代　　22.8

26. 七高祖像　1幅　絹本著色　江戸時代　　108.5×50.7

（表具裏墨書貼付）

釈□□□／教行寺下摂劭嶋下郡佐保／面山村□□教願寺□／「自庵免許」（印）

27. 聖徳太子像　1幅　絹本著色　江戸時代　　108.5×50.7

表具裏墨書貼付は26に同じ。

28. 蓮如上人像　1幅　絹本著色　江戸時代　　95.2×40.7

29. 六字名号　1幅　絹本墨画　室町時代　　62.1×27.6

（表具裏墨書貼付）

釈□如（印）□□／教行寺下摂劦嶋下郡佐保／面山村惣道場教願寺住物也
／「自庵免許」（印）

30. 喚鐘　1口　銅造　江戸時代・文化7(1810)年　　高46.0　内径23.7　外径30.4

（池の間陽鋳）

南無阿弥陀仏／摂津嶋下郡佐保面山村教願寺／常什物／施主同村／迎氏秀

（池の間陰刻）

文化七年庚午年／七月吉日

第2章　福井地区の調査

第1節　調査概要

調査個所は神社1、寺院3の計4である。

神社は新屋坐天照御魂神社で、『全志』によると、同社は式内社で、天照大神・天照国照彦明命を祀る。『大阪府史蹟名勝天然記念物』には天正12(1584)年の棟札に、中川清秀の長子藤兵衛（秀政）のために、その母が社殿を造営した、とある。以後、修繕などで中川氏と深い関係を持ってきた。今回、貞享3(1686)年銘の境内図、拝殿の三十六歌仙扁額、三番叟扁額を調査できた。これらは当社の近世史料として貴重と思われる。

寺院は無量寺・遍照寺・真龍寺で、無量寺は『全志』によると、慶長年間(1596～1615)、道閑の開創で、真龍寺末であった。本尊の弥勒菩薩はこの頃の作かと思われる。遍照寺は『全志』によると、天文年中(1532～1555)の創立、文禄年中(1592～1596)、知心の再建である。本尊の阿弥陀如来立像は寛文2(1662)年、東本願寺の仏師樋口長門の作とわかった。これより下って、七高祖画像、聖徳太子画像は宝暦2(1752)年に下付されたこともわかった。

真龍寺は『全志』によると、役行者が住み、行基が開創し、弘仁13(822)年、空海の高弟真如法親王が堂宇・僧坊21宇を建立したが、応仁の乱で焼失、寺領も織田信長に没収され、近くの西の坊から現在地に移転した。今回の調査で、平安時代の可能性のある不動明王坐像、南北朝～室町初期の真言八祖画像6幅、宝暦5(1755)年の大坂仏師作の四天王立像、当地の鋳物師谷山長右衛門の宝暦2(1752)年作で、高槻藩士の名が見られる喚鐘などが発掘された。

第2節　新屋坐天照御魂神社の調査（茨木市西福井3－36－1）

31. 境内図　1幅　紙本著色　江戸時代・貞享3(1686)年　　69.0×70.9

（画中墨書）

永井伊賀守殿永井遠江守殿入相知行所摂州嶋下郡福井村／氏神牛頭天王社境内之絵圖

貞享三丙寅年三月十八日

神主／庄田庄助（印）社僧正法寺看坊／教□（印）永井伊賀守殿知行所庄や

／五郎左衛門（印）／年寄／□兵衛（印）／永井遠江守殿知行所庄や／喜兵衛（印）

／同／半兵衛（印）／年寄／作左衛門（印）

32. 三十六歌仙図扁額　36面　板絵著色　江戸時代　　額56.6×41.4　画面46.5×31.5

拝殿の鴨居の上にかけられている、男女・僧俗36人の歌仙の絵である。ヒノキの板に胡粉を塗り、その上から彩色・描き起こしている。36面が完存しており、画家の問題等、興味深い。

33. 三番叟図　2面　板絵著色　江戸時代・承応4(1655)年

三番叟は祝賀・追悼等の能の催しの初めに演じられる。白色尉が翁の舞を演じ、黒色尉が鈴の舞を舞う。本図はこれらを二面に描いたもので、堅実な筆致を見せる。墨書によると、平野屋五兵衛の奉納品。

大坂今橋の両替商平野屋五兵衛は、同じ両替商の天王寺屋五兵衛と現在の大阪市中央区今橋一丁目と八百屋町筋に居宅を向かい合っていたため、「天五に平五、十兵衛横町」と呼ばれた。平野屋は天王寺屋、鴻池と並ぶ両替商で、初代五兵衛は正徳5(1715)年に没している。

平野屋五兵衛の開業は寛永13(1636)年とも、元禄5(1692)年ともいわれ、また、明暦2(1656)年開業の鴻池屋よりも古いとする見解もある（作道洋太郎「平野屋」『国史大辞典11』）。

この三番叟図は初代五兵衛の奉納したものと考えられるが、なお検討を要する。その奉納の理由は、先祖の弥左衛門俊政が摂津福井村（茨木市福井）で農業に従事していたためであろうか。

（その1　表面墨書）

奉掛御寶前

（その2　表面墨書）

大坂今橋平埜屋／五兵衛／承応二二暦乙未十一月吉日

第3節　遍照寺の調査（茨木市東福井2－8－3）

34. 阿弥陀如来立像　1軀　木造　江戸時代・寛文2(1662)年　　70.2　樋口長門

来迎印を結び、衲衣、偏衫、裳、袈裟を着して立つ阿弥陀像。

材不明。寄木造、玉眼嵌入、肉身金泥、衣部漆箔。頭部の体部への接合は差し首と思われる。両手を差込み、両足先矧付け、像底を少し刳り上げ黒漆塗りとし、周囲に金箔を置く。右足上面に鼠害がある。

（右足衲外側墨書）

東御寺／仏師／長門

（台座内部墨書）

寛文二年壬寅七月六日／東御寺内仏師／樋口長門／御使／高木半兵衛様

銘により、本像は寛文2(1662)年、東本願寺内の仏師樋口長門の作。そして取り次いだのは高木半兵衛とわかる。樋口長門は教願寺本尊阿弥陀如来立像の作者「宗重」、教願寺の「宗真」と同じ東本願寺関係の仏師で、西本願寺の仏師が渡辺康雲銘を代々継承したのとは少し異なるようだ。

35. 七高祖像　1幅　絹本著色　江戸時代・宝暦2(1752)年　　108.6×50.2

（表具裏墨書）

三朝高祖真影／本願寺釈従如／宝暦二壬申歳三月十九日

／教行寺下摂嵜嶋下郡福井村／総道場遍照寺

36. 聖徳太子像　1幅　絹本著色　江戸時代・宝暦2(1752)年　　109.0×50.3

（表具裏墨書）

上宮皇真影／本願寺釈従如／宝暦二壬申歳三月十九日
／教行寺下摂嵜嶋下郡福井村／総道場遍照寺／「自庵免許」（印）

37. 親鸞聖人像　1幅　絹本著色　江戸時代　65.3×48.0

38. 蓮如上人像　1幅　絹本著色　江戸時代　97.3×41.8

39. 六字名号　1幅　絹本墨画　室町時代　62.1×27.6

第4節　無量寺の調査（茨木市3－24－11）

40. 弥勒菩薩坐像　1軀　木造　桃山時代か　56.2

毛筋を刻んだ高髻を結い、透かし彫りの冠を着ける。襟を立てて衲衣を着し、頭に五輪塔をのせて定印を結び、右足を前にして結跏趺坐する。鬢髪一条が耳を渡る。厨子内に安置される。

ヒノキ材、寄木造，玉眼嵌入、肉身金泥（現在茶色）、衣部古色。頭部は一材製で、玉眼のみ面部を割って嵌入したのであろう。体幹部材は前後矧両腰脇、膝前横一材、裳先を寄せる。

細身の整った姿と、衣文であるが、全体にやや緊張感が少なくなっている。桃山頃の作であろうか。

（厨子右扉陰刻）

宝暦十三癸未年／釈尼妙薫／九月廿九日

厨子右扉の陰刻銘は、宝暦13(1763)年に厨子を寄付された時のもの。

41. 阿弥陀如来坐像　1軀　木造　江戸時代か　24.5

いわゆる宝冠の阿弥陀像である。玉眼嵌入、肉身金泥、衣部漆箔。

42. 地蔵菩薩立像　1軀　木造　江戸時代　36.0

彫眼、肉身金泥、衣部漆箔。

43. 不動明王および二童子立像　3軀　木造　江戸時代　（不動）42.5　（矜羯羅）20.0（制吒迦）19.7

ヒノキ材か、玉眼嵌入、古色、構造不明。

44. 弘法大師坐像　1軀　木造　江戸時代　43.2

一般的な弘法大師像。

寄木造、玉眼嵌入、彩色、底板は少し刳り上げて布漆貼り。

45. 鑿子　1口　鋼造　江戸時代・文久2(1862)年　高24.7　外径33.5　内径39.8

（外側面上部陰刻銘）

旹文久二壬戌天七月吉良日　摂州嶌下郡福井村無量寺什物法印密應代
施主同村河原市兵衛奉納之

第5節　真龍寺の調査（茨木市東福井2－24－11）

46. 真言八祖像　6幅　絹本著色　南北朝～室町初期　各162.7×137.6

真言八祖とは、インド・中国の密教祖師7人と日本の弘法大師空海をあわせた8人である。画像の原本は京都市東寺本の真言七祖像で、龍猛、龍智は弘仁12(821)年に日本で描かれ、他は空海が中国の恵果から付与されたもので、唐の永貞元(805)年、宮廷画家李真等の筆になる。いずれも床几に坐し、恵

果には侍立の童子が付く。画面上部には飛白体で祖師の梵号と漢名（中国人の一行、恵果は漢名のみ）を大書し、下方には祖師の略伝を記す。東寺本にのちに空海を加えて真言八祖となった。

真龍寺本は現在6幅で、金剛智と一行の幅を欠く。各像の姿態、床几の方向、飛白体で梵号、漢名を表すところは東寺本に忠実であるが、略伝を欠き、部分的に異なる描写が見られるところから、直模ではなく、転写本と思われる

制作期については、やや謹直な描線は鎌倉的であるが、表情などは緊張感が少なく、全体に弱い描写であるところから、南北朝から室町初期と思われる。この種真言八祖像で飛白体まで東寺本に忠実な作品はあまり多くないと思われる。

これらを納めた箱と各軸にはほぼ同内容の墨書があり、これらから、八祖大師画像は寛延元(1748)年に什物として真龍寺で修理し、その箱は明和6(1769)年に同寺の法印浄信が製作したことがわかる。

なお、本報告書には掲載してはいないが、表具裏に他所からの移入の意味の墨書が認められる幅がある。また、金剛智の幅は民間にあることを確認している。

（箱〈その1〉蓋表墨書）

八祖大師弐箱之内左方龍猛菩薩善無畏三蔵金剛智三蔵恵果和尚麒麟山真龍寺什物

（箱〈その1〉身部地付墨書）

于時八祖大師明和六己丑歳三月吉祥日摂劦嶌下郡福井村現住法印浄信造之

（龍猛像墨書外題）

龍猛菩薩影摂劦真龍寺什物依令破損□當寺□□□寛延元戊辰十一月上旬

（箱〈その2〉蓋表墨書）

八祖大師弐箱之内右方龍智菩薩不空三蔵一行阿闍梨弘法大師

麒麟山真龍寺什物

（箱〈その2〉身部側板墨書）

于時明和六己丑歳三月吉祥日摂劦嶌下郡福井村現住法印浄信造之

47. 不動明王坐像　1軀　木造　平安時代　57.4

頭頂に蓮華を載せて天冠台から上の髪部は平滑にし、以下は密なまばら彫りとする。側髪はわらび状の炎髪を各2表す。弁髪はよじりながら肩前に垂れるが、肩から先は平滑にする。天冠台正面に八弁花形飾りとし、天冠台は列弁帯のみとする。耳朶は貫通していない。額に水波相を表し、眉根を寄せる。瞋目とし、上前歯で下唇を噛み、口の両端の上方から牙を出す。条帛・裳を着け、右手を屈臂して剣を構え、左手掌を上にして索を執り、左足を前にして結跏趺坐する。腕釧・臂釧を付ける。

ヒノキ材、彫眼、古色、一木造か。

頭頂の蓮華は別材製で、竹釘でさす。両肩先で矧ぐ。右臂、手首で矧ぐ。左臂少し前方で矧ぐ。底板をはる。裳先を寄せる。打診では、頭部に内刳りはないようである。体部にはあるもよう。

右肩先、左耳郭、右耳朶、裳先、底板、持物、台座、光背および条帛・裳の草花文および切金は後補。天冠台から下の髪部、面部に手を加え、三道および左足裏の身体に近い部分の半分以上を削平。

頭頂に蓮華を載せ、正面して上からの歯・牙で下唇を噛み、左肩から弁髪を垂らす形は、いわゆる「弘法大師様」不動である。本像の場合、冠を着けるところは永祚元(989)年の京都市遍照寺像にもあり、平滑な髪部の例は10世紀の醍醐寺像にも見られる。しかし、これらの像に比べて決して優れているものではない。天冠台とその下方の髪部の境の表現が明確に区分されていない点、本来天冠台の正面に

表すべき花飾りを下方に表している点、弁髪の始まりが不明な点など不自然な部分がある。衣文をまったく表さないところなども多くの例と異なる。今はこれらを平安時代11世紀頃の地方作、しかも正統の仏師の作でないためと見ておく。今後の検討課題である。ところで、わらび状の髪の表現であるが，他に例はなく、その意味は不明である。

48. 大日如来坐像　1軀　木造　桃山～江戸初期　　53.7

厨子内に安置された金剛界の大日如来像。

ヒメコマツ材か。寄木造、玉眼嵌入、全身漆箔。

49. 行基菩薩坐像　1軀　木造　江戸時代　　52.6

奈良時代の高僧行基(668～749)は、現在の堺市生まれ。畿内を中心にいわゆる四十九院を建立し、池、道を作り、橋を架け、行き倒れの人を救済する布施屋を設けるなど、政府の弾圧に屈することなく民衆のために多くの事業を行った。のちには聖武天皇により大仏建立のためか、日本で初めての大僧正に抜擢されたが、東大寺大仏の開眼供養の3年前に没した。鎌倉時代以後、行基菩薩信仰が隆盛となり、多くの縁起絵巻、肖像彫刻、肖像画が制作され、民俗行事も多く残っている。

行基は文殊菩薩の化身であるため、左手に如意、右手に数珠を帙る。しかし、真龍寺像は左右の持物を逆にしている。画像では鎌倉末～南北朝の堺市博物館本が唯一の例である。また頭巾をかぶるところは珍しいが、これについては例がない。例外が目立つのは、本来，この像が行基像であったかどうかという疑問を生じさせる。

寄木造、玉眼嵌入、彩色仕上げ。

（床几裏貼付文書）

覚／一行基様／華足大壱具小弐具／〆／三月六日真龍寺

50. 地蔵菩薩半跏像　1軀　木造　江戸時代　　27.1

岩座上の蓮台に左足を踏み下げて坐す、いわゆる子安地蔵。右手先亡失。

寄木造、玉眼嵌入、肉身は黄土彩、衣部も彩色仕上げ。

51. 釈迦如来坐像　1軀　木造　桃山時代～江戸時代初期　　53.3

当寺の本尊。内衣を着け、衲衣を通肩にして定印を結び、結跏趺坐する釈迦像。面長で厳しい表情と複雑で写実的な衣文表現から、正統の仏師の作と思われる。

構造不明。玉眼嵌入、全身漆箔仕上げ。

52. 四天王立像　4軀　木造　江戸時代・宝暦5(1755)年　　平岡五郎兵衛

（持国）84.8　（増長）82.5　（広目）83.8　（多聞）82.7

本尊厨子外の周囲に配された四天王像。四天王像は様々な形式があり、本像と同様の例は見当たらないが、近い例として滋賀県善水寺像などがあげられようか。正面して勁勢を感じさせないところは平安後期的であるが、下半身を重くしたところは10世紀的で、古像に倣っての作と思われる。

寄木造、玉眼、古色仕上げ、盛上げ文様、さらに金泥文様を施す。岩座は彩色、光背火炎は彩色・金箔。

銘文は以下の通り。

（広目天像岩座内部天板墨書）

寶暦五乙亥九月朔日／真龍寺現住浄信／建立之／心斎橋淡路町／大仏師

／平岡五郎兵衛作

（同光背支柱下端表墨書）

こ

（同光背支柱下端裏墨書）

廣

他の三天像の岩座内部天板墨書も広目天像の天板と同文。これによると、これらの像は宝暦5（1575）年、本寺浄信のときの造立で、作者は大坂心斎橋淡路町の仏師、平岡五郎兵衛である。作者の平岡五郎兵衛については不明。

53．観音菩薩立像　1軀　江戸時代か　34.3

左手に蓮華を持つ。

マツ材か。一木造、彫眼、古色。

54．弘法大師坐像　1軀　江戸時代　73.2

右手に五鈷杵、左手に数珠を持つ通例の像。

寄木造、玉眼、差し首、彩色せず。

55．鑿子　銅造　江戸時代・天保10(1839)年　高さ28.5　外径36.3　内径33.1

（側面上部陰刻）

天保十年／三月吉日／摂州／嶋下郡／福井／麒麟山／什物／法印宥快／求之

56．鰐口　銅造　1口　江戸時代・宝暦2（1752)年　厚13.3　最大幅40.6　直径36.8

（表面陰刻）

奉掛大聖歓喜天御神前／宝暦二壬申五月吉日麒麟山真龍寺

（裏面陰刻）

施主／高槻／牧氏／西川氏／和田氏／生田氏／田中氏／佐野氏／福井／杉本氏

高槻藩士と見られる6氏と福井村の杉本氏の施入である。

57．喚鐘　1口　江戸時代・明和9（1772)年　高56.8　外径33.0　内径26.8　谷山長右衛門

（表面陰刻）

咨月亮光信女／施主室氏／得誉忍清信女／施主神田氏／于時明和九壬辰年

／四月二十九日／施主大坂志方屋市兵衛母／幡慶屋平兵衛／福井邑／麒麟山真龍寺

／現住法印浄信謹白／冶工／谷山長右衛門

この喚鐘は、明和9（1772)年に福井村の鋳物師谷山長右衛門によって鋳造されたもので、地元の産業資料として意義深い。

58．牛頭天王及び星供養尊立像　10軀　木造　（牛頭)34.8　（星供養尊)各10.5

（牛頭）桃山頃か　（星供養尊）江戸時代・天保4（1833)年

牛頭天王は牛の頭を載せ、天冠台を着け、炎髪とする。三眼で、口の両端から上向きの牙を出す。

条帛・裳を着し、胸飾を付け、両手を屈して右手に杖、左手に羂索を持ち、腰には虎皮を着け、沓を履いて岩座上に立つ。

星供養尊は、両手に持物を捧げて、円光背を負い、岩座上に直立する天部形、明王形である。

牛頭天王、星供養尊とも一木造の彩色像。星供養尊台座の地付部に天保4（1833)年の墨書がある。

第３章　粟生間谷地区の調査

第１節　調査概要

寺院は善福寺、法蔵寺、法泉寺である。善福寺は『全志』によると、天平年間(729～749)、勝尾寺を開いた善仲の開創と伝え、宝暦年間(1751～1764)、俊然の中興である。密教寺院らしい像が安置されているが、罹災でもしたのであろうか、平安末期～鎌倉初期の阿弥陀如来坐像が１体だけで、江戸時代の作品がほとんどである。そのなかでも不動明王坐像は隣市亀岡市の羅金屋惣兵衛の寄進で、同市との交流を示すもので興味深い。法蔵寺は古記によると、寛文年中(1661～1673)、方誉上人の開基である。本尊の阿弥陀如来立像の頭部は鎌倉初期頃と思われ、古像を改修して迎えたのであろう。

法泉寺は『全志』によると、建保元(1213)年の創建と伝え、寛永５(1628)年、住職湛誉の修復である。本尊の阿弥陀如来坐像は一木造かと思われ、平安時代の古像を全体に大きく改変した可能性がある。法然・善導両立像は中興念誉の一周忌に、地元の岸本氏が造立したものである。当寺本来のものではないが、脇壇に安置された地蔵・観音半跏像はその中にそれぞれ庄屋とその妻を安置しており、村人たちが長く隠して供養しつづけた口伝があり、篤い信仰を伝える希有の例として貴重である。

第２節　善福寺の調査（箕面市粟生間谷西５－１－１）

59．十一面観音立像（本尊・厨子入）　１軀　木造　江戸時代　48.2

頭上に11面を持ち左手に蓮華、右手に数珠を持ち左足を遊ばせて立つ。近年、全体に修理を施したために構造の詳細は不明。肉身金泥、衣部漆箔。右手の親指を前にして曲げているところから、ここに錫杖を持っていた、いわゆる長谷寺式の観音であったと思われる。

60．歓喜天立像（厨子入）　２軀　銅造　江戸時代　各12.7／12.6

頭頂から足枘まで一鋳製。これを別鋳の台座に鉄釘一本で留める。円筒形木製漆塗の厨子（高101.0）に安置。厨子扉内側壁面に各一人ずつ、雲に乗る童子四人の彩色画がある。

61．阿弥陀如来立像（厨子入）　１軀　木造　江戸前期　43.3

来迎印を結ぶ、一般的な阿弥陀如来像。

寄木造、玉眼嵌入、肉身金泥、衣部漆箔。

やや可愛らしい表情と入念な作で、江戸時代を溯る可能性がある。

62．阿弥陀如来坐像　１軀　木造　平安末期～鎌倉初期　42.0

衲衣を偏袒右肩に着し、定印を結び、右足を前に結跏趺坐する阿弥陀像。

ヒノキ材、寄木造、彫眼。頭部は耳前を通る線で前後二材矧。肉髻後部に一材（後補）を足す。頭部は体部に差し首とする。体部は両肩中央辺りを通る線で前後二材矧。両肩先に各一材を寄せる。膝前に横一材（後補）を寄せる。右臂と右手首で矧ぐ。両手先一材製。左手首を袖口に差し込む。左前膊衣部を矧ぐ。右肩内部の差し首固定用の小材は新補。裳先亡失。頭部の群青彩と全身の緑鐘彩は後補。頭部に彫り直しがあると思われる。

基本的に、撫で肩、抑揚の少ない肉身、浅い彫りの衣文は平安後期的であるが、穏やかな表情にやや鋭さが見られるところから、制作は鎌倉初期かと思われる。やや改変のあるのが惜しまれる。

63. 不動明王立像（厨子入）　1軀　木造　江戸時代・享保17(1732)年　46.8

頭頂に蓮華、前頭部に花飾、巻髪、水波相、右牙は上を、左牙は下を向く。この形式は平安時代の玄朝様であるが、両目は正面を見ており、形式の崩れが見られる。

ヒノキ材、寄木造、玉眼、全身古色。構造の詳細は不明。両足先矧ぎ付け。両足枘は差し込み。

（台座框座内部墨書）

丹波州桑田郡亀山本町雁金屋願主惣兵衛　享保十七年六月吉日

銘によると、本像は丹波州桑田郡亀山本町（京都府亀岡市本町）の雁金屋惣兵衛が願主となって享保17(1732)年に制作したもの。この栗生間谷地区は亀岡市に接していることもあり、人的、物質的、文化的交流の跡がよく見られるが、本例もその一つである。表現に形式化が著しい。

64. 弘法大師坐像（厨子入）　1軀　木造　江戸時代　39.6

右手に五鈷杵、左手に数珠をもって坐す弘法大師の一般的な像。

寄木造、玉眼嵌入。近年彩色を新しくした。頭部は両耳を通る線で前後矧とし、体部に差し首とする。体幹部も前後二材矧としてこれに両肩先材を寄せる。その外側に各一材、膝前横一材に裳先を矧ぐ。底板を張り、矧目は布漆貼とする。底面に滑り止めようの枘穴を設ける。

65. 役行者倚像　1軀　木造　江戸時代　89.2

66. 賓頭盧尊者坐像　1軀　木造　江戸時代　61.3

67. 十二天図屏風　6曲1双（12面）　紙本著色　江戸時代

68. 仏涅槃図　1幅　絹本著色　江戸時代　縦110.0　横81.5

第3節　法蔵寺の調査（箕面市栗生間谷6－13－1）

69. 阿弥陀如来立像（本尊）　1軀　木造　鎌倉時代　96.6

来迎印を結び、衲衣・偏衫・裳を着して立つ。

ヒノキ材。頭部は両耳を通る線で前後矧。前頭部一材、後頭部二材。体部の構造は不明。ただし、右手前膊下半部と手先を矧ぎつけた後、袖口内側上部材とニカワ接合。右袖外側部一材、左手先は袖口部に差し込む。左袖内側部一材製。

面部は黒漆が剝落し、頭部に虫損が著しいが、頭部のみ鎌倉初期の制作で、体部は室町時代頃に補作されたのであろう。そして再び江戸時代にも手を加えたようである。

70. 観音菩薩立像　1軀　木造　江戸時代　52.2

勢至菩薩立像　1軀　木造　江戸時代　53.0

69に付属して来迎の様を表している。

両像とも、材質不明。肉身金泥、衣部漆箔仕上げ。足枘は別材差し込み。構造の詳細は不明。勢至は合掌する一般的な姿であるが、観音は腰をかがめて左手に蓮台を捧げて右手をこれにかざす、珍しい形式を示す。往生者を迎えるために急いでいるのであろう。両脇侍とも風を受けて前の衣は乱れ、後ろの衣は後方に流れ、裳先は舞い上がって足首を見せている。これらの蓮台では、両像が外側の足を蓮肉から半分踏み出したために、その部分に力を入れすぎたのであろう、蓮肉がへこんだ表現となっている。

来迎の有様が、まるで絵画を彫刻化したようなユニークな表現である。

71. 善導大師坐像　1軀　木造　江戸時代　35.0

法然上人坐像　1軀　木造　江戸時代　33.9

浄土宗寺院の本尊阿弥陀三尊像の左右に安置される宗祖法然と、中国浄土教の大成者善導の像。法然は墨染めの衣を着て数珠をつまぐり、善導は下半身を金色にして合掌する。両像とも寄木造、玉眼嵌入、彩色仕上げ。襟にあわせて差し首とする。

法然像は趺坐する通例像だが、善導像は右膝を立てており、あまり前例がない。

72. 喚鐘　1口　銅造　江戸時代・享保14(1729)年

法要などに衆を呼び集めるために打ち鳴らす梵音具。

（池の間陰刻）

施主／須誉瀧個　為實誉宗壽大徳／常目頼心信女

摂孟嶋下郡粟生村／法蔵寺什物／住持／了全代　享保十四甲酉天／十二月十五日

銘によると、享保14(1729)年に、本寺六世実誉のために本寺了全の代に製作されたものである。

第4節　法泉寺の調査（笑面市粟生間谷東5－21－16）

73. 阿弥陀如来坐像（本尊）　1軀　平安時代か　86.5

衲衣を偏袒右肩に着し、右手は第1・2指とするが、左手は珍しく第1と第3・4指を結び左足を前にして結跏趺坐する。

ヒノキ材、玉眼嵌入、肉身金泥、衣部漆箔仕上げ。耳前を通る矧目がある。膝前別材矧。像底に板を張っているため、また全身の厚い漆箔のために構造の詳細は不明。

顔の造作が小さく、金箔が新しいために江戸時代の作と見えるが、堂々とした体軀で、特に両膝の張りがあって左足が大きく、左袖口が膝前に垂れるところは平安時代、10世紀頃の風がある。後頭部も蓋をするように別材を当てているようである。非常に重量もあり、頭体幹部は一木造かもしれない。これらのことから平安時代の像を江戸時代に大幅に改変した可能性がある。

74. 善導大師立像　1軀　木造　江戸時代　55.6

法然上人立像　1軀　木造　江戸時代　55.4

善導は顔をやや右に向けて口を開き、合掌して立ち、法衣の上から袈裟を掛ける。下半身は漆箔。法然は正面して胸前で数珠を執る。法衣の上から袈裟を掛ける。

両像とも寄木造、玉眼嵌入、彩色仕上げ。頭部は耳前を通る線で前後二材矧とし、体部に襟に沿って差し込む。体側中央やや前を通る線で、前後二材矧。足枘は別材差し込み。

（善導下半身背面朱漆書）

法泉寺中興／施主新家村／岸本半兵衛／法蓮社念誉上人照阿智旬／大和尚為一周忌菩提也

（法然下半身背面墨書）

法泉寺中興　施主新家村／法蓮社念誉上人照阿智旬大和尚為三廻忌菩提也／岸本半兵衛

銘によると、これらの像は法泉寺中興法蓮社念誉照阿智旬の一周忌のために新家村（粟生新家）の岸本半兵衛が施主となって造立したものである。念誉照阿智旬は過去帳によると、元文3(1738)年6月19日に没しているので、善導像は元文4年、法然像は元文5年の制作である。墓碑銘によると享年63であった。

75. 地蔵菩薩半跏像　1軀　39.2　江戸時代・享保12(1727)年　平田勝（庄）右衛門

（附）庄屋坐像　1軀　19.6　江戸時代　〃

観音菩薩半跏像　1軀　42.8　江戸時代・享保15(1730)年　〃

（附）庄屋妻坐像　1軀　17.5　江戸時代　〃

本尊の向かって右方の位牌段上に安置されている地蔵と観音の像である。地蔵は円頂で法衣の上から袈裟を掛け、右手に錫杖、左手に宝珠を持って左足を踏み下げる。観音は高髻を結い、裳を着て、条帛、天衣を掛け、右手に蓮華、左手は膝上にして、左足を踏み下げる。冠、胸飾、腕釧（銅製）を付ける。

地蔵はヒノキ材、寄木造、玉眼嵌入、肉身金泥、衣部漆箔仕上げ。頭部の構造は不明だが、体部に差し首とする。体幹部は前後二材矧、体側に各一材、膝前一材、裳先一材、垂下部二材、両手先・足先別材、体部は深く内刳りして墨を塗る。観音は頭部を前後二材矧、体部の構造は深い内刳りと黒漆塗りのために不明。髻は別材製、条帛垂下部矧付け、材は不明。その他は地蔵に同じ。いずれも深く内刳りを施しているので、極めて軽い。

これらの像の中には台座を彫り窪めて、地蔵には男性像、観音には尼の像が安置してあった。

男性像は髪を短く後頭部で結び、羽織を着て合掌し、正座する。尼像は内着の上に墨染めの衣を着し、布製の袈裟を掛けて合掌・正座する。

男性像の材は不明。玉眼嵌入、寄木造。頭部の構造は不明だが体部に差し首としている。体幹部は一材製で、背面に一材、両体側に各一材。合掌手は一材製か。面部に胡粉を厚く塗り、茶彩色。衣は朱彩。尼像の材はヒノキか。頭部の構造は不明。体幹部は前後二材矧で、両袖の外側に各一材を矧ぎ足す。全身に厚く胡粉を塗り、衣に墨を塗る。その他はほぼ男性像に同じ。地蔵像には少し台座後部の穴が見えるが、観音像はすっぽりと穴を覆っていて、内部は見えない。両像とも片足を踏み下げているが、これは結跏趺坐の場合、台座を滑り落ちて、夫婦像が見える危険性を避けるために、台座から外れないように考案されたものであろう。

ところで、地蔵・観音の両像の台座には次の墨書がある。

（地蔵台座框座天板裏墨書）

享保十二丁未歳／閏正月日／大佛師／平田勝右衛門作／大坂伏見町心斎橋

（地蔵台座框座側板内部墨書）

享保拾／貳丁未歳／正月吉日／平田／大佛師／勝右衛門／摂州大坂／伏見町／心斎橋

（観音台座框座側板内部墨書）

享保十五庚戌卯月吉日／大佛師平田庄右衛門作

これらによると、地蔵は享保12(1727)年に、観音は同15(1730)年に、いずれも大坂伏見町心斎橋の大仏師平田勝（庄）右衛門の制作したものである。庄屋夫妻像も、それぞれ地蔵・観音像と同時の作であろう。地蔵・観音像とも腰を絞った姿はよく、表情もつつましやかで、江戸時代としては本格的な作品である。そして、男性像と尼像は小さな人形のような上品な作品である。

仏像の内部に願文、経、仏像、遺骨、遺髪などを納めた例は多いが、このように俗人の像を（もっとも女性は尼姿であるが）、しかも台座を彫り窪めてまで安置した例を知らない。その理由については、住職の山下霊瑞氏から次のような話を伺うことができた。

粟生間谷地区は慶安２(1649)年以降、高槻藩に属していたが、年貢の取り立てが特に厳しかった。元禄11(1698)年に、何度も測量を行うことに腹を立てた庄屋の吉田太右衛門は、測量の竿を折ってしまっ

た。庄屋がオルグ活動を行っていることを知っており、捕らえる機会をねらっていた藩は、現在の公務執行妨害罪で妻もろとも捕らえて処刑した。二人の子供は、女中とともに隣の伊丹藩に逃げようとしたが、勝尾寺口で捕まり、斬首されてしまった。そこには石の地蔵菩薩がまつられ、一方、夫妻の切られた場所は、「死罰場」（勝尾寺川と相川の合流点）という地名が残っている。村人は、庄屋夫婦の死を悼んでのちにこれらの像を造り、観音講を設けて、明治初めまで夫婦の像を隠しつづけて供養したという。明治になり、藩もなくなったので、像は法泉寺に納められた。以後、同寺ではこの話を口伝してきたという。

元禄11(1698)年に事件があり、享保12(1727)年に地蔵が、同15年に観音が制作されている。それぞれ像の制作期が夫婦の30回忌と33回忌になるが、これは最終的には33回忌に合わせて供養のために制作したことがわかる。

それにしても、大仏師平田勝（庄）右衛門とは、どんな人物だろう。このような像の制作を引き受ければ、露見した場合には罰を受けずにはすむまい。ところで、この粟生間谷には平田姓の家が多い。想像するに、村人たちはこれらの像を制作するために、村の子供を心斎橋の仏師のもとに修業に出して彫刻技術を身に付けさせて制作させたのではないだろうか。事件後の30年という期間はこの4体の出来のよい仏像を製作する技術を習得するのに必要な時間であったように見える。大恩ある庄屋夫婦を永遠に、そして密かに供養するために村人たちは周到な用意をしたのではないだろうか。

ところで、浅見龍介氏の論考（「伊豆・旧吉田寺の阿弥陀三尊・毘沙門天像について－観音と地蔵を脇侍とする一作例－」『MUSEUM』第552号）によると、地蔵と観音を並べてまつる例は少なく、作例は鎌倉以前では11例であり、うち阿弥陀像の脇侍の例が8、観音・地蔵のみの例が3である。観音と地蔵を一具でまつるのは、経典に根拠はないが、中国では放光菩薩として信仰され、航海の安全と安産に対する功徳が見られたという。そして、日本では阿弥陀五尊のうちの三尊として、あるいは阿弥陀と僧形1、菩薩形1という省略形で現在残っている例が多いのではないかとされる。功徳としては、日本では、海難除けから転じて祈雨・止雨もあったかと推定されている。しかし、法泉寺像の場合は、像の中に安置する庄屋夫婦の性別に合わせて、男性の庄屋は僧形の地蔵を、妻はやさしい女性的な観音を選んだのかもしれない。

村人たちの庄屋夫婦に対する厚い報恩の思いが感動的な彫像である。このような例は全国でもまれであろう。

76. 仏涅槃図　1幅　江戸時代・正徳6(1716)年　175.6×134.4

釈迦が入滅する光景を描いた涅槃図は、宗派を問わず制作されたため、遺例は多い。その図様に二形式があり、釈迦が両手を体側に添えて横たわるタイプと手枕をするタイプである。後者は鎌倉中期以降一般的になったもので、本例もこれに属する。図様の上で注目されるのは、釈迦の母摩耶夫人が、向かって右から降下するのが普通であるのに、左から降下している点である。理由は不明であるが、時代の降下とともに、表現にバラエティが出てきたと解釈するだけでよいのであろうか。

（表具裏墨書）

摂州嶋下郡粟生村／霊教山法泉寺什物

為本誉願心禅門／安誉貞心禅尼

正徳第六丙申年二月十四日奇進／施主泉州大鳥郡堺之住人／味吉氏／長右衛門

これによると、本図は堺の味吉長右衛門が正徳6(1716)年に寄進したものである。同人が父母と思わ

れる両人のために建てた墓が本寺にあり、彼と本寺の強い結びつきが分かるが、しかし、遠く離れた堺の住人と本寺との関係については、不明である。脇田晴子氏のご意見では、味吉長右衛門が粟生間谷の出身だからであろうとのことである。

なお、墓碑銘によると、本誉願心禅門は元禄2(1689)年4月14日に、安誉貞心禅尼は正徳2(1712)年□月18日に没している。

77. 寒山拾得図　1幅　江戸時代　131.9×164.8

78. 鷹図　1幅　江戸時代　131.8×165.0

お わ り に

今回の調査は、茨木市佐保地区、福井地区と箕面市粟生間谷地区で実施した。

まず、第1の成果は、これまで不明であった神社や寺院の歴史がかなり明らかになったことである。井上正雄著『大阪府全志』では断片的なことしかわからなかったことが、仏像の足枘銘や仏画の裏書きなどによって、点から線へと神社・寺院の歴史がわかってきた。詳細については、別の機会に譲る。

第2の成果として、歴史・美術などの新資料の発掘が多量になされたことである。佐保地区の言代神社奉納の鉄弾・連隊旗が、当地が優秀な軍人を輩出したことを示しており、近代史料として興味深い。また、福井地区の真龍寺の喚鐘は、地元の鋳物師谷山長右衛門の製作で、地元の産業資料として注目される。信仰資料としては、粟生間谷地区法泉寺の地蔵・観音の内部に納められた庄屋夫妻像に勝るものはない。全国的にも大変珍しい例である。

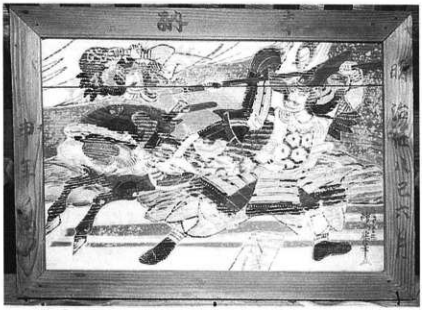
美術史について述べよう。佐保・福井地区の真宗大谷派の寺院で足枘に東本願寺お抱えの仏師銘が複数見られたことである。教願寺の「宗重」、教圓寺の「宗真」（住職の言）、遍照寺の「長門」で、東本願寺のお抱え仏師は複数おり、西本願寺で「渡辺康雲」が代々世襲した様子とはだいぶ異なることが明らかになった。

箕面地区法蔵寺の阿弥陀如来立像、法泉寺の阿弥陀如来坐像、善福寺の阿弥陀如来坐像は、大きく後世の手が入っているが、制作期は古く、勝尾寺下にある由緒を物語るようである。

絵画では福井地区真龍寺の真言八祖画像6幅が、この種絵画の大作として注目される。同地区新屋坐天照御魂神社の境内図、三十六歌仙篇額、三番叟図も近代絵画として今後検討されるべきものである。

最後に、ご協力いただきました各所蔵者ならびに関係の方々に厚くお礼申し上げます。また、調査をお手伝いいただき、種々ご教示いただきました次の方々にもお礼申し上げます。

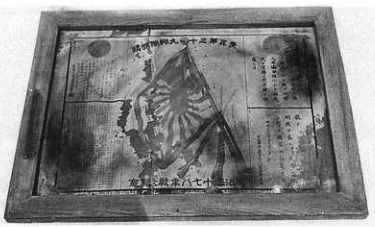
飯島正明・泉　武夫・大久保　聖・川畑澄雄・古谷　真・免山　章・免山　篤　（敬称略）



1　川中島合戦図

2　銃弾

4　佐藤忠信図



3　連隊旗図

5-1　阿弥陀如来立像

5-2　同　台座心棒墨書

6-1　七高祖像

6-2　同裏　墨書貼付

7　聖徳太子像裏　墨書貼付

9-1　親鸞聖人像

9-2　同裏　墨書貼付

10-1　蓮如上人像

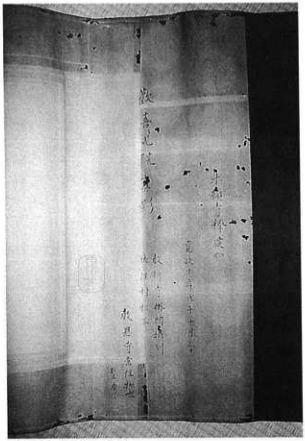
10-2　同裏　墨書貼付

14　山水図

11-1　従如上人像

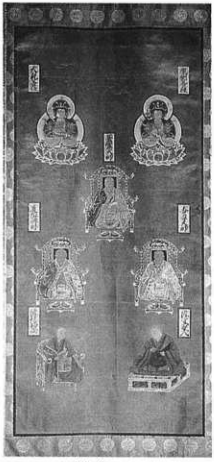
11-2　同裏　墨書

12-1　乗如上人像



12-2　同裏　墨書

17　阿弥陀如来立像



18-1　七高祖像

18-2　同裏　墨書

19-1　聖徳太子像

19-2　同裏　墨書

21-1　蓮如上人像

21-2　同裏　墨書

20　親鸞聖人像

22　喚鐘

佐保地区（教願寺1）

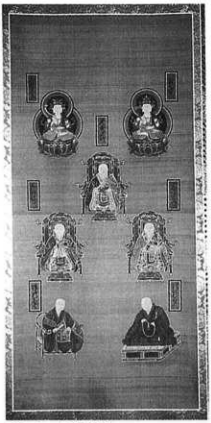
23-1　阿弥陀如来立像

23-2　同　左足枘焼印

23-3　同　右足枘焼印

24　阿弥陀如来立像

25　如来立像



26-1　七高祖像

26-2　同裏　墨書貼付

27-1　聖徳太子像

27-2　同裏　墨書貼付

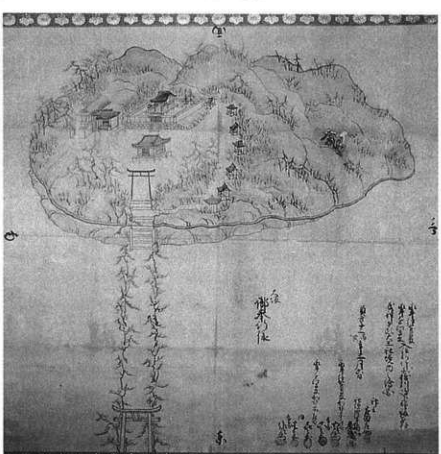
29-1　六字名号

29-2　同裏　墨書

佐保地区 〔教願寺3〔上段〕〕 福井地区 〔新屋坐天照御魂神社1〔下段〕〕

28 蓮如上人像

30 喚鐘



31 境内図

32-1　三十六歌仙図扁額（小野小町）

32-2　同（紀貫之）

32-3　同（僧正遍照）

32-4　同（柿本人麻呂）

33-1　三番叟図

33-2　同

34-1　阿弥陀如来立像

34-2　同　足枘墨書

34-3 同　台座内墨書

35-1　七高祖像

35-2　同裏　墨書

36-1　聖徳太子像

36-2　同裏　墨書

38-1　蓮如上人像

38-2　同裏　墨書

福井地区（遍照寺3（上段）・無量寺1（下段））

37　親鸞聖人像

39　六字名号

40　弥勒菩薩坐像

41　阿弥陀如来坐像

42　地蔵菩薩立像

44　弘法大師坐像

43　不動明王および二童子立像

45　磬子

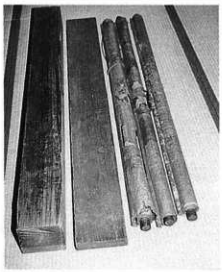
46-1　真言八祖像（龍猛）

46-2　同（龍智）

46-3　同（不空）

46-4　同（善無畏）

46-5　同（恵果）


46-7　同　軸及び箱

47-1　不動明王坐像

47-2　同　左側面

47-3　同　背面

47-4　同　像底

48　大日如来坐像

49　行基菩薩坐像

50　地蔵菩薩半跏像

51　釈迦如来坐像

52-1　四天王立像（持国天）

52-2　同（増長天）

52-3　同（多聞天）

52-4　同（広目天）

52-5　同　多聞天立像台座内墨書

55　鑿子

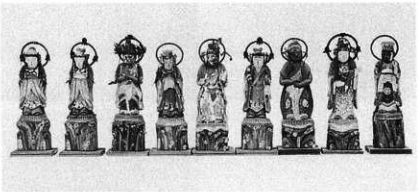
56　鍔口

57　喚鐘

53　観音菩薩立像

54　弘法大師坐像

58-1　牛頭天王立像



58-2　九曜星立像

59　十一面観音立像

60-1　歓喜天立像

60-2　同　厨子

60-3　同　厨子内壁画

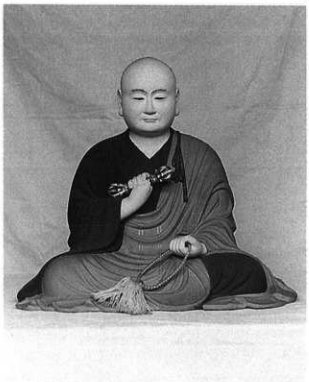
62-1　阿弥陀如来坐像

62-2　同　左側面

62-3　同　背面

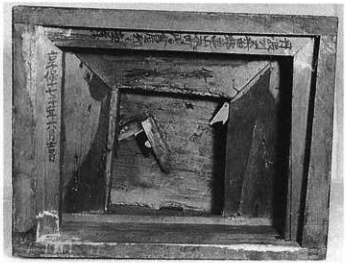
62-4　同　像底

61　阿弥陀如来立像



64　弘法大師坐像

63-1　不動明王立像

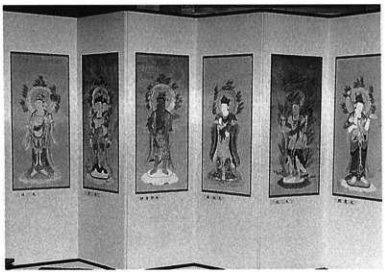


63-2　同　台座内墨書

65　役行者倚像

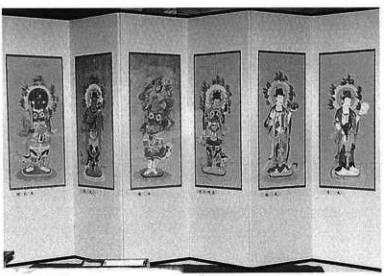
66　賓頭盧尊者坐像

68　仏涅槃図



67-1　十二天図屏風

67-3　同（梵天）



67-2　同

67-4　同（火天）

69-1　阿弥陀如来立像

69-2　同　左側面

69-3　同　背面

69-4　同　頭部正面

69-5　同　頭部左側面

70　観音・勢至菩薩立像

71-1　法然上人坐像

71-2　善導大師坐像

72-1　喚鐘

72-2　同　銘

72-3　同　銘

73-1　阿弥陀如来坐像

73-2　同　側面

73-3　同　背面

73-4　同　両脚部

75-1　地蔵菩薩半跏像

75-2　同　左側面

75-3　同　背面

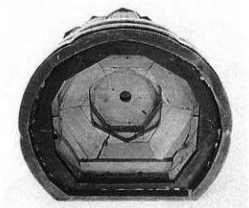
75-4　観音菩薩半跏像

75-5　同　左側面

75-6　同　背面

75-7　地蔵菩薩像台座内墨書

75-8　同



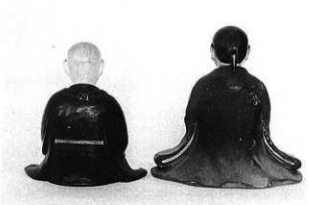
75-9　観音菩薩像台座内墨書

75-10　同　拡大

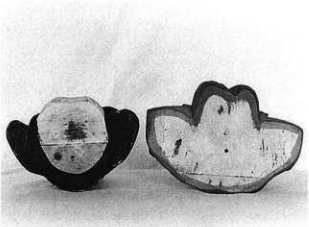
75-11　伝庄屋夫妻坐像

75-12　伝庄屋夫妻坐像

75-13　同　左側面

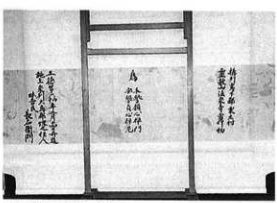


75-14　同　背面



75-15　同　像底

76-1　仏涅槃図



76-2　同裏　墨書

77　寒山拾得図

78　鷹図

報告書抄録

ふりがな	さいと(こくさいぶんかこうえんとし)しゅうへんちいきのれきし・ぶんかそうごうちょうさほうこくしょ
書名	彩都(国際文化公園都市)周辺地域の歴史・文化総合調査報告書
シリーズ名	(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書
シリーズ番号	第40集
編著者名	山城　統・小島久美・塚田　孝・八木　滋・印藤昭一・西村和江・多久和優志・田中ひとみ 免山　篤・井藤暁子・武智陽子・村上年生・久米雅雄・井本伸廣・高橋　学・大場　修 藤澤典彦・吉原忠雄　(編集：井藤暁子)
編集機関	(財)大阪府文化財調査研究センター
所在地	〒536－0016　大阪市城東区蒲生２丁目11番３号　小森ビル４階
発行年月日	1999（平成11）年３月31日

ふりがな 調査地域	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査原因
宿久庄(しくのしょう)	大阪府茨木市(おおさかふいばらきし)	茨木市		免山		199507～	国際文化公園都市特定
東福井(ひがしふくい)		27211		34度	135度	199903	土地区画整理事業に伴
粟生岩阪(あおいわさか)				52分	31分		う調査
佐保(さほ)				10秒	42秒		
泉原(いずはら)				徳大寺			
千提寺(せんだいじ)				34度	135度		
粟生間谷(あおまだに)	大阪府箕面市(おおさかみのおし)	箕面市		50分	31分		
		27220		42秒	38秒		

特記事項	大阪北部丘陵を開発する彩都(国際文化公園都市)建設によって影響を受ける周辺部地域の歴史・文化総合調査報告書。民俗・歴史・地学・地理・建造物・石造物・美術工芸品の７部門に分け、今後に建設される都市づくりに資するために3.5年間の調査・報告書作成を続けた成果。地域的な特色として石切場・鉱山、とくに教科書に掲載されるほど著名なザビエル像が発見された千提寺、下音羽のキリシタン遺跡をはじめとした忍頂寺五ヶ庄地域の調査が中心となった。中世名田・名主書上文書の調査によって、キリシタン遺物所蔵家の出自が推測できるようになった。

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第40集
彩都(国際文化公園都市)周辺地域の歴史・文化総合調査報告書

1999（平成11）年３月31日発行

編集・発行　(財)大阪府文化財調査研究センター
〒536－0016
大阪市城東区蒲生２丁目11番３号 小森ビル４Ｆ
TEL 06－6934－6651　FAX 06－6934－7029

印　　刷　株式会社　中島弘文堂印刷所